箱　崎　30

— 箱崎遺跡第37次・第45次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第951集

2007

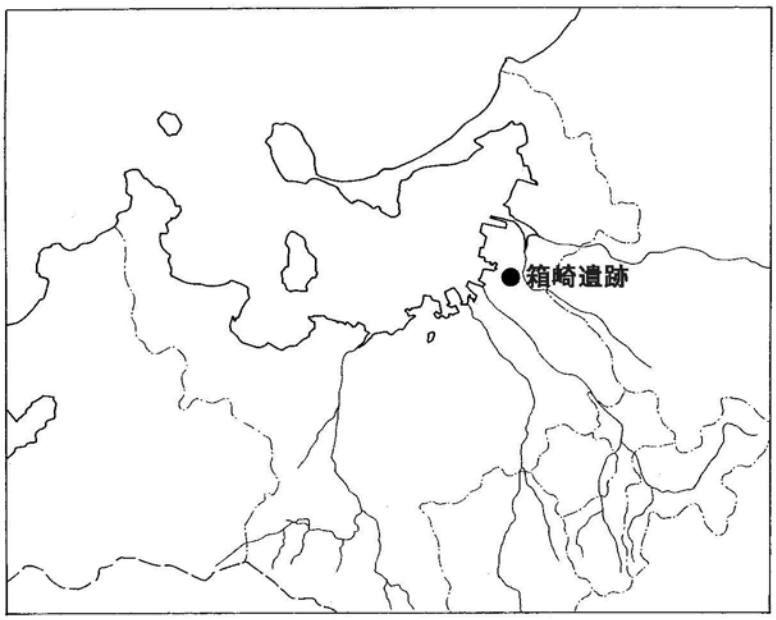
福岡市教育委員会

HAKO ZAKI

箱 崎 30

— 箱崎遺跡第37次・第45次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第951集



2007

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから東アジアとの対外交渉の窓口として発展してきました。このような環境のもとに数多くの埋蔵文化財が残されており、本市におきましてはこの保護と活用に努めているところであります。

本書は東区馬出５丁目における都市計画道路馬出東浜線建設に伴い実施した箱崎遺跡第37・第45次調査の記録です。調査の結果、多量の輸入陶磁器の出土を含め、中世箱崎の歴史を知るうえで多くの貴重な資料を得ることができました。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財保護のご理解の一助として、また研究資料として役立てば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり土木局をはじめとする多くの方々のご理解、ご協力を賜りましたことに対し、心より感謝の意を表する次第です。

平成19年3月30日

福岡市教育委員会
教育長　植木 とみ子

箱崎遺跡の位置と環境

本文目次

Ⅰ．位置と環境 …… 1
Ⅱ．これまでの調査 …… 4

挿図目次

第１図　周辺遺跡分布図（1/25,000）…… 2
第２図　箱崎遺跡調査区位置図（1/5,000）…… 3

箱崎遺跡第37次調査の記録

本文目次

Ⅰ．はじめに …… 7
　1．調査に至る経過 …… 7
　2．調査の組織 …… 7
Ⅱ．発掘調査の記録 …… 11
　1．発掘調査の概要 …… 11
　2．検出遺構と出土遺物 …… 14
　（1）井戸 …… 14
　（2）土坑 …… 25
　（3）埋葬遺構 …… 47
　（4）溝状遺構 …… 47
　（5）その他の出土遺物 …… 49
Ⅲ．おわりに …… 50

挿図目次

第１図　第37次調査区位置図（1/ 500 ）…… 8
第２図　第37次調査遺構配置図（1/150）…… 9
第３図　土層実測図（1/50）…… 10
第４図　SE-1･2実測図（1/40）…… 11
第５図　SE-1出土遺物実測図（1/3 ・ 1/4）…… 12
第６図　SE-1出土遺物実測図（1/4）…… 13
第７図　SE-1･2出土遺物実測図（1/3 ・ 1/4）…… 14
第８図　SE-81実測図（1/40）…… 15
第９図　SE-124実測図（1/40）…… 16
第10図　SE-124出土遺物実測図（1/3）…… 17
第11図　SE-226･229実測図（1/40）…… 18
第12図　SE-226･229出土遺物実測図（1/3）…… 19
第13図　SE-236実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）…… 20
第14図　SE-295実測図（1/40）…… 21
第15図　SE-295出土遺物実測図（1/3 ・ 1/4）…… 22
第16図　SE-296実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）…… 23
第17図　SE-297実測図（1/40）…… 24

第18図　SE-297出土遺物実測図（1/3）…… 25
第19図　SE-343・364実測図（1/40）…… 26
第20図　SE-365・367実測図（1/40）…… 27
第21図　SE-343・364・365・367出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 28
第22図　SK-11・22・31・32・41・50・51実測図（1/40）…… 29
第23図　SK-11・22・31出土遺物実測図（1/3）…… 30
第24図　SK-32・41・50・51出土遺物実測図（1/3）…… 31
第25図　SK-52・53・72・102・105・107・109実測図（1/40）…… 32
第26図　SK-52・53・72・102・105・107・109出土遺物実測図（1/3）…… 33
第27図　SK-120・123・130・134・138・142・143実測図（1/40）…… 36
第28図　SK-120・123・134・138・142・143出土遺物実測図（1/3）…… 37
第29図　SK-158・166・173・184・186・196・205・208実測図（1/40）…… 38
第30図　SK-158・166・173・184・186・205・208出土遺物実測図（1/3）…… 39
第31図　SK-238・293・311・322・326・342実測図（1/40）…… 40
第32図　SK-238・293・311・326・342出土遺物実測図（1/3）…… 41
第33図　SK-294実測図（1/40）…… 42
第34図　SK-294出土遺物実測図（1/3）…… 43
第35図　SK-294出土遺物実測図（1/3）…… 44
第36図　SK-294出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 45
第37図　SK-290実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）…… 47
第38図　SD-155・280・341・360・366・376断面実測図（1/40）…… 48
第38図　SD-155・280・341・360・366・376出土遺物実測図（1/3）…… 48
第39図　その他の出土遺物実測図（1/1・1/3）…… 49

図版目次

図版1　1．調査区東遠景　2．調査区西遠景
図版2　1．調査区東全景（西から）　2．調査区西全景（西から）
図版3　1．SE-1・2（南から）　2．SE-1・2（東から）　3．SE-81（南から）
　　4．SE-124（西から）　5．SE-226（北から）　6．SE-229（北から）
図版4　1．SE-236（西から）　2．SE-296（北から）　3．SE-297（東から）
　　4．SE-343（東から）　5．SE-364（北から）　6．SE-365（西から）
図版5　1．SE-367（北から）　2．SK-22（東から）　3．SK-31土層（南から）
　　4．SK-31（西から）　5．SK-32・41（東から）　6・SK-52（北から）
図版6　1．SK-53（北から）　2．SK-109（西から）　3．SK-120（北から）
　　4．SK-123（西から）　5．SK-138（北から）　6．SK-158（北から）
図版7　1．SK-173（西から）　2．SK-184（西から）　3．SK-186（南から）
　　4．SK-196（南から）　5．SK-208（東から）　6．SK-238（東から）
図版8　1．SK-290（東から）　2．SK-293（北から）　3．SK-294（南から）
　　4．SK-294土層（西から）　5．SK-326（北から）　6．SK-342（東から）

本文目次

箱崎遺跡第45次調査の記録
Ⅰ．はじめに …… 63
　1．調査に至る経過 …… 63
　2．調査の組織 …… 63
　3．箱崎遺跡第45次調査地点の位置 …… 63
Ⅱ．発掘調査の記録 …… 65
　1．発掘調査の概要 …… 65
　2．検出遺構と出土遺物 …… 65
　（1） 掘立柱建物 …… 65
　（2） 井戸 …… 68
　（3） 土坑 …… 76
　（4） その他の遺構 …… 85
　（5） その他の出土土器 …… 86
　（6） 金属製品・石製品 …… 86
Ⅲ．おわりに …… 86

挿図・図版目次

第1図　箱崎遺跡第45次調査区の位置（1/500） …… 64
第2図　遺構の配置（1/80） …… 66
第3図　SB-050実測図（1/60） …… 67
第4図　SB-050出土遺物実測図（1/3・1/4） …… 67
第5図　SE-010実測図（1/40） …… 69
第6図　SE-010出土遺物実測図（1/3・1/4） …… 70
第7図　SE-011実測図（1/40） …… 71
第8図　SE-011出土遺物実測図（1/3・1/4） …… 72
第9図　SE-012実測図（1/40） …… 73
第10図　SE-012出土遺物実測図（1/3） …… 74
第11図　SE-047実測図（1/40） …… 75
第12図　SE-047出土遺物実測図（1/3・1/4） …… 75
第13図　SK-015遺物出土状況実測図（1/20） …… 76
第14図　SK-015出土遺物実測図（1/3・1/4） …… 77
第15図　SK-006・007・009・016・020・023・028・029・030実測図（1/40） …… 79
第16図　SK-006・009・016・020・023出土遺物実測図（1/3） …… 80
第17図　SK-028・029・030出土遺物実測図（1/3・1/4） …… 81
第18図　SK-032・033・036・037実測図（1/40） …… 83
第19図　SK-032・033・036・037出土遺物実測図（1/3） …… 84
第20図　SX-004出土遺物実測図（1/3） …… 85
第21図　SX-004・021実測図（1/40） …… 85
第22図　その他の出土土器実測図（1/3・1/4） …… 87
第23図　金属製品・石製品実測図（264は1/2、他は1/1） …… 88

扉　調査区から西方を望む
図版1　1．調査区全景（東から）2．SB-050（南から）
図版2　1．SE-010（北西から）2．SE-010井戸側（北西から）
図版3　1．SE-011（北から）　2．SE-011井戸側（北から）
図版4　1．SE-012（南東から）2．SE-012井戸側（南東から）
図版5　1．SE-047（北西から）2．SK-015（南西から）　3．SK-006（北西から）
　　4．SK-023（西から）　5．SK-030（西から）

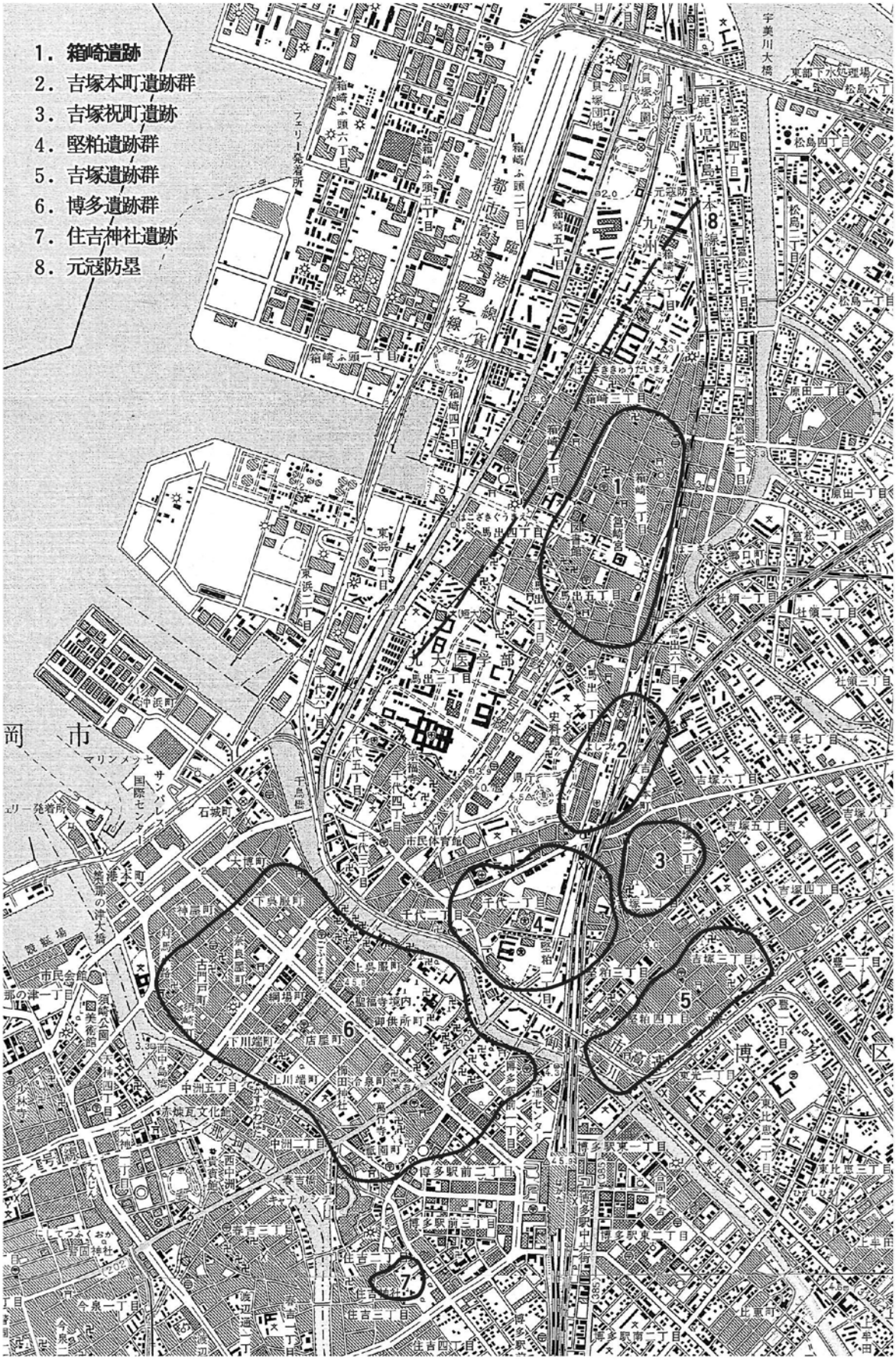
箱崎遺跡の位置と環境

Ⅰ．位置と環境

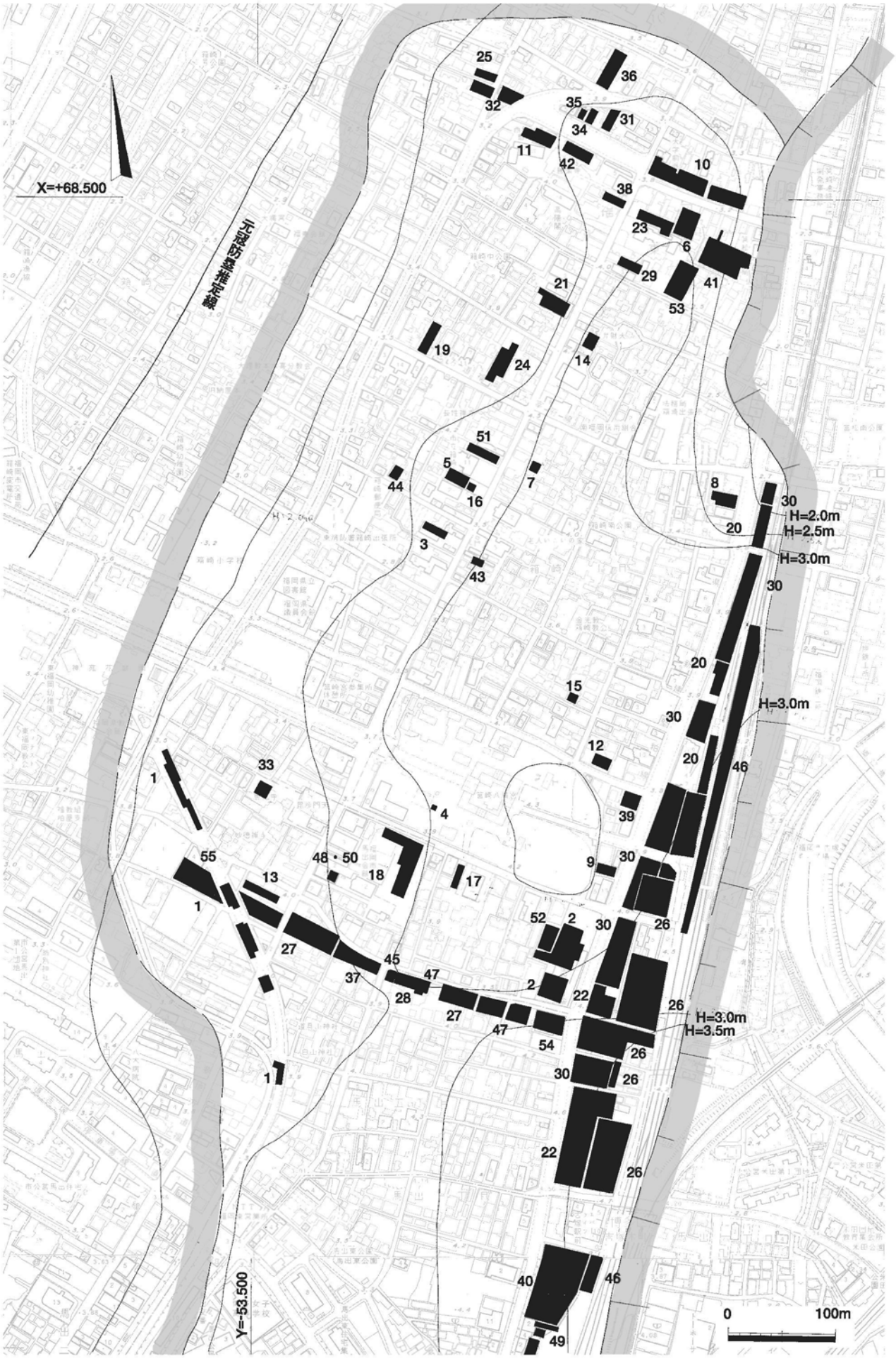
箱崎遺跡は宇美川下流域、多々良川河口左岸の博多湾に面し、南北に延びる砂丘上に位置する。この砂丘は箱崎砂層と呼ばれ、本遺跡付近から室見川河口付近まで分布しており、本遺跡を含め多くの遺跡が立地している。砂丘の形成時期は考古学的及び地質学的調査成果から縄文時代後期以降と考えられている。本遺跡が分布しているのは概ね南北1000ｍ、東西500ｍの範囲で標高2.0～3.5ｍを測る。

本遺跡は1983年の地下鉄建設に伴う第１次調査以来、50次を越える調査が行われているが、調査が本格化するのは1990年代以降で、縄文時代晩期～近世に至る各時期の遺構、遺物が確認されている。縄文時代晩期～弥生時代は第６次調査において出土した磨製石斧が最も古く、縄文時代晩期～弥生時代前期初頭のものと考えられるが、該期の遺構に伴わない。弥生時代中期～後期の土器は１８・30次調査で確認されている。古墳時代は竪穴住居や円形及び方形周溝墓等が確認されている。８次調査では飯蛸壺を多量に出土しており、生業を考える上で興味深い。奈良時代になると遺物は散見されるものの遺構については判然としない。10世紀に入ると以降の箱崎遺跡の中心となる筥崎宮が創建される。延喜21年に八幡神の託宣により、穂波郡大分宮から遷座して延長元年に建てられたとされる。それは大分宮の節会に参詣する大宰府の役人が竈門宮に不敬を行う、郡司百姓等が饗膳するのに険しい山越えをしなければならない、放生会を行うのに海ではないため不適当であるという３つの理由からとされる。しかし実際のところ、新羅に対する宗教的防御や、この地が対外貿易の地点として重要であったことも大きく作用したと考えられている。この時期の遺構は後の時期に比べさほど多くなく、筥崎宮の東を中心に分布する。これ以降遺跡は西側に拡大して行き、13世紀代以降にはほぼ全域に分布する。また25・32・36次調査によって遺跡の範囲が北及び北東側に拡大することが確認されている。

周辺の遺跡をみると南へ続く砂丘上に吉塚本町遺跡群、吉塚祝町遺跡、堅粕遺跡群、吉塚遺跡群、博多遺跡群が存在している。吉塚本町遺跡群は弥生時代～古代にかけての遺物、遺構が確認されている。出土する瓦や硯から公的施設の存在が考えられている。吉塚祝町遺跡は道路建設に伴って1996年に確認された遺跡である。遺跡を縦断するように行われた第１次調査では弥生時代から中世に至る各時期の遺構が確認され、弥生時代の甕棺墓、古墳時代の住居址、横穴式石室、石棺墓、土壙墓、古代～中世の集落が検出されており、古代においては越州窯系青磁が多量に出土しており注目されている。中世については13世紀～14世紀前半を中心に栄え、それ以降急速に衰退する。堅粕遺跡群は吉塚本町遺跡群の南に位置し、弥生時代～古代にかけての遺構が確認されている。北側に弥生時代～古墳時代の遺構が集中し、南側に古墳時代後期から古代の遺構が多くみられる。古代においては越州窯系青磁、緑釉陶器、墨書土器等の出土遺物から公的施設が存在する可能性が考えられている。吉塚遺跡群は吉塚祝町遺跡、堅粕遺跡群の南東に位置し、弥生時代～近世に至る遺物、遺構が検出されている。特筆すべき遺物として貨泉の出土が挙げられる。吉塚遺跡群の南には国際貿易都市として中世を代表する遺跡の一つであり、箱崎遺跡と関係の深い博多遺跡群が位置する。出土する輸入陶磁器類は質、量共に他を圧倒している。調査はすでに150次を超え、弥生時代～近世に至る遺構、遺物が確認されている。さらに南には住吉神社遺跡が位置する。2004年に第１次調査が行われ、中世の遺構が確認されている。



第１図　周辺遺跡分布図（1/25,000）



第２図　箱崎遺跡調査区位置図（1/5,000）

Ⅱ．これまでの調査

調査次数	所在地	面　積	調査期間	時　期	主な遺構	報告書
第１次	馬出５丁目地内	5000㎡	1983.7.4～12.18	12世紀後半～15世紀	井戸　土坑　溝　埋葬遺構	第193集
第２次	箱崎１丁目18-32外	1500㎡	1986.11.22～1987.1.20	10世紀後半～15世紀	建物地業　建物布張状遺構　井戸　土坑　溝　粘土壙　集石遺構	第79集(県)
第３次	箱崎１丁目2731-1	156㎡	1990.1.9～2.21	12世紀後半～15世紀	井戸　土坑　溝	第262集
第４次	箱崎１丁目2761		1989.7.5	11世紀	土坑（瓦経）	年報Vol.4
第５次	箱崎１丁目25・27	210㎡	1991.9.9～10.30	12世紀～15世紀	掘立柱建物　柵列　井戸　土坑　埋葬遺構	第273集
第６次	箱崎３丁目2437-1・4	430㎡	1994.10.20～1995.1.31	12世紀後半～13世紀	井戸　土坑　溝	第459集
第７次	箱崎１丁目2711外	85㎡	1994.11.15～12.27	12世紀前半～13世紀	井戸　土坑	第459集
第８次	箱崎１丁目2549-1外	225㎡	1996.10.1～11.14	古墳時代 12世紀中頃～13世紀	古墳時代の竪穴住居 土坑　中世の溝　井戸　土坑	第591集
第９次	箱崎１丁目1935-1	191㎡	1996.10.2～10.29	11世紀～13世紀	井戸　土坑　溝	第550集
第10次	箱崎３丁目地内	1020㎡	1996.11.11～1997.3.31	12世紀前半～13世紀	井戸　土坑　溝	第551集
第11次	箱崎３丁目3266-1外	385㎡	1997.4.30～6.27	12世紀後半～14世紀	井戸　土坑　ピット	第592集
第12次	箱崎１丁目2606-1・3	155㎡	1997.8.19～9.22	11世紀～13世紀	井戸　土坑　溝　埋葬遺構	第950集
第13次	馬出５丁目520・521	297㎡	1997.10.27～12.2	15世紀	掘立柱建物　井戸　土坑　溝	第592集
第14次	箱崎１丁目28-15	36㎡	1998.4.2～5.23	12世紀後半～14世紀前半	土坑　溝	第625集
第15次	箱崎１丁目2615	36㎡	1998.5.25～6.5	11世紀後半～12世紀	土坑　溝	第810集
第16次	箱崎１丁目2725	56㎡	1999.1.18～1.29	11世紀～15世紀	井戸　土坑	第703集
第17次	箱崎１丁目20-19	40㎡	1999.3.13～3.31	12世紀中頃～17世紀	土坑　溝　ピット	第704集
第18次	馬出５丁目470	920㎡	1999.6.14～9.28	12世紀中頃～16世紀	井戸　土坑　溝	第664集
第19次	箱崎１丁目2940-1	160㎡	1999.7.29～8.27	12世紀後半～14世紀	掘立柱建物　井戸　土坑　溝	第664集
第20次	箱崎１丁目地内	882㎡	1999.12.13～2000.3.31	古墳時代　11～13世紀	古墳時代の竪穴住居　中世の溝　井戸　土坑 埋葬遺構	第768集
第21次	箱崎１丁目2480	545㎡（2面）	2000.3.29～6.26	12世紀中頃～14世紀	掘立柱建物　井戸　土坑　溝　埋葬遺構	第705集
第22次	馬出５丁目・箱崎１丁目	2976㎡	2000.7.24～2001.3.31	古墳時代　古代末～中世	古墳時代の竪穴住居　埋葬以降　古代末～中世の溝　井戸　土坑 埋葬遺構	第811集
第23次	箱崎３丁目2404	188㎡	2000.9.22～2000.11.2	13世紀～17世紀	井戸　土坑	第704集
第24次	箱崎１丁目2511外	397㎡	2000.10.23～2001.1.31	12世紀後半～14世紀	井戸　土坑　木棺墓	第768集
第25次	箱崎３丁目地内	87㎡	2001.4.16～4.26	13世紀後半～14世紀	土坑	整理中
第26次	箱崎１丁目地内	5255㎡	2001.5.5～2002.3.29	古墳時代　11～13世紀	古墳時代の周溝墓　中世の溝　井戸　土坑　埋葬遺構	第816集
第27次	馬出５丁目地内	1449㎡	2001.6.7～2002.2.10	12世紀～近世	井戸　土坑　溝　埋葬遺構	第812集
第28次	馬出５丁目24-8	41㎡	2001.7.2～7.12	中世後半	土坑　ピット	整理中
第29次	箱崎３丁目2398外	80㎡	2002.4.1～2002.4.26	12世紀～13世紀	土坑　溝　池状遺構	第813集
第30次	箱崎１丁目地内	4997㎡	2002.4.9～2003.5.13	古墳時代　古代末～中世	古墳時代　竪穴住居　古代末～中世　掘立柱建物　井戸　土坑　溝	第948集
第31次	箱崎３丁目3358-1	80㎡	2002.5.9～2002.6.14	12世紀～13世紀	井戸　土坑　溝	第813集
第32次	箱崎３丁目地内	442㎡	2002.4.22～9.20	13世紀～	井戸　土坑　溝　埋葬遺構	整理中
第33次	馬出５丁目502・503	160㎡	2002.9.24～10.8	12世紀～	井戸　土坑　溝　埋葬遺構	整理中
第34次	箱崎３丁目3356-1	70㎡	2002.11.14～12.2	12世紀後半～14世紀	井戸　土坑	整理中
第35次	箱崎３丁目9-33	32㎡	2002.12.2～12.10	13世紀後半～14世紀	井戸　土坑	整理中
第36次	箱崎３丁目3380	199㎡	2002.12.11～2003.2.21	14世紀～15世紀	井戸　土坑　溝	整理中
第37次	馬出５丁目地内	493㎡	2002.12.13～2003.3.31	12世紀～	井戸　土坑　溝	第951集
第38次	箱崎３丁目9-49	90㎡	2003.2.3～3.8	13世紀～近世	井戸　土坑	第814集
第39次	箱崎１丁目2031外	149㎡	2003.4.10～5.9	12世紀代	井戸　土坑　溝	第854集
第40次	箱崎1丁目地内・馬出1丁目30	2900㎡	2003.5.14～2004.3.31	弥生時代後期　古墳時代　10～15世紀	井戸　土坑　溝　掘立柱建物　小石室　方形状の溝　円形竪穴状遺構	第949集
第41次	箱崎３丁目2426外	1000㎡	2003.9.16～12.11	12世紀後半～13世紀	井戸　土坑　溝　埋葬遺構	第854集
第42次	箱崎３丁目	260㎡	2003.10.21～2004.1.21	12世紀～14世紀	井戸　土坑　溝　方形竪穴状遺構	整理中
第43次	箱崎１丁目2697-1	83㎡	2003.11.21～12.5	11世紀～12世紀	土坑　ピット	整理中
第44次	箱崎１丁目35-3	114㎡	2004.2.16～3.15	12世紀～14世紀	井戸　土坑　ピット	第854集
第45次	馬出５丁目地内	152㎡	2004.3.1～3.22	12世紀～13世紀	井戸　土坑　ピット	第951集
第46次	箱崎１丁目地内	3000㎡	2004.7.1～2005.3.29	古墳時代初頭 11世紀～15世紀	井戸　土坑　溝	第949集
第47次	馬出５丁目地内	1000㎡	2004.7.21～2005.4.13	古代後半～中世後半	井戸　土坑　溝	整理中
第48次	馬出５丁目461-1	87㎡	2004.11.26～11.28	近世	土坑　ピット	整理中
第49次	馬出１丁目30地内	495㎡	2005.4.1～2006.2.13	古墳時代、12～14世紀	井戸　土坑　ピット　溝　埋葬遺構　方形竪穴状遺構	第949集
第50次	馬出５丁目461-1	69㎡	2005.5.12～6.4	中世後半～近世	掘立柱建物　井戸　土坑　溝状遺構　柱穴	整理中
第51次	箱崎１丁目36-37	257㎡	2006.1.16～4.11	11～13世紀	整地層　井戸　土坑　柱穴	整理中
第52次	箱崎１丁目1925他	351㎡	2006.6.19～8.28	弥生後期～古墳前期 12～5世紀	住居？　井戸　土坑　溝　柱穴	整理中

箱崎遺跡第37次調査の記録

例　言

1．本書は福岡市教育委員会が都市計画道路馬出東浜線建設に伴い、東区馬出５丁目地内において実施した箱崎遺跡第37次調査の報告書である。

2．本書で報告する各調査の調査番号、遺跡略号等は以下のとおりである。

遺跡調査番号	０２５３		遺 跡 略 号	ＨＫＺ-３７	
調査地地籍	東区馬出５丁目２５番地内		分布地図番号	３４　箱崎　２６３９	
開 発 面 積	９９０㎡	調査対象面積	９９０㎡	調 査 面 積	４９３㎡
調 査 期 間	２００２年（平成１４年）１２月１６日～２００３年（平成１５年）３月３１日				

3．本書に掲載した遺構実測図の作成は中村啓太郎、高木誠、上田龍児、安藤史郎が行った。

4．本書に掲載した遺物実測図の作成は一部を調査担当者、丸尾弘介、景山貴昭が行い、その他を埋蔵文化財サポートに委託した。

5．本書に掲載した挿図の製図は調査担当者の他、林由紀子が行った。

6．本書に掲載した遺構、遺物写真の撮影は調査担当者が行った。

7．本書で記述する陶磁器の分類は以下の文献を参考とした。
太宰府市教育委員会「大宰府条坊跡XV」　太宰府市の文化財第49集

8．本調査に関わる記録、遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管される予定である。

9．第37次調査の執筆は中村が行った。

Ⅰ．はじめに

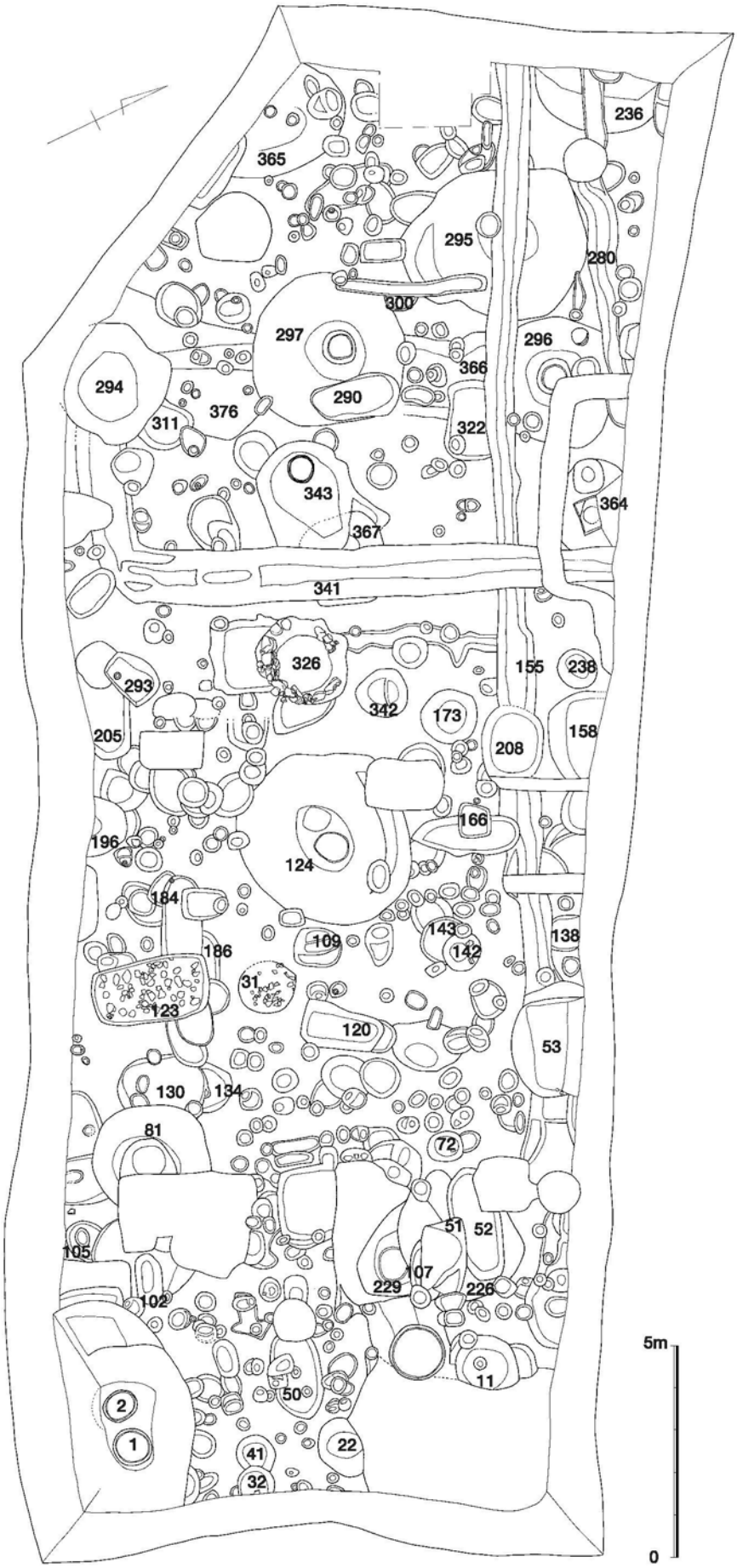
１．調査に至る経過

平成10年6月23日、福岡市土木局東部建設第1課より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課へ都市計画道路馬出東浜線建設に伴う福岡市東区馬出・箱崎地内における埋蔵文化財の事前審査について依頼がなされた。これを受けた埋蔵文化財課では事業計画地が東側では周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡に含まれ、西側では元寇防塁の推定ラインにかかることから試掘調査が必要であるとの判断がなされた。用地買収が行われた地点より試掘調査を順次行い、その結果、分布地図上の箱崎遺跡とほぼ同じ範囲で井戸、土坑、ピット等の遺構が検出された。この成果をもとに協議を重ねたが現状での設計変更は不可能であり、恒久的施設との判断から、調査可能な面積がある程度まとまって確保できる平成13年度より調査を開始した。第37調査は平成13年12月16日より開始し、平成15年3月31日に終了した。

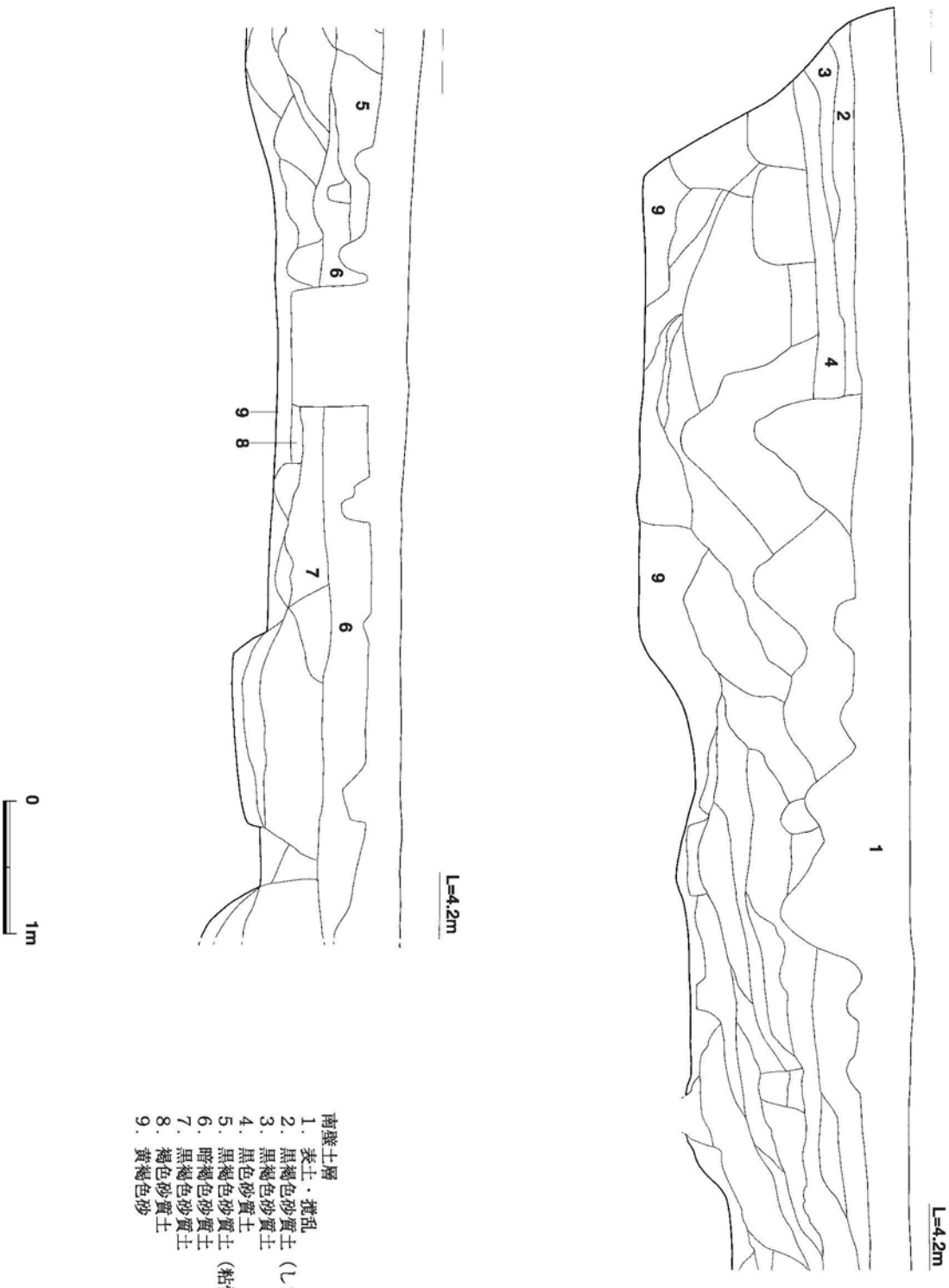
２．調査の組織

事業主体　福岡市土木局道路建設部東部建設課
調査主体　福岡市教育委員会
調査総括　埋蔵文化財課長　山口譲治
　　調査第２係長　池崎譲二
事前審査　事前審査係長　濱石哲也
　　事前審査係　井上繭子
調査庶務　文化財整備課管理係　鈴木由喜　御手洗清（前任）
調査担当　調査第２係　中村啓太郎
調 査 員　高木　誠　上田龍児（現柳川市教育委員会）
発掘作業　小川秀雄　園田　豊　徳永栄彦　吹春哲男　宮崎雅秀　井上ヨシ子　田中フキ子
　　光安晶子　田端名穂子　中村幸子　花田則子　安藤史郎　阿部純子　稲崎龍也
　　崎村雄介　永松弘恵　野田トヨ子　花田昌代　藤澤義一
整理作業　有島美江　林由紀子

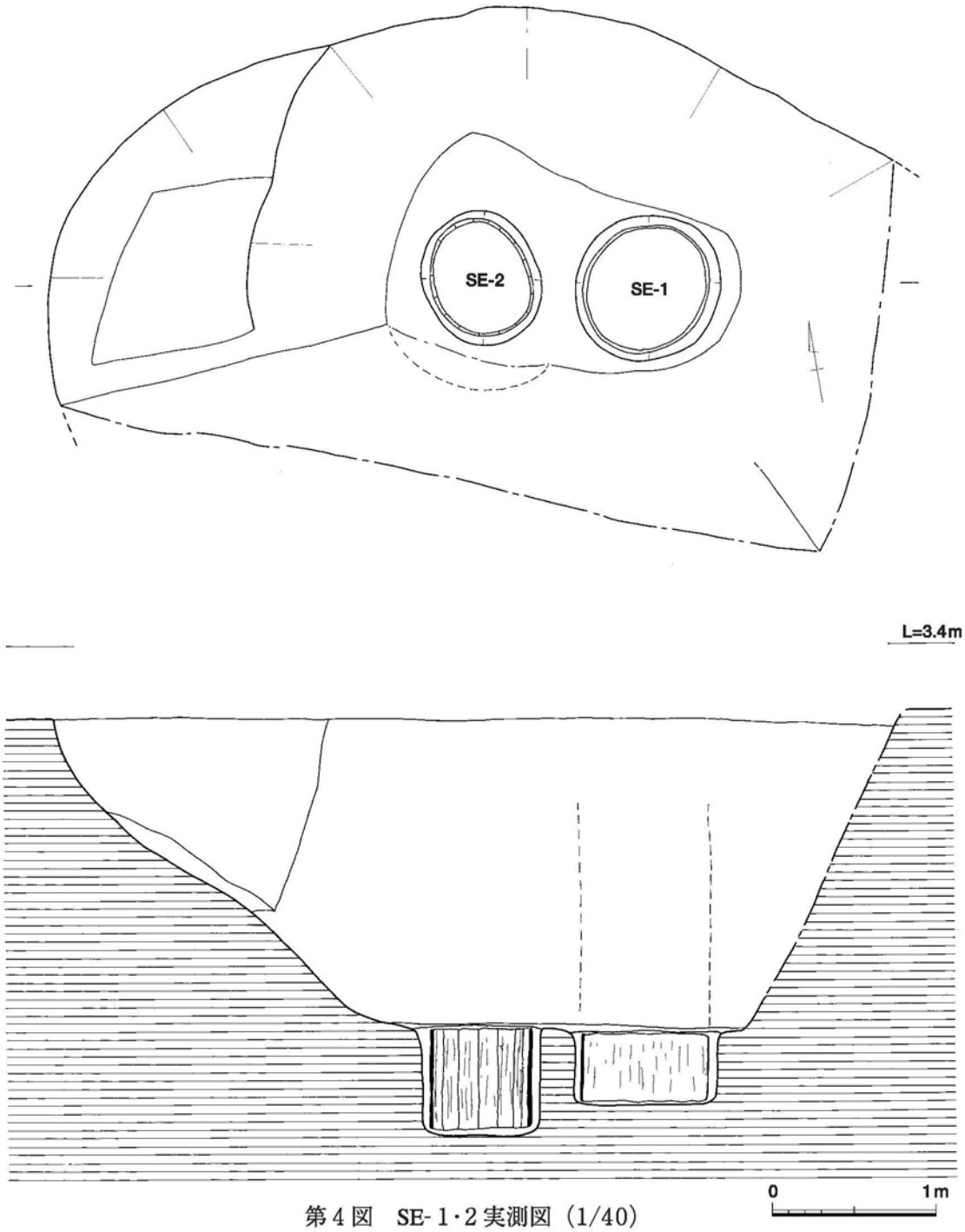
第１図　第37次調査区位置図（1/500）



第２図　第37次調査遺構配置図（1/150）



第3図　土層実測図（1/50）



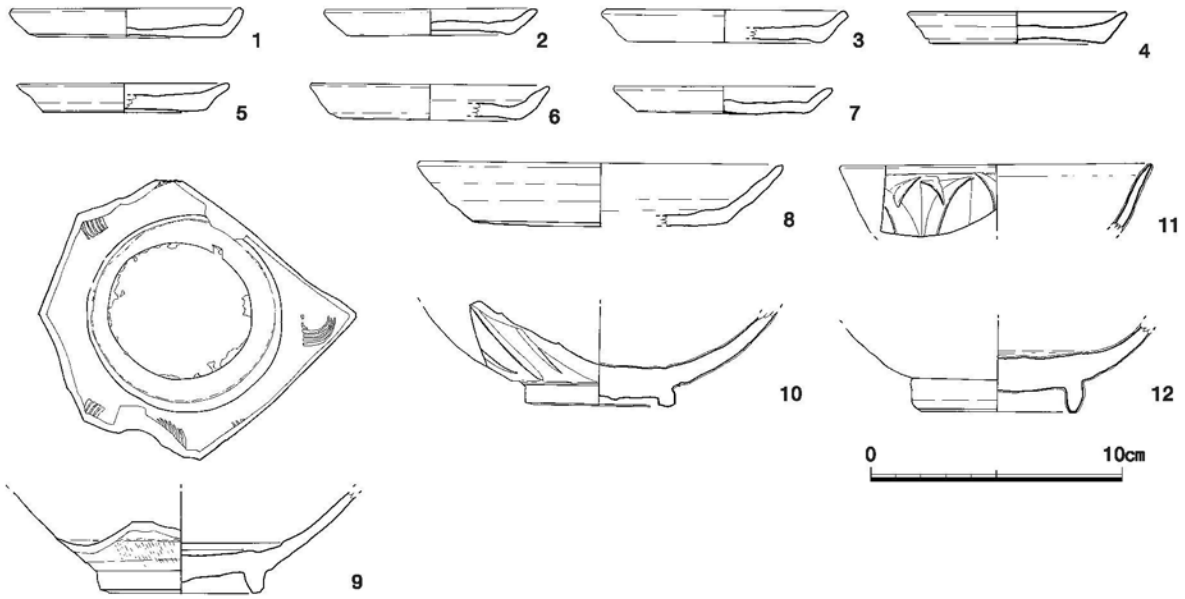
第４図　SE-１･２実測図（1/40）

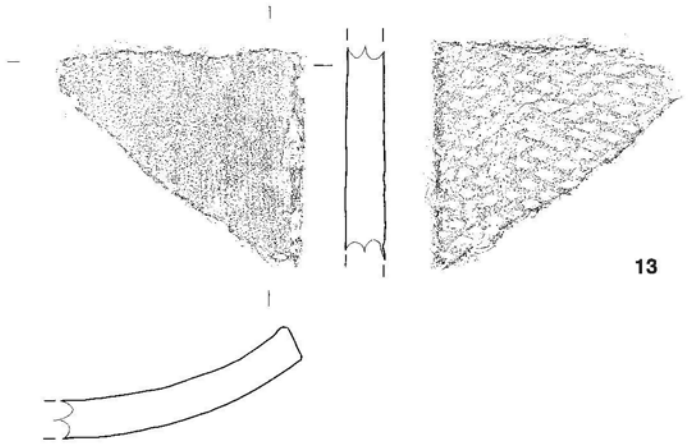
Ⅱ．発掘調査の記録

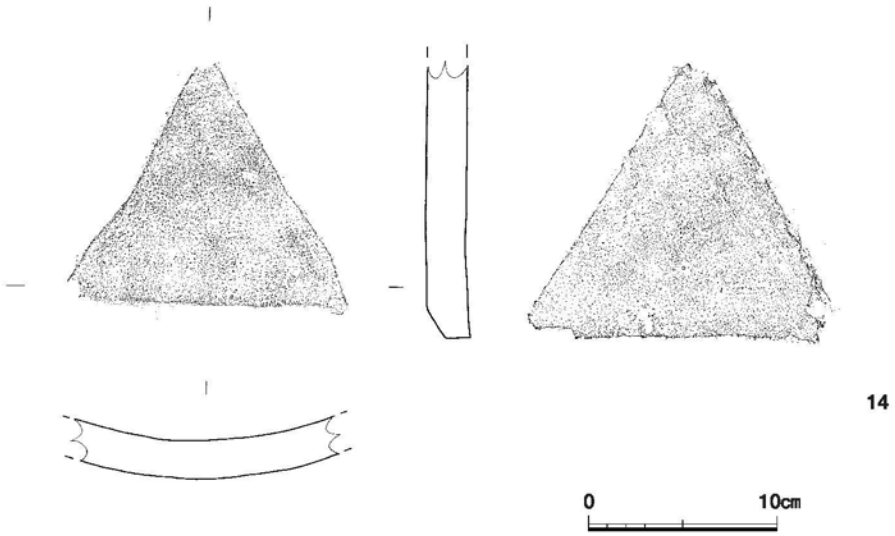
１．発掘調査の概要

第37次調査は遺跡の南部、箱崎八幡宮の南約150ｍの地点に位置する。西に第27次調査区、東に第45次調査区が接する。調査は掘削土処理の関係から調査区を２分割して行い東部から開始した。重機により表土掘削を行い、遺構面からは人力による検出作業、掘削を行った。調査面積は493㎡を測る。

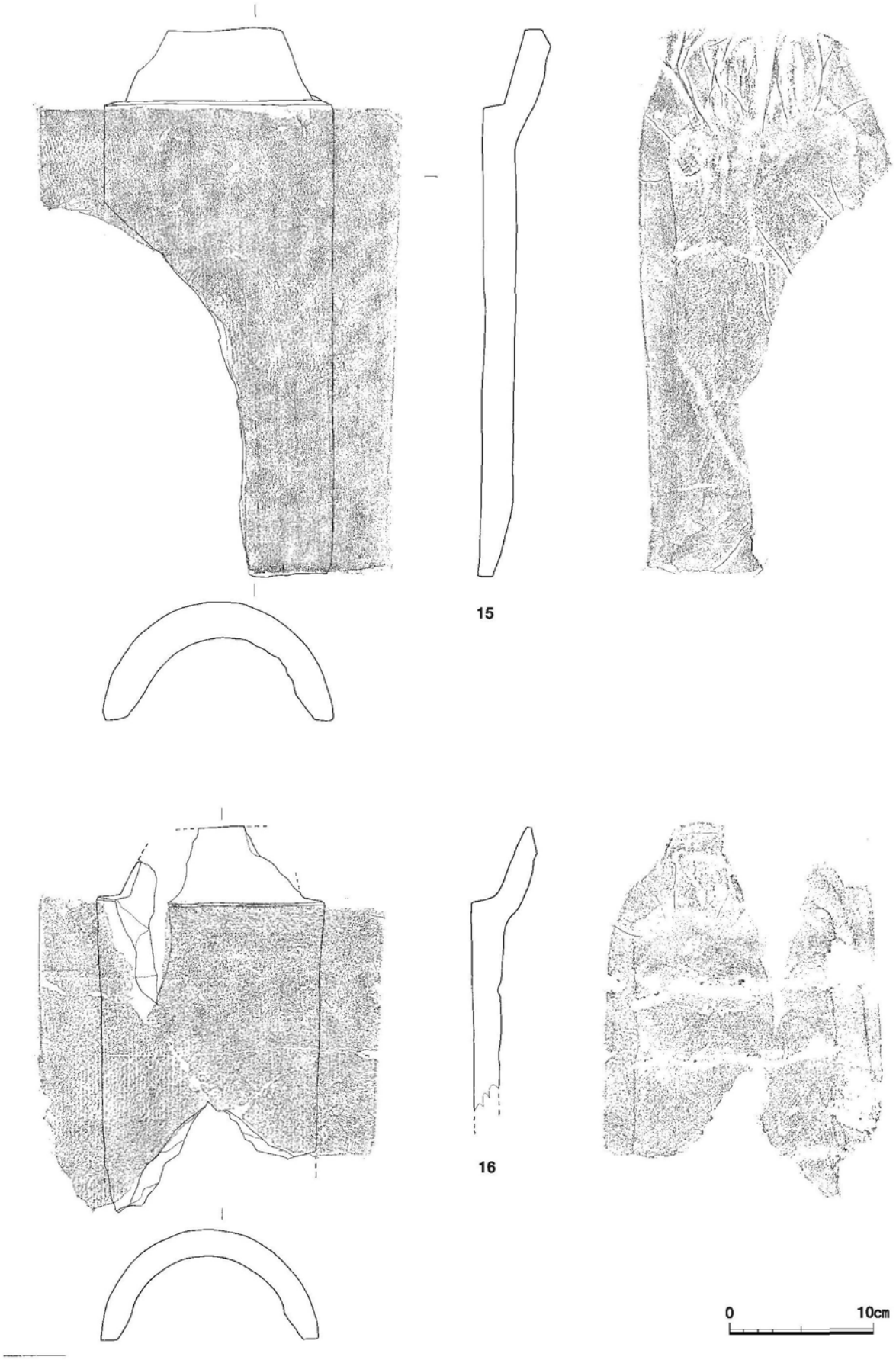
検出遺構は井戸、土坑、木棺墓、溝状遺構、柱穴である。



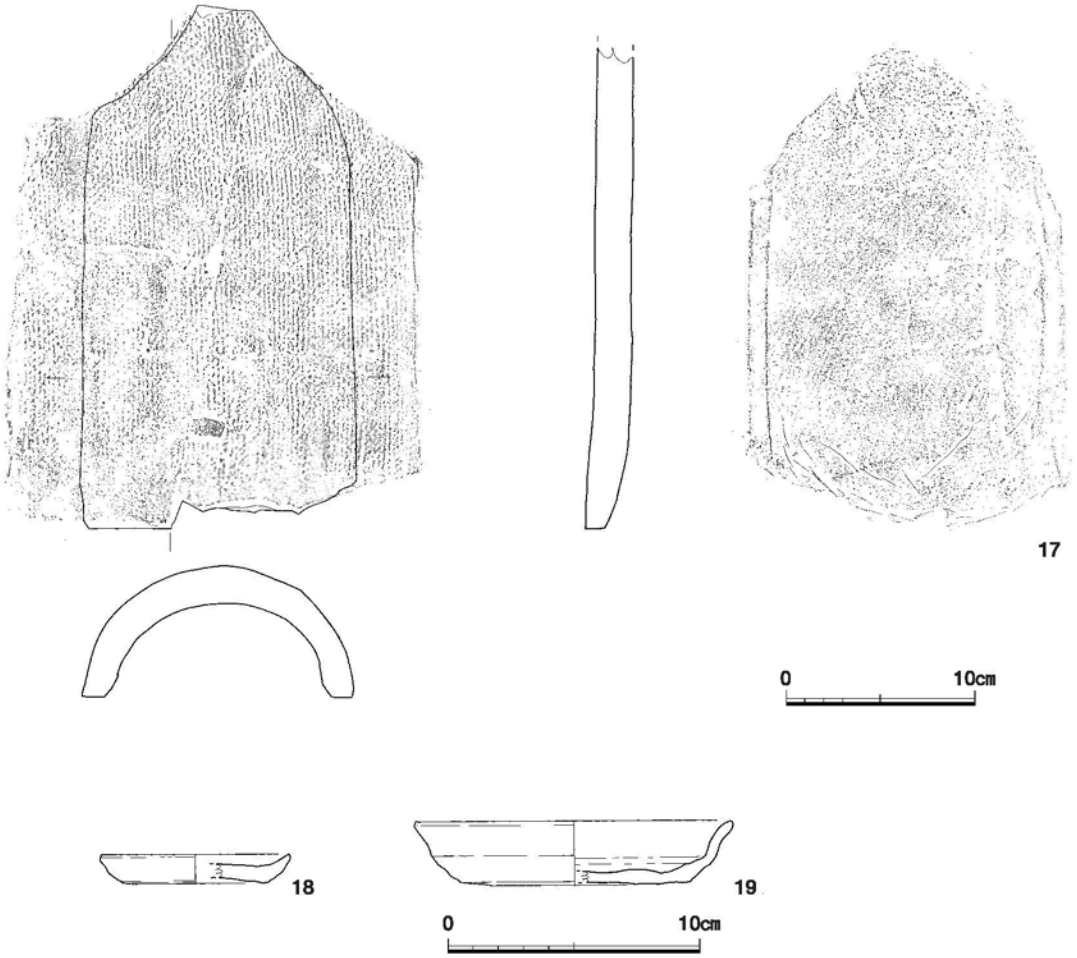




第５図　SE-１出土遺物実測図（1/3・1/4）



第6図　SE-1出土遺物実測図（1/4）



第７図　SE-１･２出土遺物実測図（1/3・1/4）

基本層序は１．表土　２．黒褐色砂質土（しまり有り）　３．黒褐色砂質土　４．黒色砂質土　５．黒褐色砂質土　（粘性強い）６．暗褐色砂質土　７．黒褐色砂質土　８．灰褐色砂質土　９．黄褐色砂（地山）となる。調査区西側の土層は水平な堆積をしておらず、水の影響を受けた可能性が考えられる。このため、遺構は概ね４層以下で掘り込まれているが検出が困難であったため地山面の９層を中心に検出作業を行った。

２．検出遺構と出土遺物

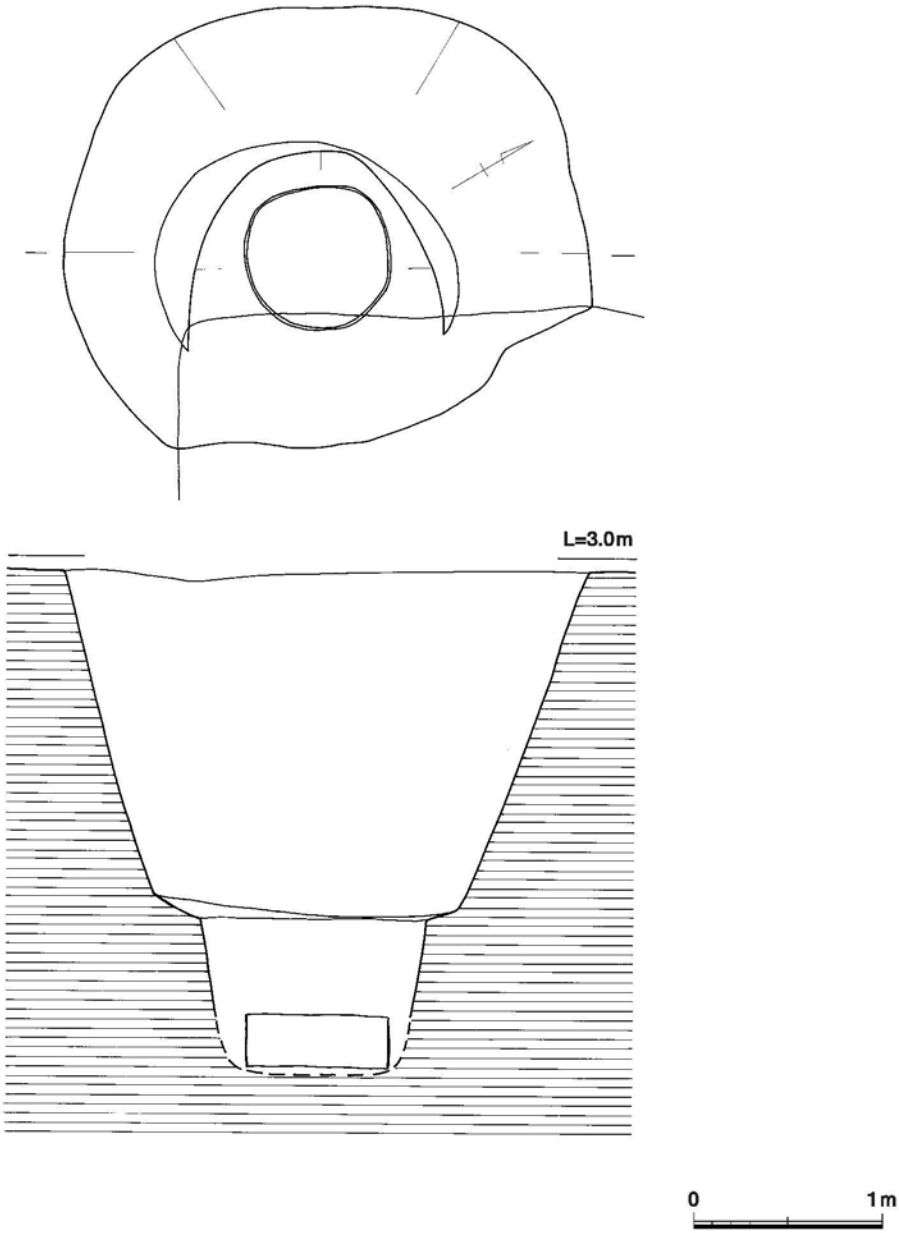
（１）井戸（ＳＥ）

調査区内で14基確認した。調査区全体に分布しており特に偏りはみられない。

SE-１（第４図）

調査区南東隅に位置し、SE-２と切り合う。掘方の東部、南部は調査区外に延びる。掘方は東西５m以上を測るが、SE-２の掘方を含んでいる。深さ2.35mを測る。西側にテラスを有する。標高1.05mで段を有し、東寄りに井筒を据える。井筒の上層には礫が多量に廃棄されていた。井筒は径70㎝の桶が用いられるが木質の劣化が著しい。

出土遺物（第５～７図）１～７は土師器の小皿。復原口径7.6～8.6㎝、器高0.9～1.1㎝を測る。底部は回転糸切りで１・３・４は板状圧痕を有する。８は土師器坏。復原口径04.4㎝、器高2.5㎝



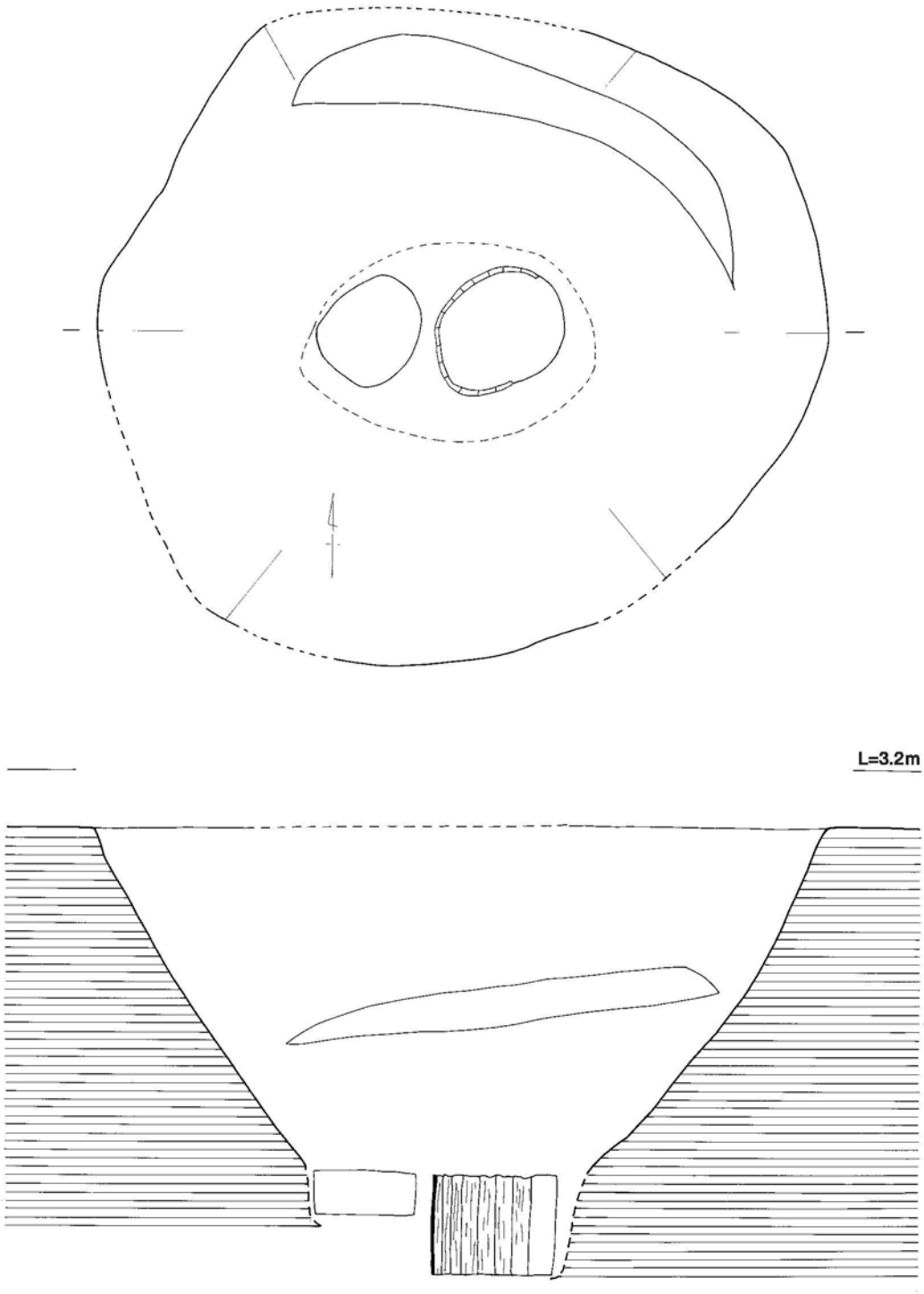
第８図　SE-81 実測図（1/40）

を測る。底部は回転糸切り。９は白磁碗Ⅷ類。10～12は龍泉窯系青磁碗。10・11はⅡ類。12は外底部の釉を掻き取る。13・14は平瓦。15～17は丸瓦。

SE-２（第４図）

SE-１の西に位置する。掘方は当初SE-１として掘削したため規模は不明。検出時には井筒は確認できず、段が付く標高1.1 mにおいて確認した。井筒は幅約10 cmの板材を組み合わせた径60～70 cmの桶が用いられ60 cm程遺存する。

出土遺物（第７図）SE-２は井筒が下層になるまで確認できなかったため掘方の遺物はほとんどなくSE-１と混じっており、井筒出土のものがわずかに確認されたのみである。18・19は土師器で18は小皿。器高1.15 cm、復元口径6.6 cm。19は坏で器高2.55 cm、復元口径12.6 cmを測る。いずれも底部は糸切りで19は板状圧痕を有する。他に龍泉窯系青磁、白磁Ⅸ類が出土している。

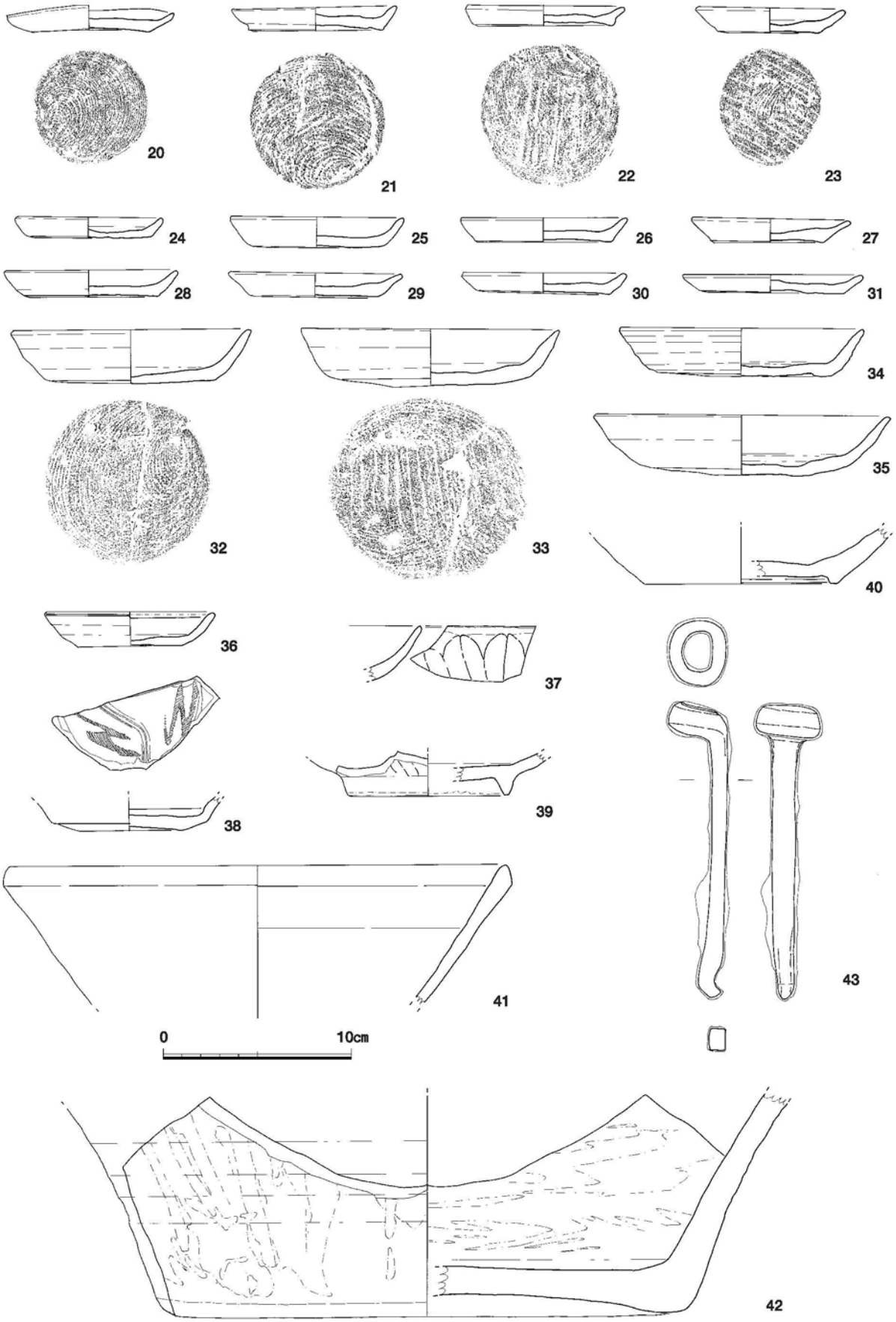


第9図　SE-124 実測図（1/40）

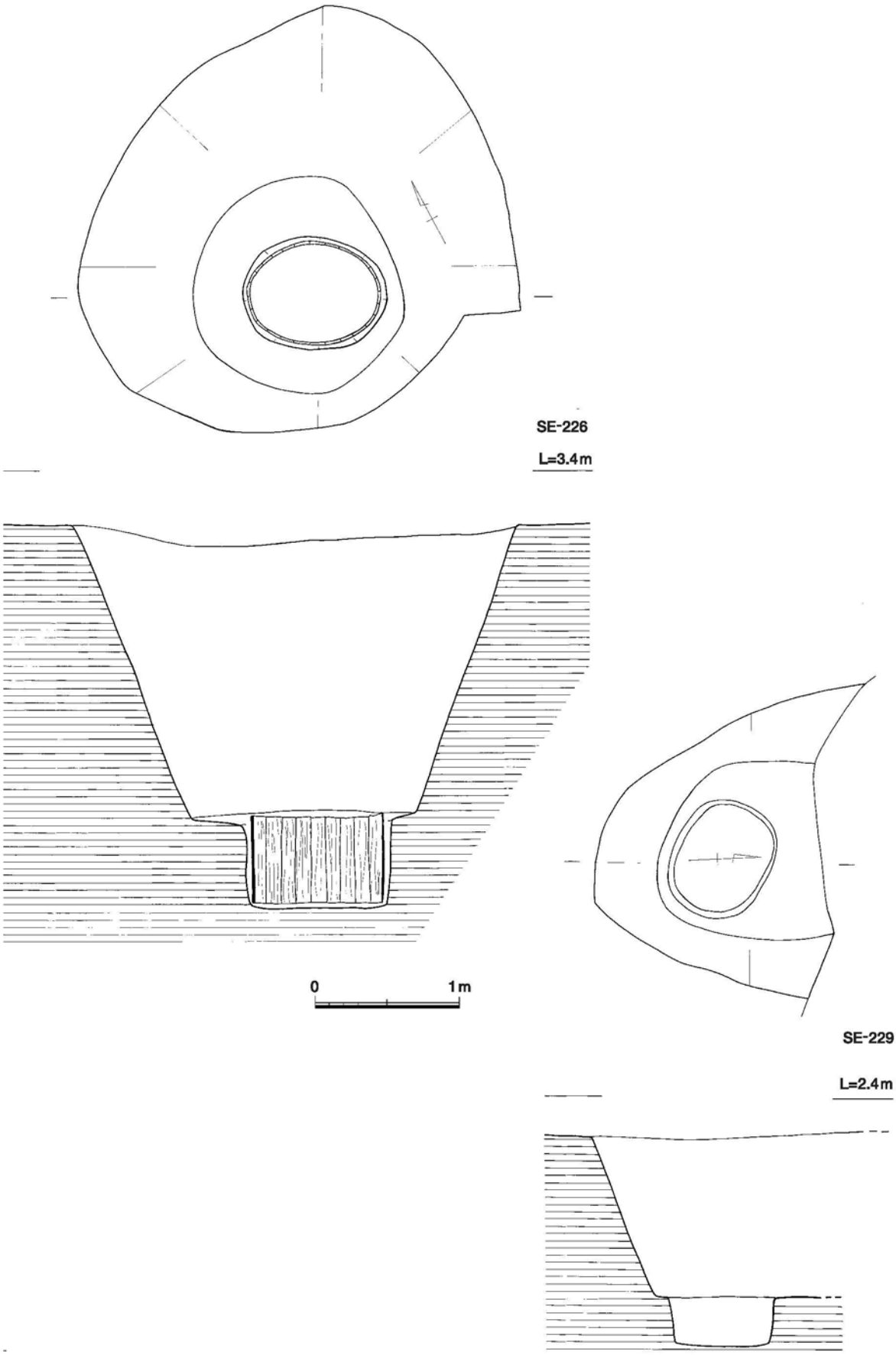
SE-81（第8図）

調査区南東に位置し、東側を撹乱に切られる。掘方の平面形は円形を呈し、径2.75m、深さ2.65mを測る。標高1.2mで段を有し、中央に井筒を据える。井筒は径75cmを測る。

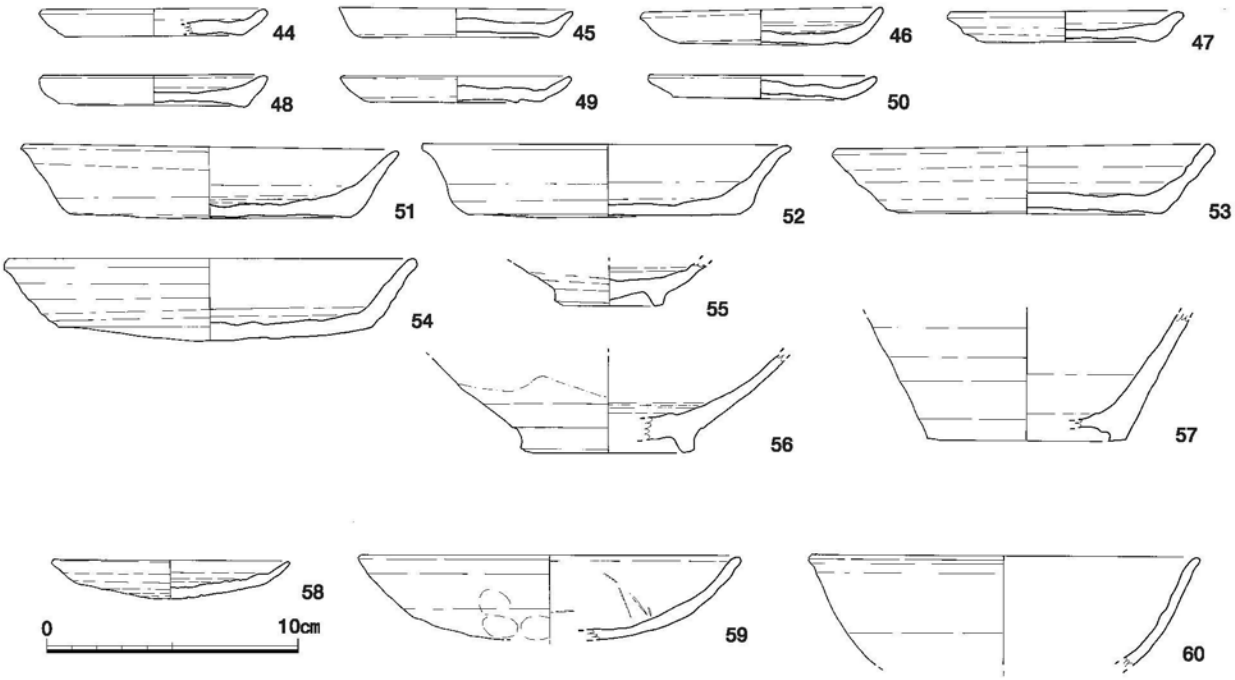
遺物は肥前系磁器等が出土しており近世に位置付けられる。



第10図　SE-124出土遺物実測図（1/3）



第11図　SE-226・229実測図（1/40）



第12図　SE-226・229出土遺物実測図（1/3）

SE-124（第9図）

調査区中央に位置する。掘方の平面形は円形を呈し、径3.85～4.3mを測る。北側にテラスを有する。井筒が2基確認されたが切り合いは不明。深さは東側井筒で2.65m、西側井筒で2.3mを測る。東側井筒は幅約10cmの板材を組み合わせた径60～70cmの桶が用いられ60cm程遺存する。西側井筒は径60cmを測るが木質は遺存しない。

出土遺物（第10図）遺物は検出面からさほど下がらない上層から集中的に出土した。20～31は土師器の小皿。口径7.8～9.5cm、器高1.05～1.4cmを測る。底部は回転糸切りで22～31は板状圧痕を有する。32～35は土師器坏。口径12.6～15.6cm、器高2.6～3.15cmを測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。36は白磁皿Ⅸ類。37・39は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類。38は同安窯系青磁皿。Ⅰ-2b類。40は陶器の鉢。浅黄色の釉がかかる。41は須恵質の鉢。42は陶器の甕。43は鉄製品。全長15.8cmを測り、先端はやや屈曲する。頭部は輪状を呈する。

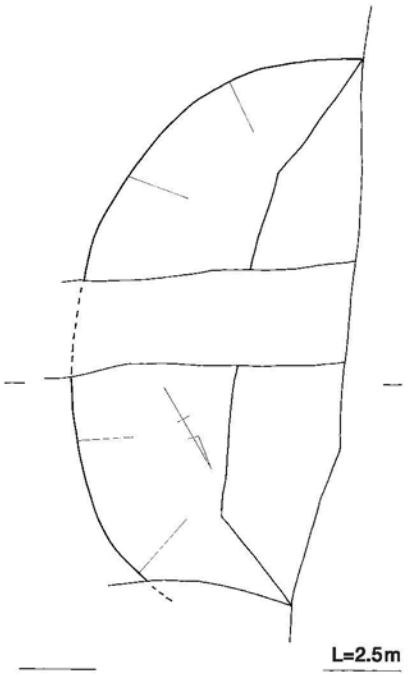
SE-226（第11図）

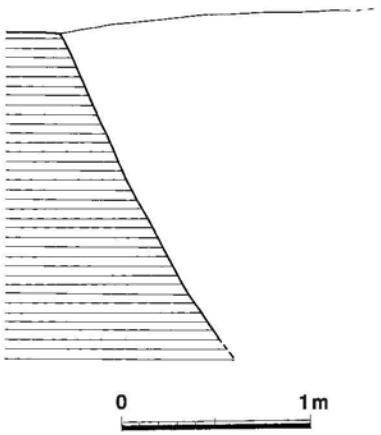
調査区東に位置し、SE-229を切る。掘方の平面形は円形を呈し、径3m、深さ2.6mを測る。標高1.0mで段を有し、中央に井筒を据える。井筒は幅約10cmの板材を組み合わせた径70～90cmの桶が用いられ60cm程遺存する。

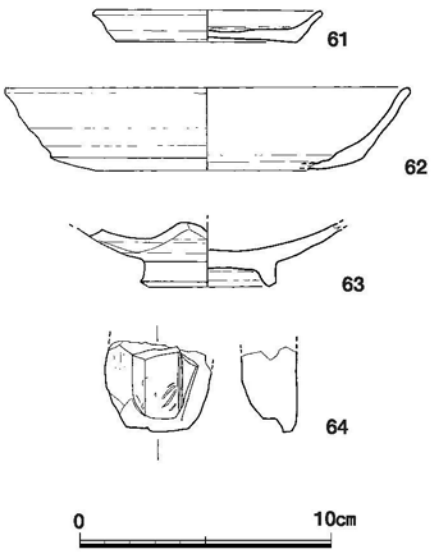
出土遺物（第12図）44～50は土師器の小皿。口径9.0～9.6cm、器高1.0～1.5cmを測る。底部は回転糸切りで46以外は板状圧痕を有する。51～54は土師器坏。口径14.5～16.3cm、器高2.8～3.4cmを測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。55・56は白磁。55は皿Ⅲ-1類。56は碗Ⅶ類。57は陶器の壺。他に瓦、釘等が出土している。

SE-229（第11図）

調査区東に位置し、SE-226に切られる。掘方の平面形は楕円形か。標高1.0mで段を有し、南よりに井筒を据える。井筒掘方は径65～85cmを測る。







第13図　SE-236実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（第12図）58は土師器の小皿。口径9.4㎝、器高1.5㎝を測る。底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。59は土師器坏。復元口径15.0㎝を測る。60は白磁碗Ⅴ類。

SE-236（第13図）

調査区北西隅に位置し、西側は区外に延びるため完掘できなかった。掘方の平面形は円形か。

出土遺物（第13図）61は土師器の小皿。口径9.0㎝、器高1.25㎝を測る。底部は回転糸切り。62は土師器坏。復元口径16.0㎝、器高3.3㎝を測る。63は白磁碗Ⅱ類。64は滑石製品で再加工品か。他に釘が出土している。

SE-295（第14図）

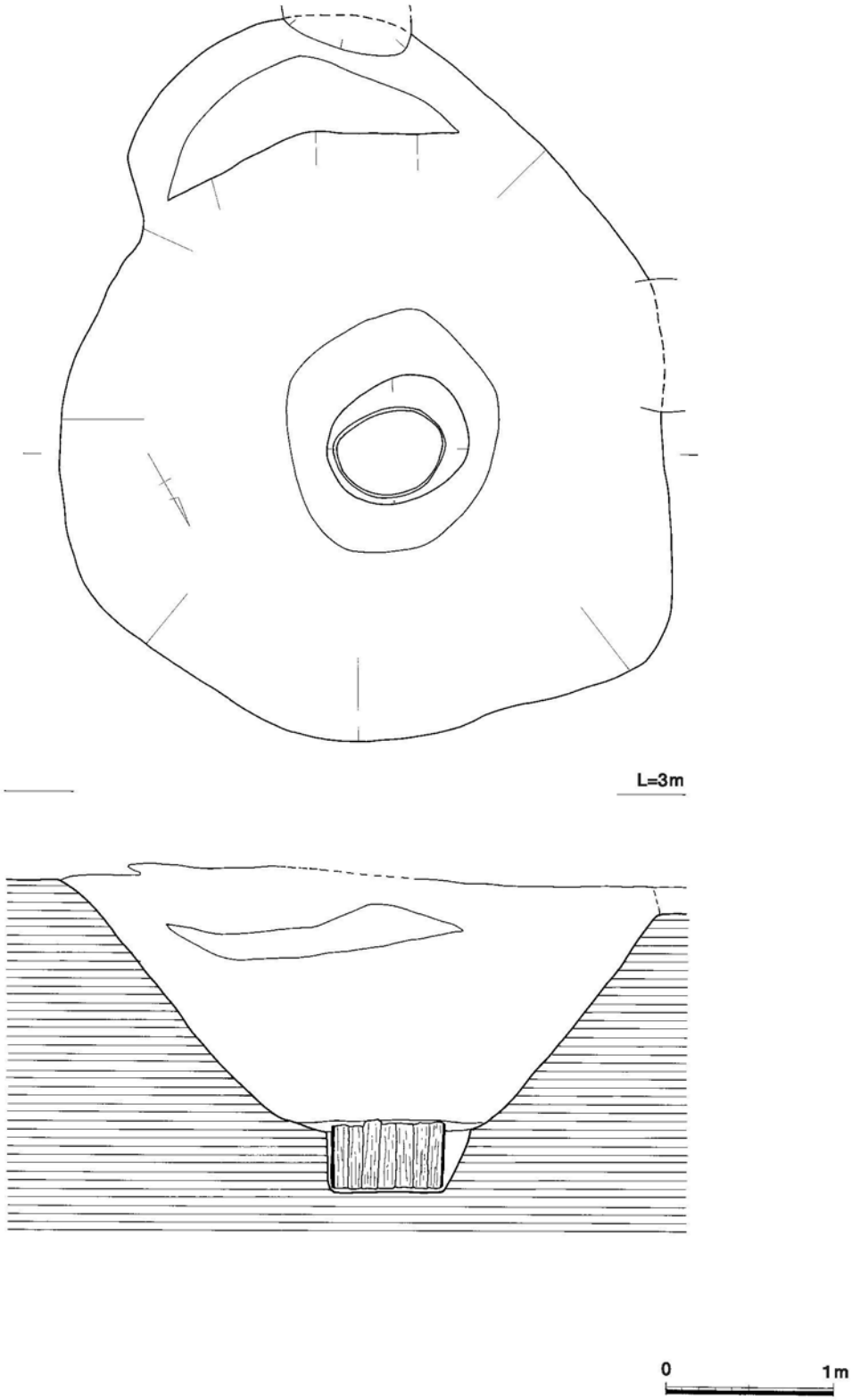
調査区西に位置する。掘方の平面形は円形を呈する。南側にテラスが付くが別遺構の可能性がある。東西3.55m、南北4.3m、深さ1.85mを測る。標高1.05mで段を有し、中央に井筒を据える。井筒は幅約10㎝の板材を組み合わせた径60㎝前後の桶が用いられ40㎝程遺存する。

出土遺物（第15図）65～67は土師器の小皿。口径8.8～10.0㎝、器高1.2～1.7㎝を測る。底部は65・66は回転糸切り、67はヘラ切りで板状圧痕を有する。68は土師器坏。復元口径15.0㎝、器高3.2㎝を測る。底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。69は瓦器椀。70・71は白磁碗。70はⅧ類。71は、Ⅳ-1類。72は白磁ⅢⅥ類。73は越州窯系青磁碗。74は龍泉窯系青磁坏Ⅲ-4類。75は陶器の壺。釉はオリーブ色を呈する。76は丸瓦。

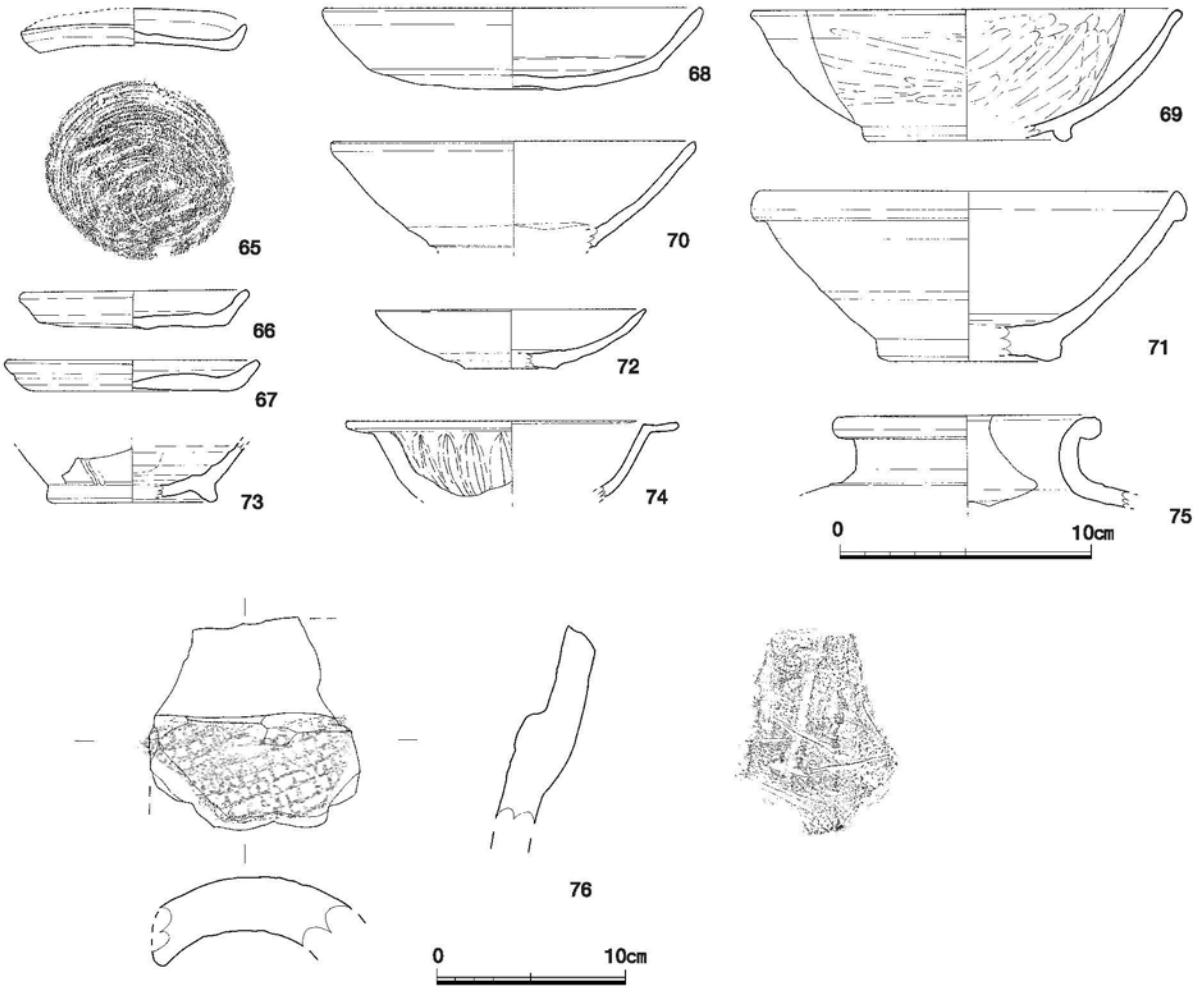
SE-296（第16図）

調査区西、SE-295の東に位置する。掘方の平面形は円形を呈する。東西2.9m、南北2.8m、深さ1.85mを測る。標高0.95mで段を有し、中央に井筒を据える。井筒は幅約10㎝の板材を組み合わせた径60㎝前後の桶が用いられ20㎝程遺存する。

出土遺物（第16図）77～82は土師器である。77・78は小皿。口径9.0～9.6㎝、器高0.9～1.7㎝を測る。底部はヘラ切りで78は板状圧痕を有する。79は高台付皿。口径12.2㎝を測る。80～82は坏。口径15.0～16.0㎝、器高3.1㎝を測る。80・82の底部はヘラ切りで82は板状圧痕を有する。83・



第14図　SE-295実測図（1/40）



第15図　SE-295出土遺物実測図（1/3・1/4）

84は白磁碗Ⅳ類。他に瓦、釘が出土している。

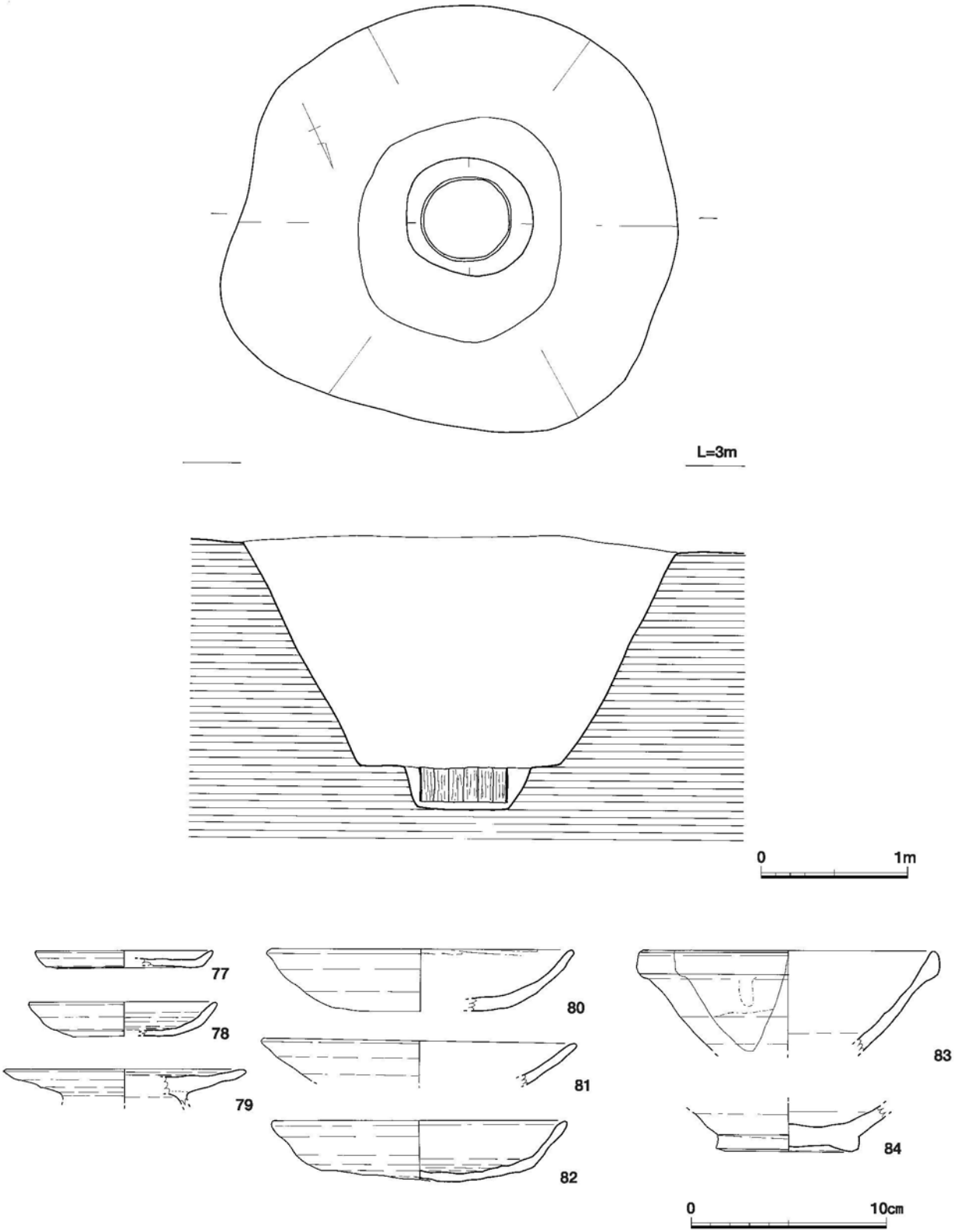
SE-297（第17図）

調査区西、SE-295の南に位置する。掘方の平面形は円形を呈する。径3.5～3.8m、深さ2.2mを測る。標高0.9mで段を有し、中央に井筒を据える。井筒は幅約10cmの板材を組み合わせた径60cm前後の桶が用いられ50cm程遺存する。

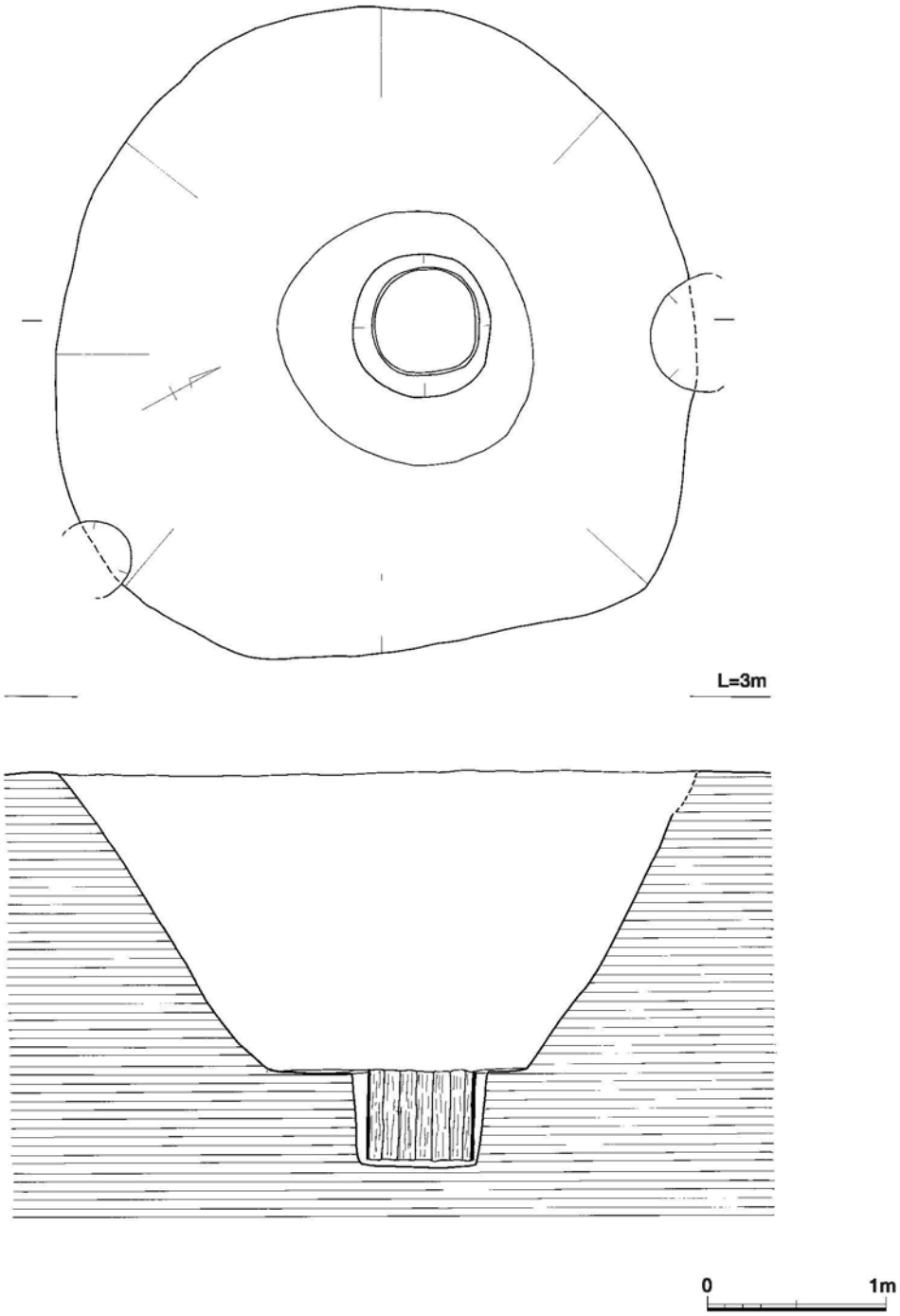
出土遺物（第18図）85～88は土師器小皿。口径8.8～10.4cm、器高0.9～1.4cmを測る。底部は85はヘラ切り、他は回転糸切りで87は板状圧痕を有する。89・90は高台付皿。口径11.7・11.8cm、器高2.4・2.3cmを測る。91は土師器坏で復元口径16.4cm、器高2.3cmを測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。92は瓦器椀。復元口径17.0cm、器高5.0cmを測る。調整は内外面ともミガキを施す。93は白磁碗Ⅳ類。94・95は白磁皿で94はⅣ-2a、95はⅥ-1a類。他に瓦、釘が出土している。

SE-343（第19図）

調査区西、SE-297の東に位置し、SE-367を切る。掘方の平面形は楕円形を呈する。東西2.75m、南北2.0m、深さ2.3mを測り、西寄りに井筒を据える。井筒は径60cm前後の桶が用いられ60cm程遺存する。



第16図　SE-296実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

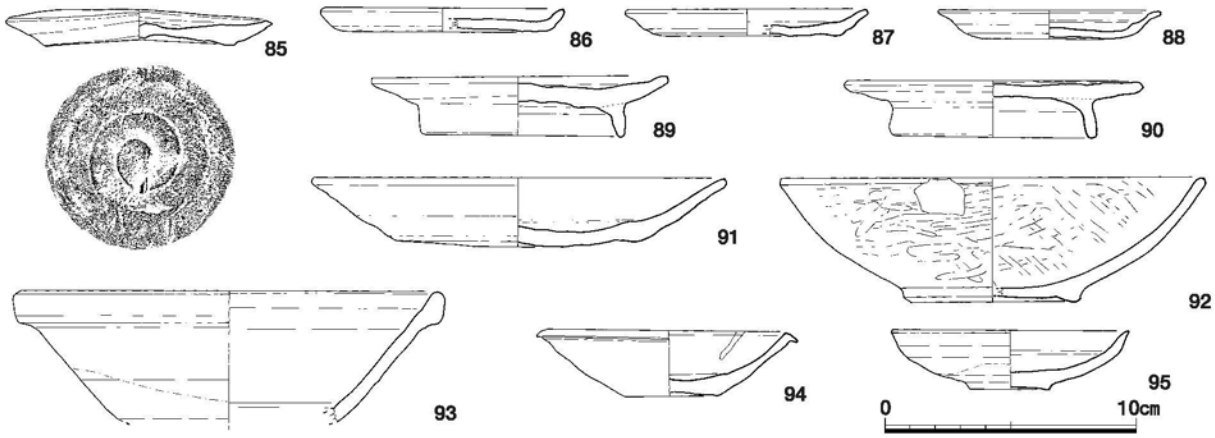


第17図　SE-297実測図（1/40）

出土遺物（第21図）96～98は土師器小皿。口径8.4～9.6㎝、器高1.0～1.4㎝を測る。底部は96はヘラ切り、他は回転糸切りで板状圧痕を有する。99は土師器坏。復元口径16.4㎝を測る。100は瓦器椀。復元口径16.6㎝を測る。調整は内外面ともミガキを施す。101は白磁碗Ⅷ類。102は須恵質の鉢。103は取瓶。内面に銅が付着する。他に瓦が出土している。

SE-364（第19図）

SE-296の東に位置し、北側は調査区外に延びる。掘方の平面形は不整な円形か。東西2.4m、深さ1.7mを測る。井筒は上部が一辺80㎝前後の方形板組、下部が径40㎝の桶の痕跡が残る。



第18図　SE-297出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（第21図）104は土師器小皿。口径9.0㎝、器高1.2㎝を測る。底部はヘラ切り。105は土師器坏。復元口径14.0㎝を測る。106は瓦器椀。内外面ともミガキを施す。

SE-365（第20図）

調査区西南隅に位置し、西側は調査区外に延びる。掘方の平面形は楕円形か北側にテラスを有し、標高1.0mで段を成す。区内では井筒を確認できていない。

出土遺物（第21図）107は土師器小皿。復元口径9.4㎝、器高1.6㎝を測る。底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。108・109は土師器坏。それぞれ復元口径15.4・15.2㎝、器高3.2㎝を測る。底部はヘラ切りで108は板状圧痕を有する。110は瓦器椀。復元口径16.6㎝を測る。内外面とも横方向のミガキを施す。111・113は白磁碗。113はⅣ類。112は白磁皿Ⅱ類。

SE-367（第20図）

SE-343、SD-341に切られて位置する。東西2.2m、南北2.0m、深さ2.0mを測る。井筒は径70㎝の桶の痕跡が残る。

出土遺物（第21図）114は土師器小皿。復元口径8.6㎝、器高1.3㎝を測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。115は平瓦。他に瓦が出土している。

（2）土坑（SK）

SK-11（第22図）

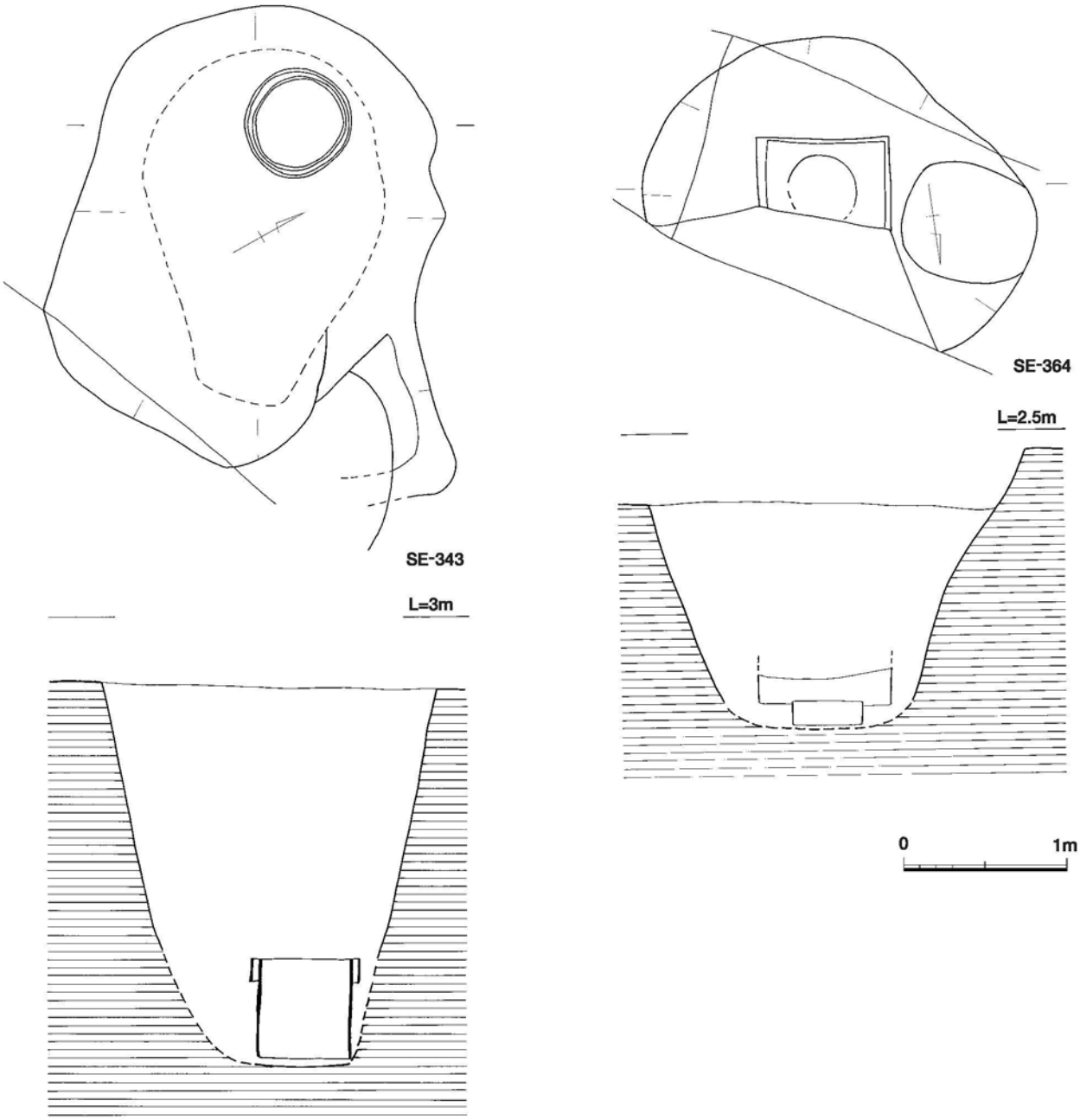
調査区北東に位置する。平面形は円形を呈し、長さ148㎝、幅120㎝以上、深さ55㎝を測る。底面に径30㎝、深さ15㎝の小穴が付設する。

出土遺物（第23図）116から120は土師器小皿。口径8.4～9.0㎝、器高1.2～1.3㎝を測る。底部は回転糸切りで119以外は板状圧痕を有する。121は土師器坏。復元口径14.2㎝、器高2.3㎝を測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。122は瓦器皿。口径11.0㎝、器高2.1㎝を測る。123は白磁碗Ⅳ類。124は龍泉窯系青磁碗Ⅱ-a類。125は陶器の甕。黒褐色の釉を施す。

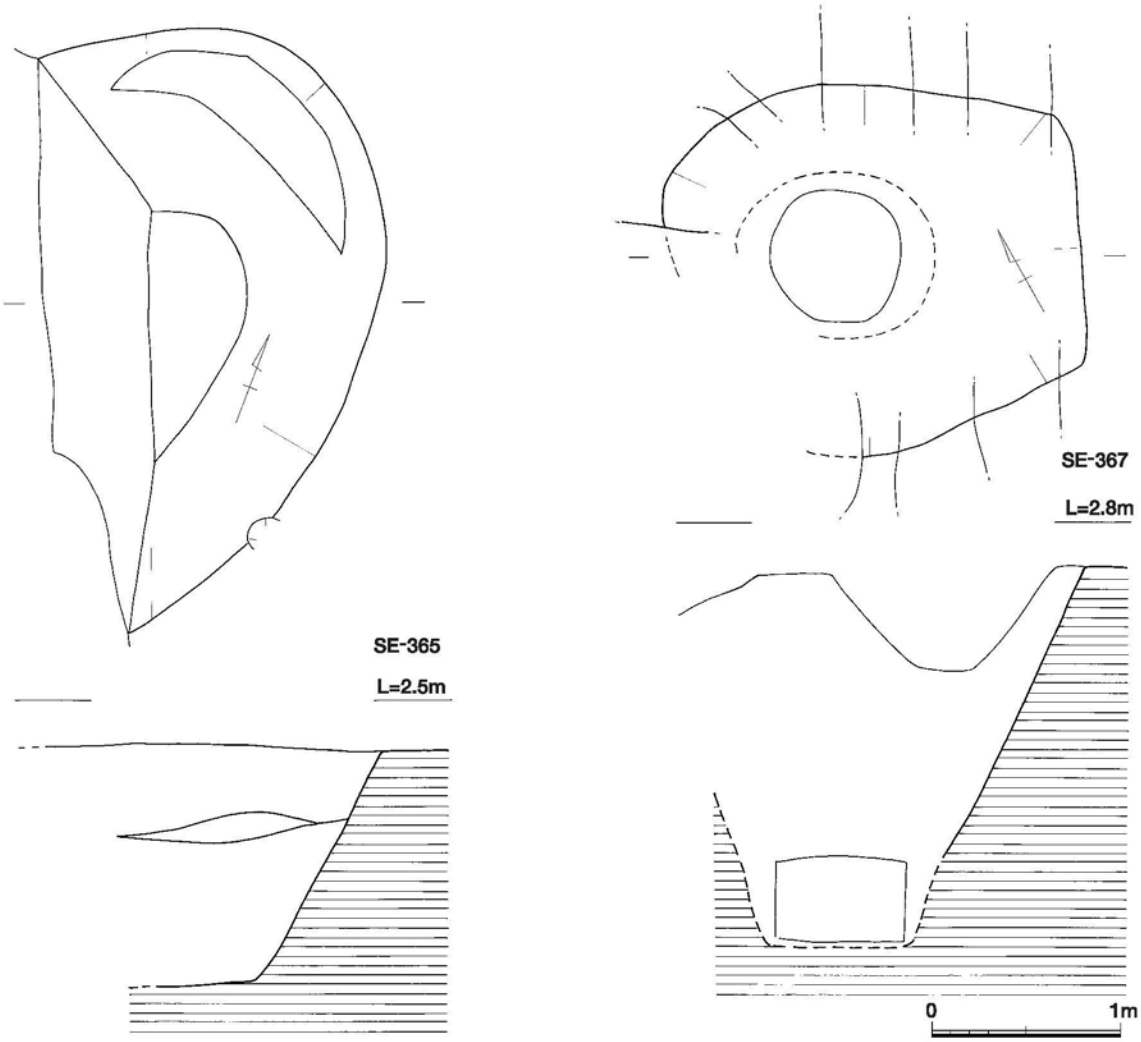
SK-22（第22図）

調査区東に位置する。平面形は円形を呈し、長さ135㎝、深さ42㎝を測る。底面は平らで壁は緩やかに立つ。

出土遺物（第23図）126～129は土師器小皿。口径7.8～9.2㎝、器高1.0～1.6㎝を測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。130は近世染付の碗。131は白磁小坏か。



第19図　SE-343・364 実測図（1/40）



第20図　SE-365・367実測図（1/40）

SK-31（第22図）

調査区中央に位置する。平面形は円形を呈し、断面は袋状を成す。長さ138㎝、幅116㎝、深さ65㎝を測る。

出土遺物（第23図）132～138は土師器小皿。口径8.8～10.0㎝、器高1.1～1.4㎝を測る。底部は回転糸切りで133以外は板状圧痕を有する。139は白磁皿Ⅸ類。140は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類。141は陶器の盤。釉はオリーブ黄色を呈する。142は陶器の甕。釉はオリーブ黒色を呈する。他にガラス製品386（第39図）、石鍋の細片が出土している。

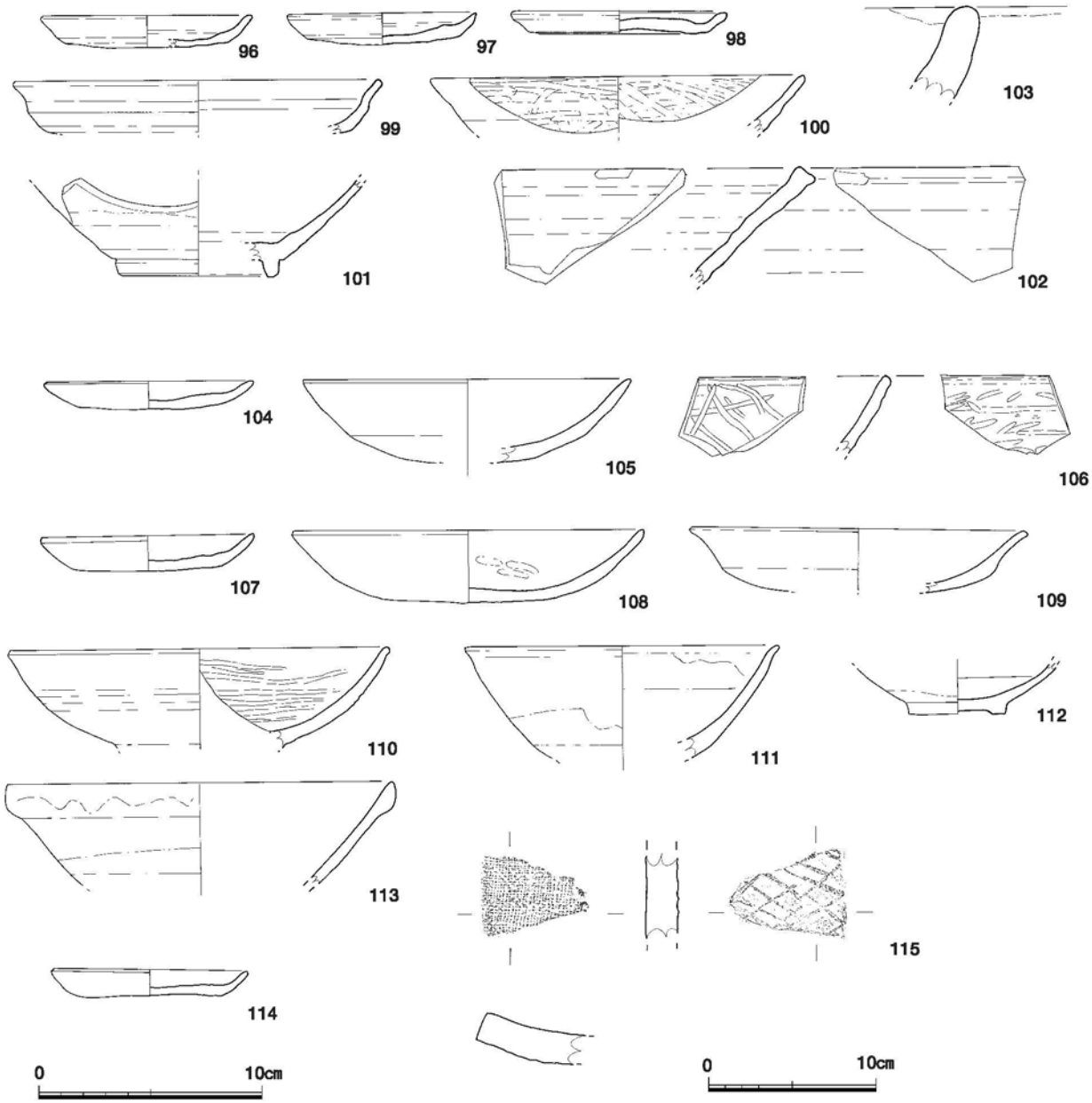
SK-32（第22図）

調査区東に位置し、SK-41を切る。東部は調査区外に延びる。平面形は円形を呈し、長さ85㎝、深さ17㎝を測る。底面は水平で壁は直線的に立つ。

出土遺物（第24図）143・144は土師器坏。それぞれ口径14.9㎝・15.8㎝、器高2.6㎝・2.8㎝を測る。底部は糸切りで144は板状圧痕を有する。

SK-41（第22図）

調査区東に位置し、SK-32に切られる。平面形は円形を呈し、長さ93㎝、深さ50㎝を測る。



第21図　SE-343・364・365・367出土遺物実測図（1/3・1/4）

出土遺物（第24図）145は土師器皿。復元口径11.3㎝、器高2.5㎝を測る。146・147は高台付皿。146は口径12.0㎝、器高2.3㎝を測る。

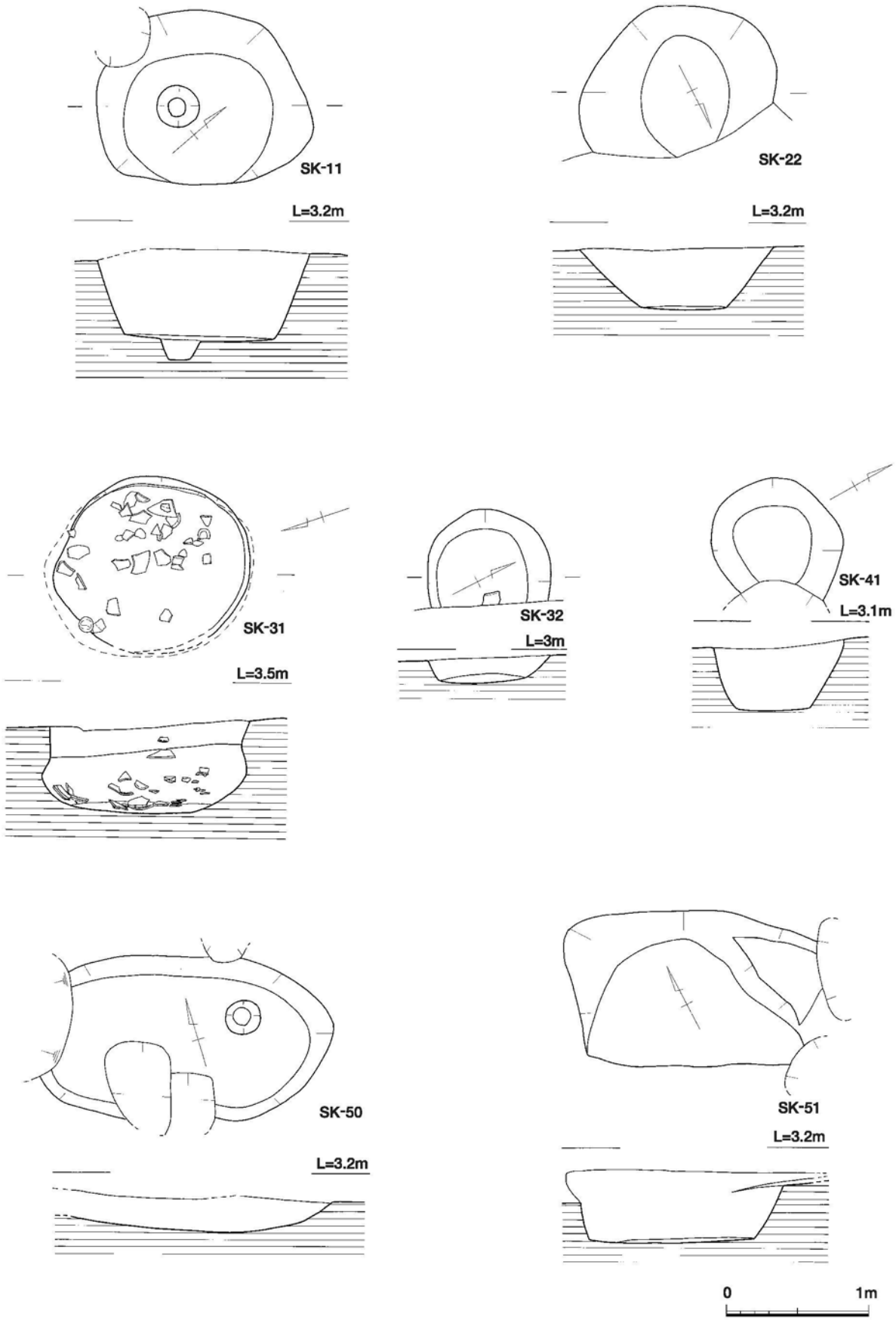
SK-50（第22図）

調査区東に位置し、西側を切られる。平面形は楕円形を呈し、長さ200㎝以上、幅110㎝、深さ25㎝を測る。

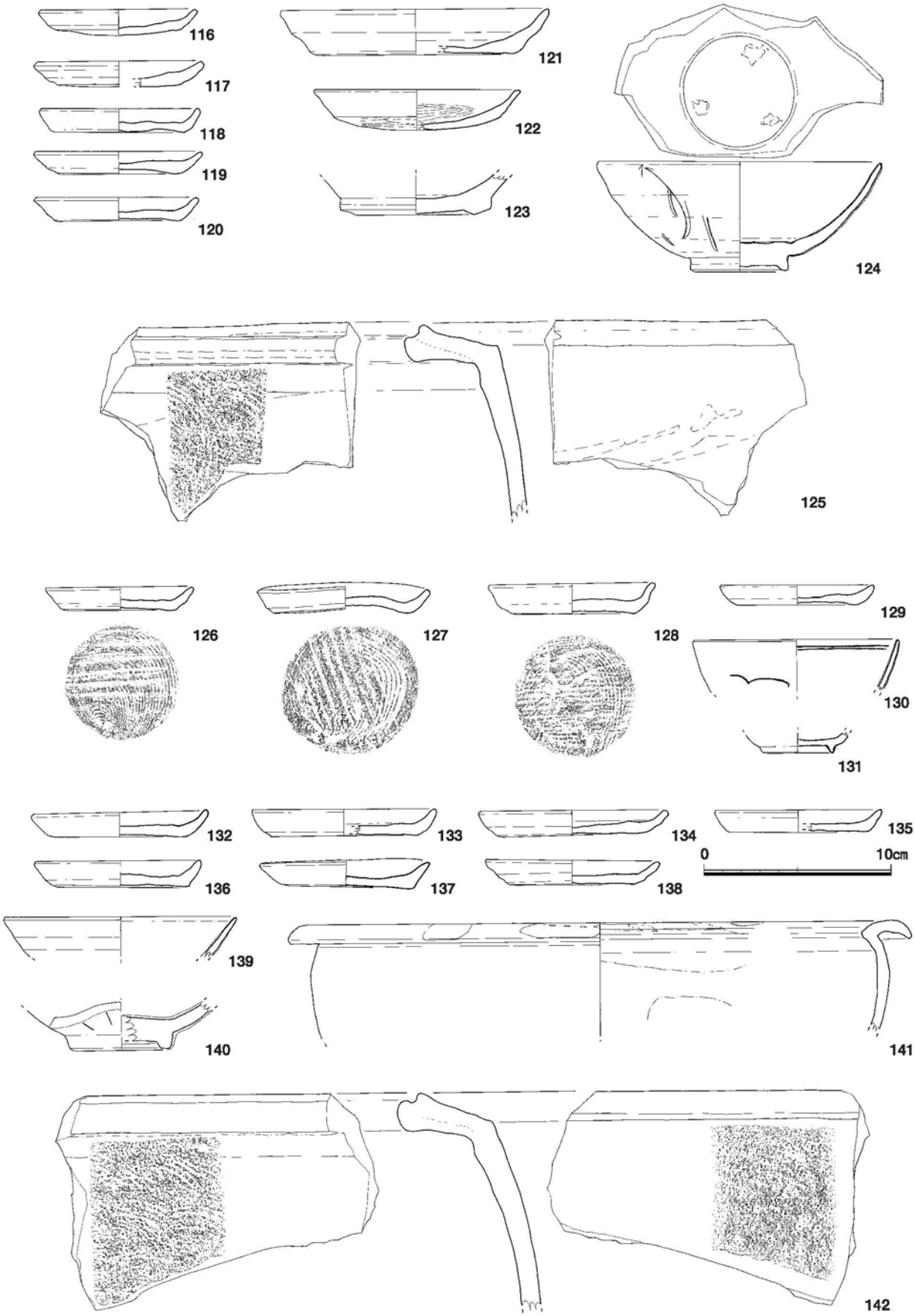
出土遺物（第24図）148は瓦器椀。内外面ともミガキを施す。149・150は白磁皿。149はⅡ-1a類。150はⅧ-1b類。

SK-51（第22図）

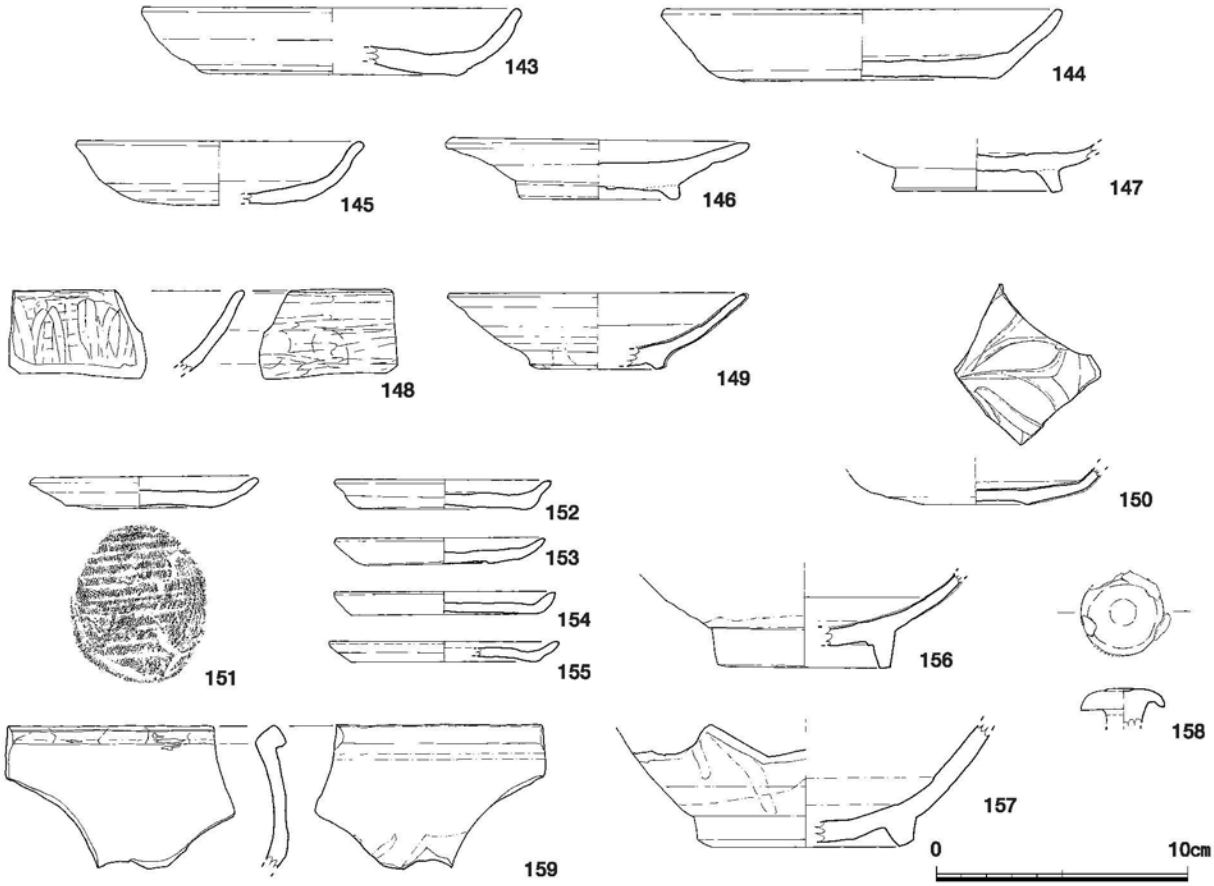
調査区北東に位置し、SK-107を切る。平面形は楕円形を呈し、長さ200㎝以上、幅110㎝、深



第22図　SK-11・22・31・32・41・50・51実測図（1/40）



第23図　SK-11・22・31出土遺物実測図（1/3）



第24図　SK-32・41・50・51出土遺物実測図（1/3）

さ25㎝を測る。

出土遺物（第24図）151～155は土師器小皿。口径8.3～9.0㎝、器高0.8～1.1㎝を測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。156・157は白磁碗。157はⅣ類。158は白磁小壺の蓋。159は陶器の盤。釉はオリーブ黄色を呈する。他に青磁、瓦の細片が出土している。

SK-52（第25図）

調査区北東に位置する。平面形は楕円形を呈し、長さ268㎝、幅115㎝、深さ45㎝を測る。

出土遺物（第26図）土師器の小皿、坏がまとまって出土した。160～168は土師器小皿。口径7.2～9.4㎝、器高0.8～1.6㎝を測る。底部は回転糸切りで165・168以外は板状圧痕を有する。169～175は土師器坏。口径12.1～15.2㎝、器高2.3～2.8㎝を測る。底部は回転糸切りで173・174以外は板状圧痕を有する。176は瓦器椀。177は陶器の小盤。釉はオリーブ黄色を呈する。他に青磁、須恵質の鉢の細片が出土している。

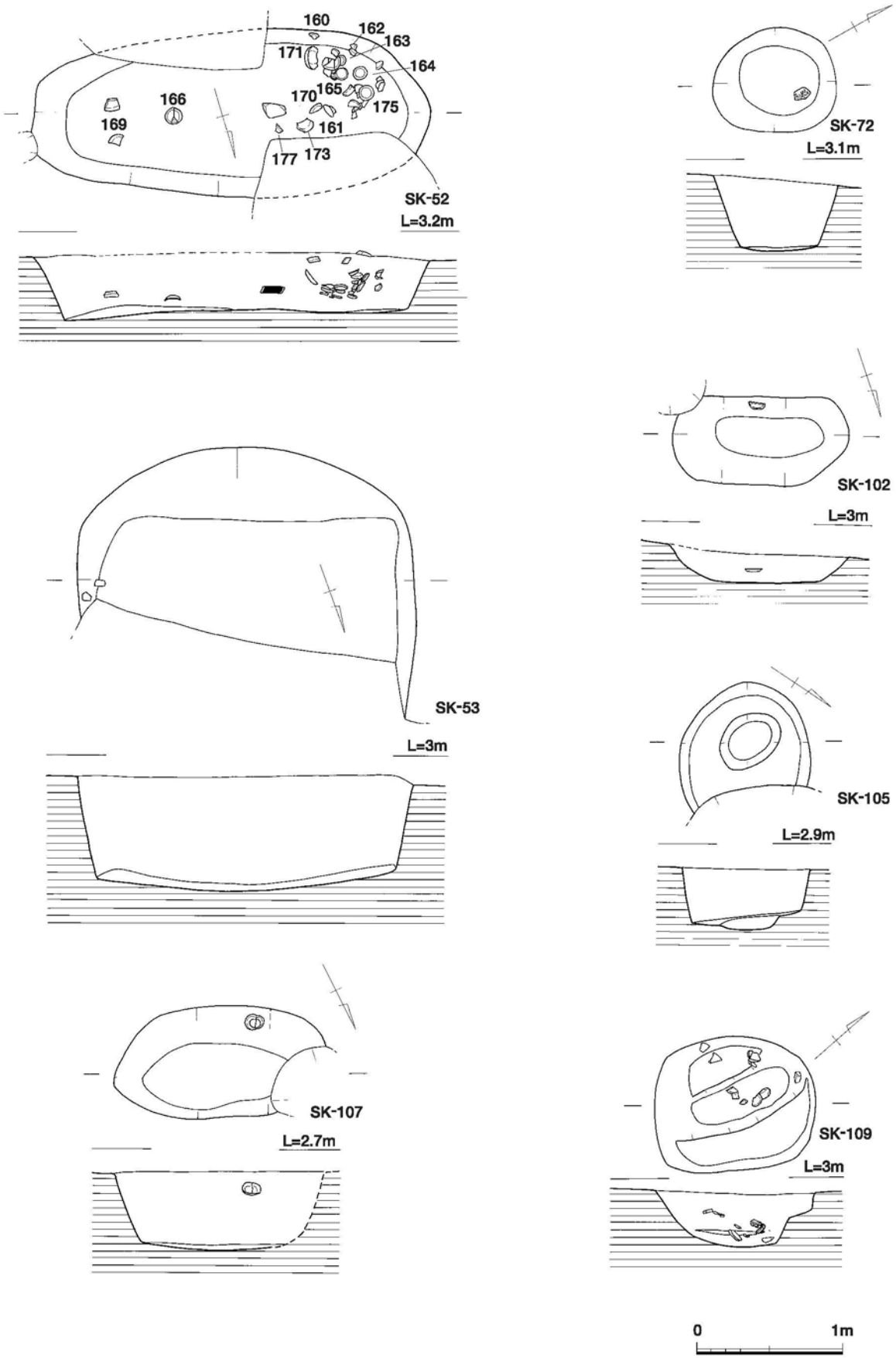
SK-53（第25図）

調査区北に位置し、北部は調査区外に延びる。平面形は方形か。長さ230㎝、深さ80㎝を測り、壁は鋭角に立つ。

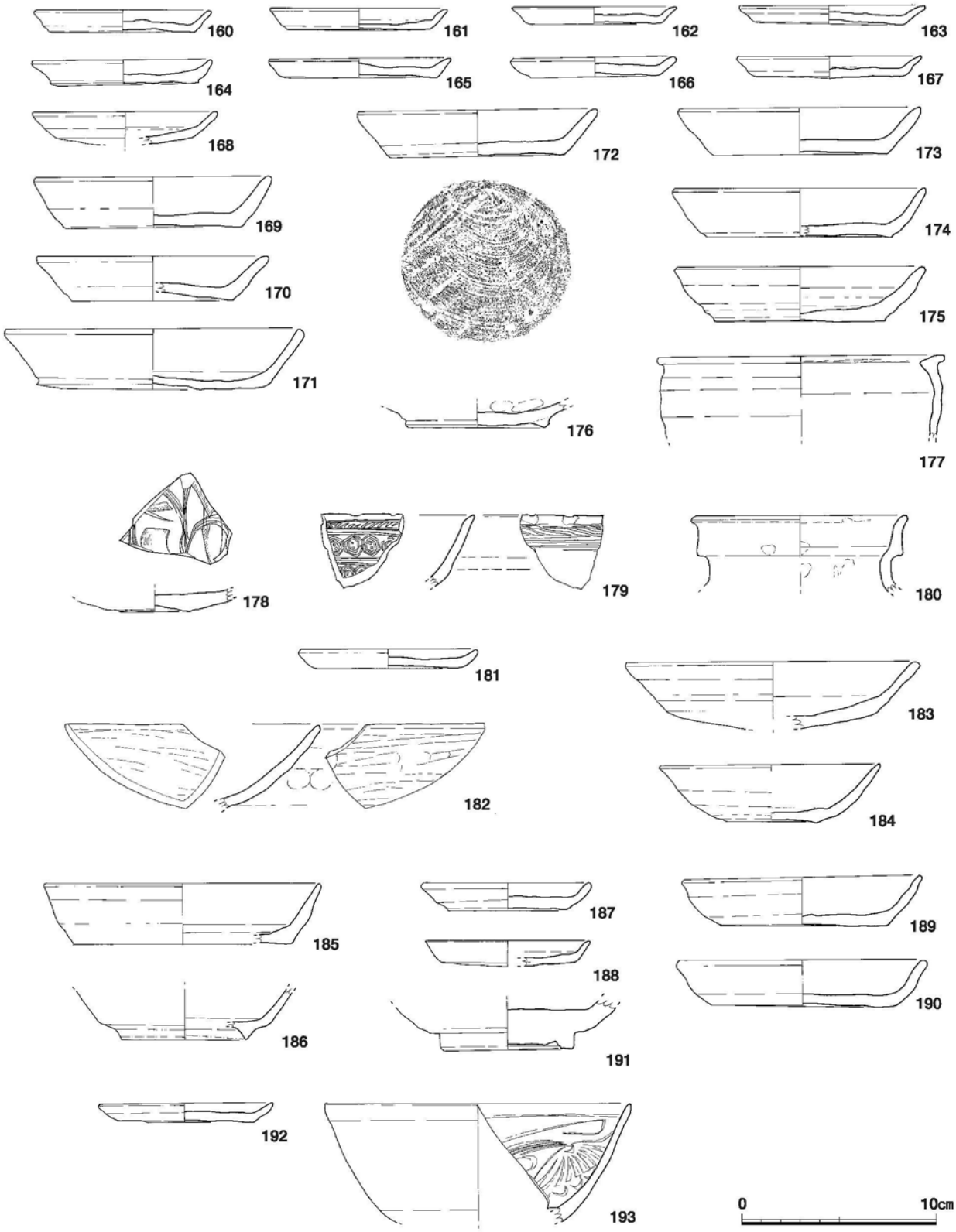
出土遺物（第26図）178は龍泉窯系青磁皿Ⅰ-2b類。179は粉青沙器の碗。180は陶器の壺。釉はオリーブ灰色を呈する。

SK-72（第25図）

調査区北東に位置する。平面形は楕円形を呈し、長さ85㎝、幅70㎝、深さ53㎝を測る。



第25図　SK-52・53・72・102・105・107・109実測図（1/40）



第26図　SK-52・53・72・102・105・107・109出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（第26図）181は土師器小皿。口径9.2㎝、器高0.9㎝を測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。182は瓦器椀。内外面ともミガキを施す。他に白磁片が出土している。

SK-102（第25図）

調査区南東に位置する。平面形は楕円形を呈し、長さ120㎝、幅60㎝、深さ20㎝を測る。

出土遺物（第26図）183は土師器坏。復元口径15.0㎝を測る。184は白磁ⅢⅥ-1b類。

SK-105（第25図）

調査区南東に位置する。平面形は楕円形か。底面に浅い小穴が付く。幅85㎝、深さ42㎝を測る。

出土遺物（第26図）185は土師器坏。復元口径14.1㎝、器高3.1㎝を測る。底部は回転糸切り。186は龍泉窯系青磁坏Ⅲ類。

SK-107（第25図）

調査区東に位置する。平面形は楕円形を呈し、長さ145㎝前後、幅75㎝、深さ45㎝を測る。

出土遺物（第26図）187・188は土師器小皿。それぞれ口径8.7・8.4㎝、器高1.4・1.3㎝を測る。底部は回転糸切りで188は板状圧痕を有する。189・190は土師器坏。それぞれ口径12.2・12.8㎝、器高2.6・2.4㎝を測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。191は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類。

SK-109（第25図）

調査区中央に位置する。平面形は方形を呈し、東西にテラスを有する。長さ108㎝、幅95㎝、深さ38㎝を測る。

出土遺物（第26図）192は土師器小皿。口径8.9㎝、器高1.0㎝を測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。193は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2b類。

SK-120（第27図）

調査区中央に位置する。平面形は長方形を呈し、長さ192㎝、幅95㎝、深さ30㎝を測る。

出土遺物（第28図）194は土師器坏。復元口径13.5㎝、器高2.6㎝を測る。底部は回転糸切り。195は白磁皿。

SK-123（第27図）

調査区南に位置する。平面形は長方形を呈し、長さ274㎝、幅158㎝、深さ34㎝を測る。床面には10～20㎝の礫が配される。釘の出土から木棺墓の可能性も考えられる。

出土遺物（第28図）196・197は土師器小皿。それぞれ復元口径9.6・8.8㎝、器高1.2・1.0㎝を測る。底部は回転糸切り。198は土師器坏。復元口径13.4㎝、器高2.2㎝を測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。199は天目茶碗。釉は黒褐色を呈する。200は陶器の皿。他に釘390～392（第39図）が出土している。

SK-130（第27図）

調査区南に位置し、東側をSE-81に切られる。平面形は楕円形か。長さ211㎝、深さ25㎝を測る。

遺物は土師器、白磁、瓦、釘が出土している。

SK-134（第27図）

調査区南に位置し、南側をSK-130に切られる。平面形は楕円形か。長さ188㎝、深さ55㎝を測る。

出土遺物（第28図）201は土師器坏。口径16.0㎝、器高3.2㎝を測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。他に青磁、瓦等が出土している。

SK-138（第27図）

調査区北に位置し、SD-155に切られる。北部は調査区外に延びる。平面形は楕円形か。

出土遺物（第28図）202・203は土師器小皿。それぞれ復元口径10.0・9.0㎝、器高1.4・1.1㎝を測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。204～206は土師器坏。口径15.1～16.7㎝、器高3.0～3.5㎝を測る。底部は回転糸切りで204以外は板状圧痕を有する。他に白磁、青磁の細片、被熱したと思われる瓦が出土している。

SK-142（第27図）

調査区中央に位置し、SK-143を切る。平面形は円形を呈し、径90㎝前後、深さ55㎝を測る。

出土遺物（第28図）207は白磁碗Ⅴ類。他に青磁の細片、瓦が出土している。

SK-143（第27図）

調査区中央に位置し、東側を切られる。平面形は円形か。壁は垂直に立ち、底面は水平である。長さ110㎝、深さ53㎝を測る。

出土遺物（第28図）208は土師器小皿。復元口径8.4㎝、器高1.0㎝を測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。209は土師器坏で復元口径14.4㎝、器高3.5㎝を測る。底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。210は無釉陶器の壺で灰色を呈する。他に白磁、青磁の細片、瓦が出土している。

SK-158（第29図）

調査区北に位置し、北側は調査区外に延びる。深さ50㎝を測る。

出土遺物（第30図）211は土師器小皿で口径8.8㎝、器高1.5㎝を測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。212は土師器坏で復元口径13.6㎝、器高2.8㎝を測る。底部は回転糸切り。213は青磁碗。他に白磁の細片、瓦が出土している。

SK-166（第29図）

調査区中央に位置する。平面形は方形を呈し、長さ188㎝、深さ55㎝を測る。

出土遺物（第30図）214は土師器坏で復元口径11.6㎝、器高2.3㎝を測る。215は瓦器椀。内外面ともミガキを施す。他に白磁、青磁の細片、瓦が出土している。

SK-173（第29図）

調査区中央に位置する。平面形は円形を呈し、径130㎝前後、深さ50㎝を測る。

出土遺物（第30図）216～218は土師器小皿。口径8.9～10.2㎝、器高0.9～1.3㎝を測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。219・220は土師器坏。それぞれ復元口径12.8・15.2㎝、器高2.2・2.8㎝を測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。221は陶器の皿。釉は外面が黒褐色、内面が赤黒色を呈する。222は陶器の壺。223は白磁碗Ⅴ類で円盤状に加工したものか。他に釘等が出土している。

SK-184（第29図）

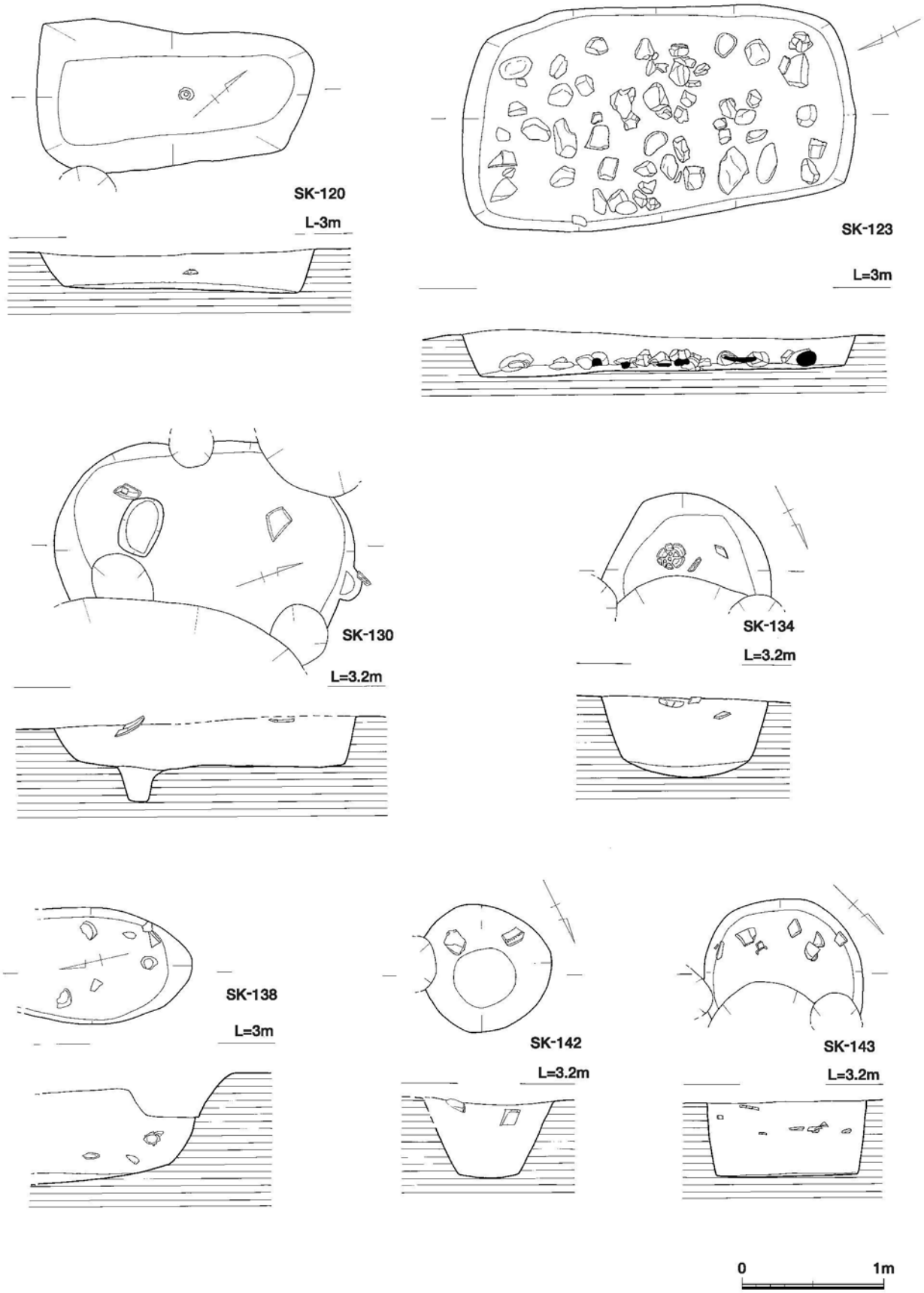
調査区中央南よりに位置する。平面形は楕円形を呈し、長さ113㎝、幅86㎝、深さ36㎝を測る。

出土遺物（第30図）224は土師器小皿。口径8.2㎝、器高1.1㎝を測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。225は土師器坏。口径13.9㎝、器高3.2㎝を測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。226は陶器の甕。

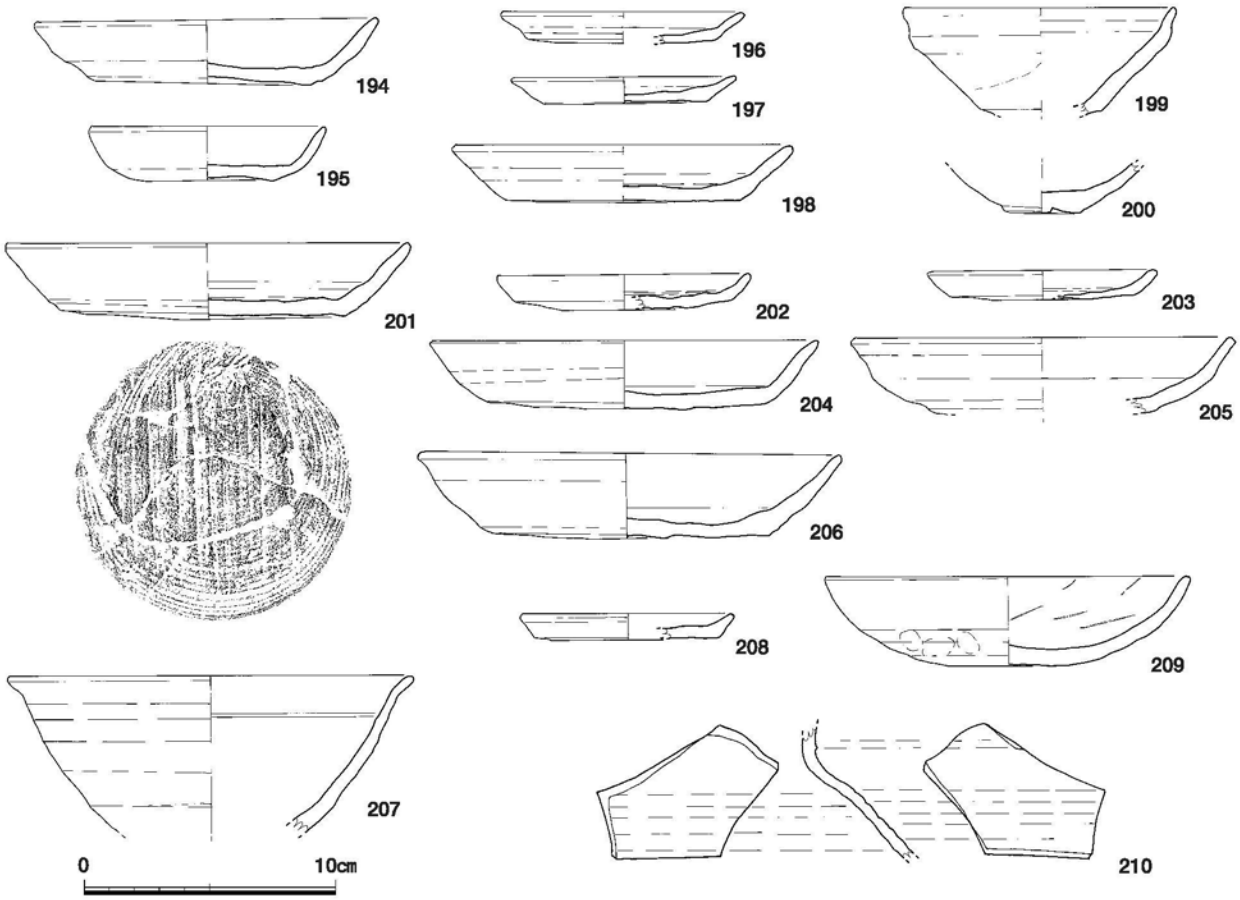
SK-186（第29図）

調査区中央南よりに位置する。平面形は楕円形を呈し、長さ142㎝、幅126㎝、深さ73㎝を測る。

出土遺物（第30図）227は白磁皿Ⅸ類。228～230は土師器坏。口径12.5～13.6㎝、器高2.6～2.8㎝を測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。231は陶器の壺。釉は暗褐色を呈する。



第27図　SK-120・123・130・134・138・142・143実測図（1/40）



第28図　SK-120・123・134・138・142・143出土遺物実測図（1/3）

SK-196（第29図）

調査区南に位置し、南側は調査区外に延びる。平面形は円形か。長さ142㎝、深さ60㎝を測る。遺物は土師器、白磁、瓦の細片が出土している。

SK-205（第29図）

調査区南に位置する。南部は調査区外に延び、西部はSK-293に切られる。平面形は隅丸長方形か。深さ60㎝を測る。

出土遺物（第30図）232・233は土師器小皿。口径8.2・8.8㎝、器高1.0・1.4㎝を測る。234は陶器の皿。釉は外面が黒褐色、内面が赤黒色を呈する。SK-173出土の221と接合したため同一個体である。

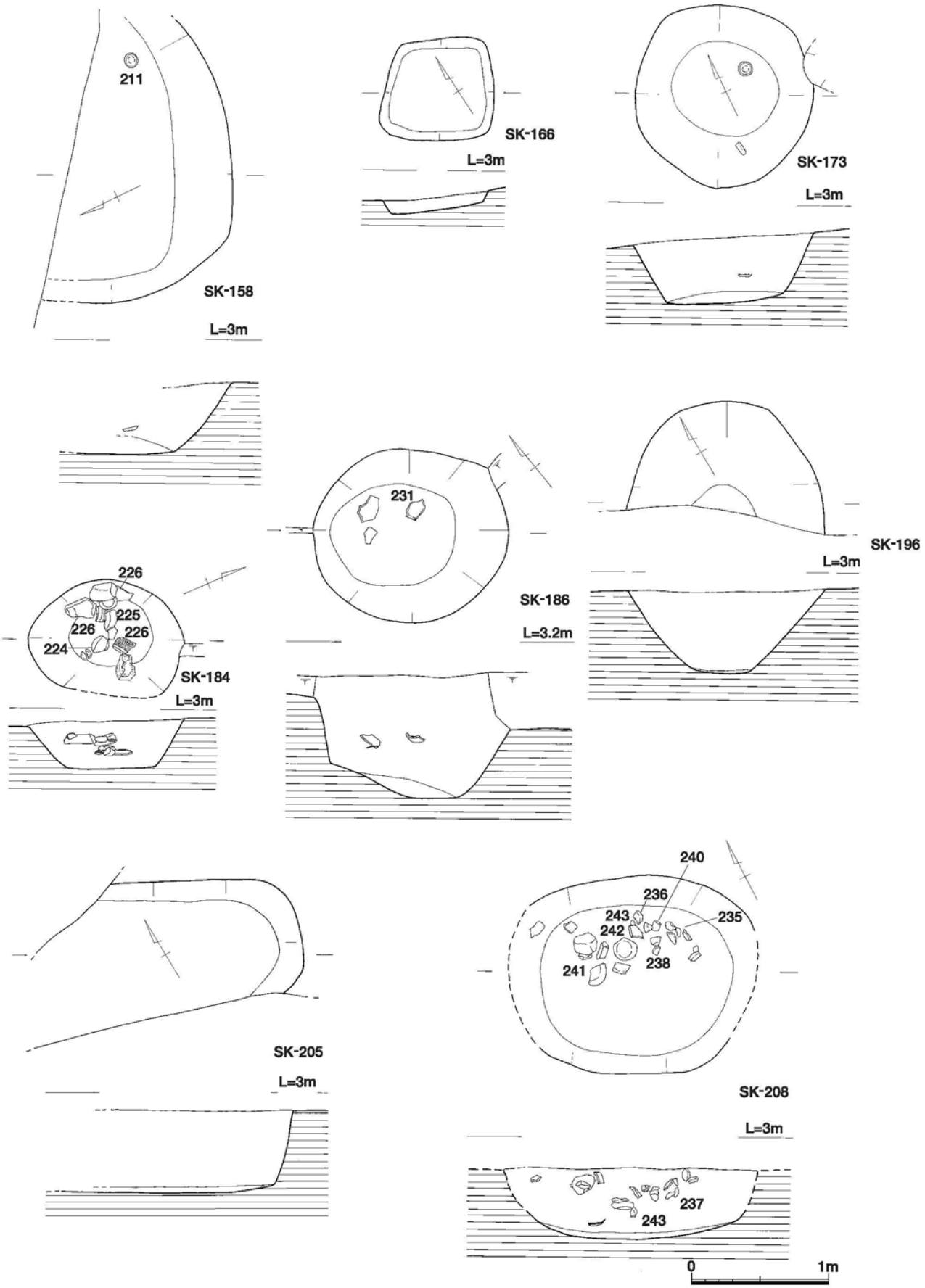
SK-208（第29図）

調査区北に位置し、SD-155に切られる。平面形は楕円形を呈し、長さ190㎝前後、幅135㎝、深さ54㎝を測る。

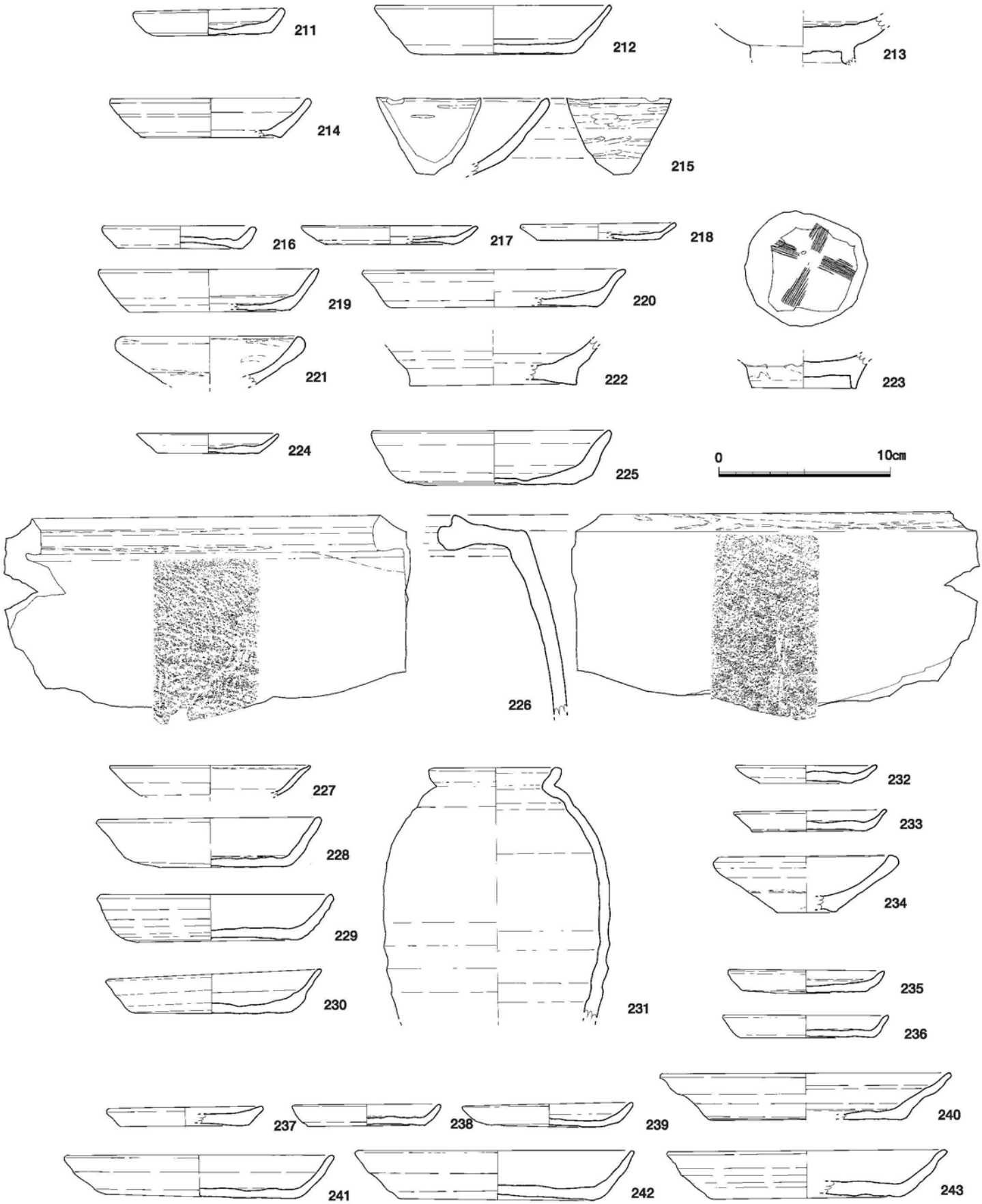
出土遺物（第30図）235～239は土師器小皿。口径8.6～9.8㎝、器高1.1～1.5㎝を測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。240～243は土師器坏。口径15.6～16.8㎝、器高2.5～2.9㎝を測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。

SK-238（第31図）

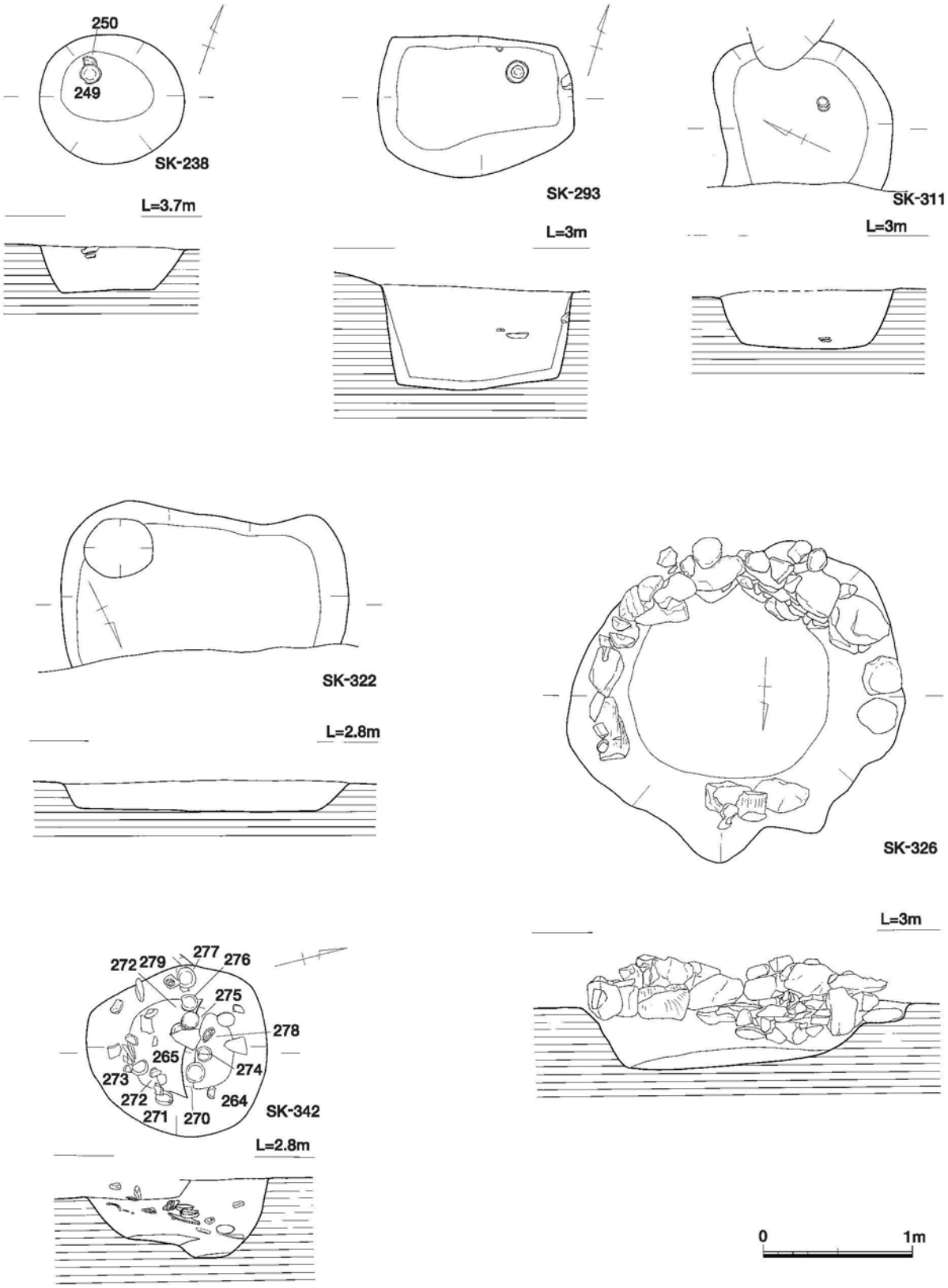
調査区北に位置する。平面形は楕円形を呈し、長さ98㎝、幅90㎝、深さ28㎝を測る。



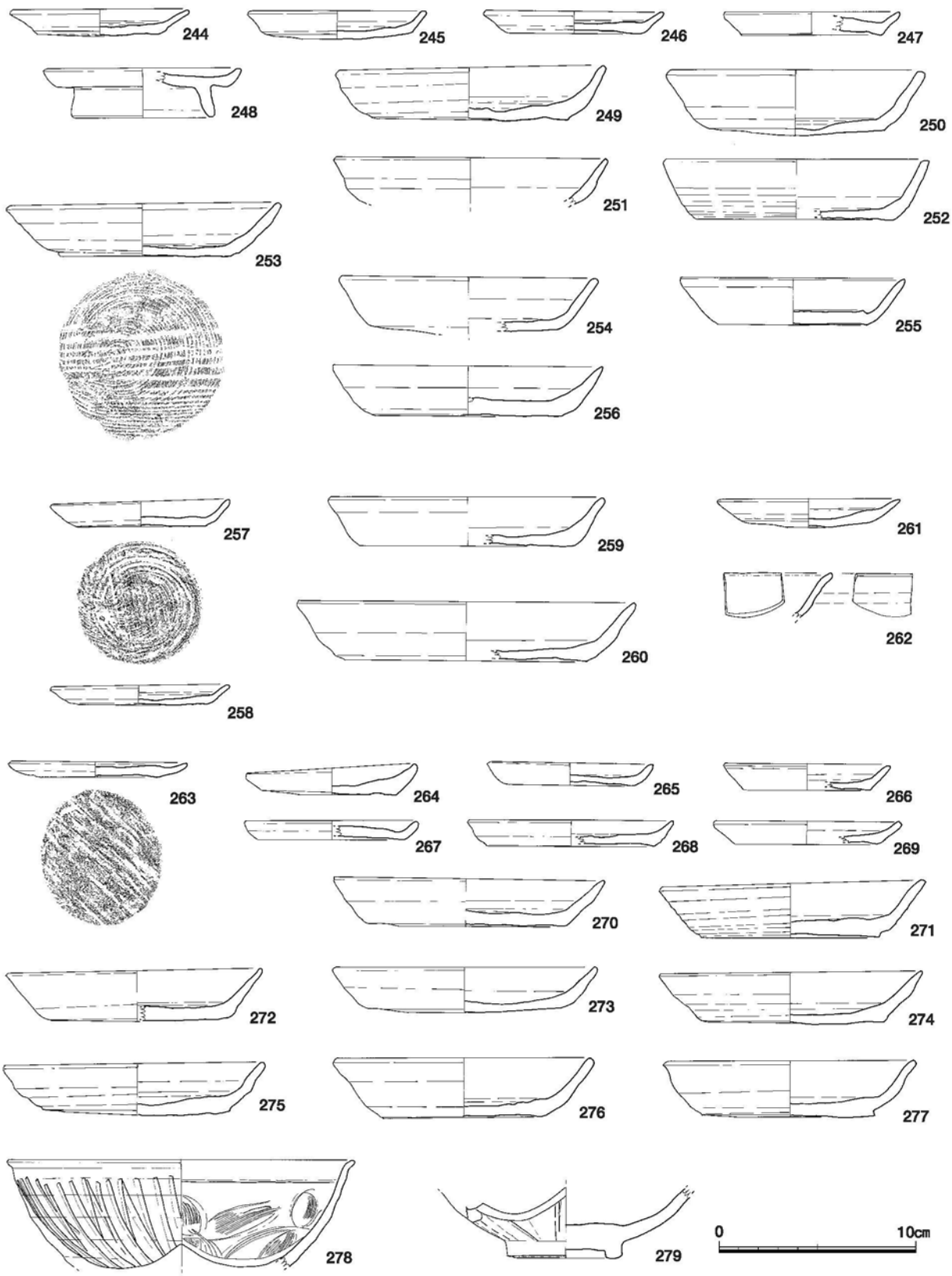
第29図　SK-158・166・173・184・186・196・205・208実測図（1/40）



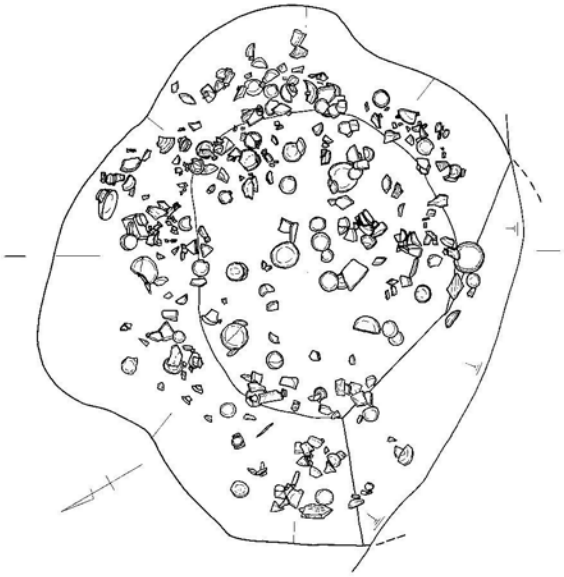
第30図　SK-158・166・173・184・186・205・208出土遺物実測図（1/3）

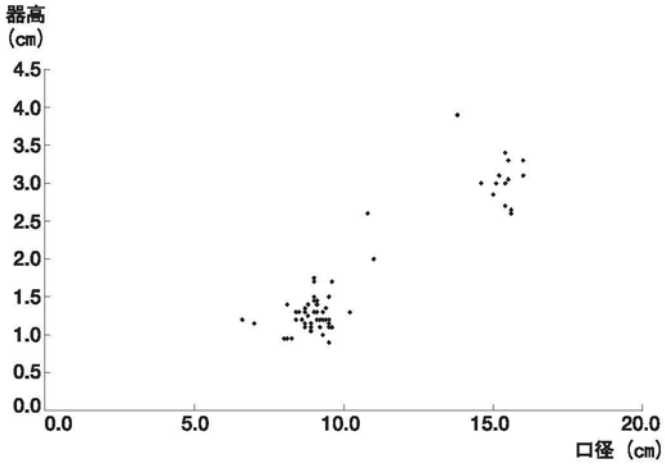


第31図　SK-238・293・311・322・326・342実測図（1/40）

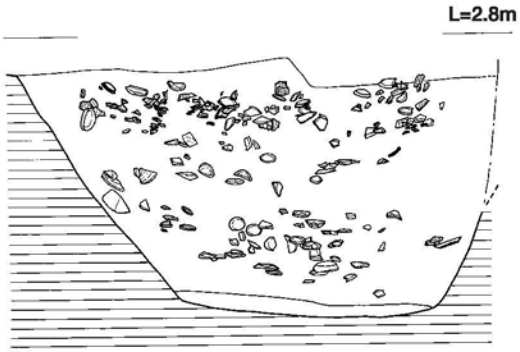


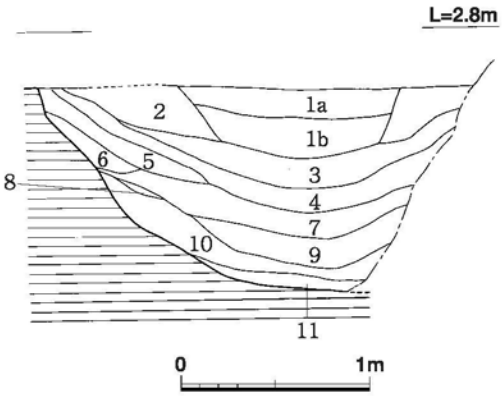
第32図　SK-238・293・311・326・342出土遺物実測図（1/3）





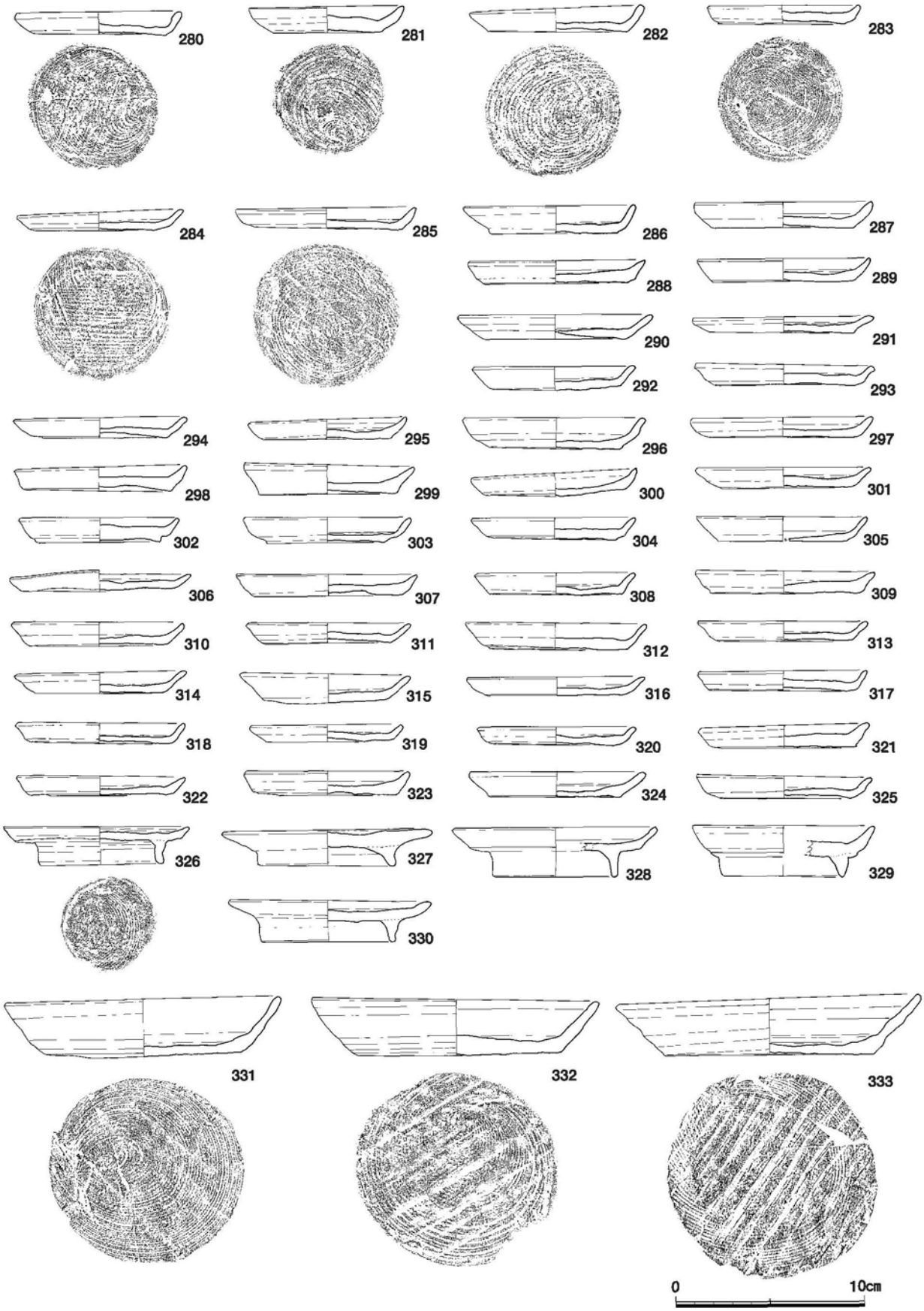
SK-294 出土土師器計測値



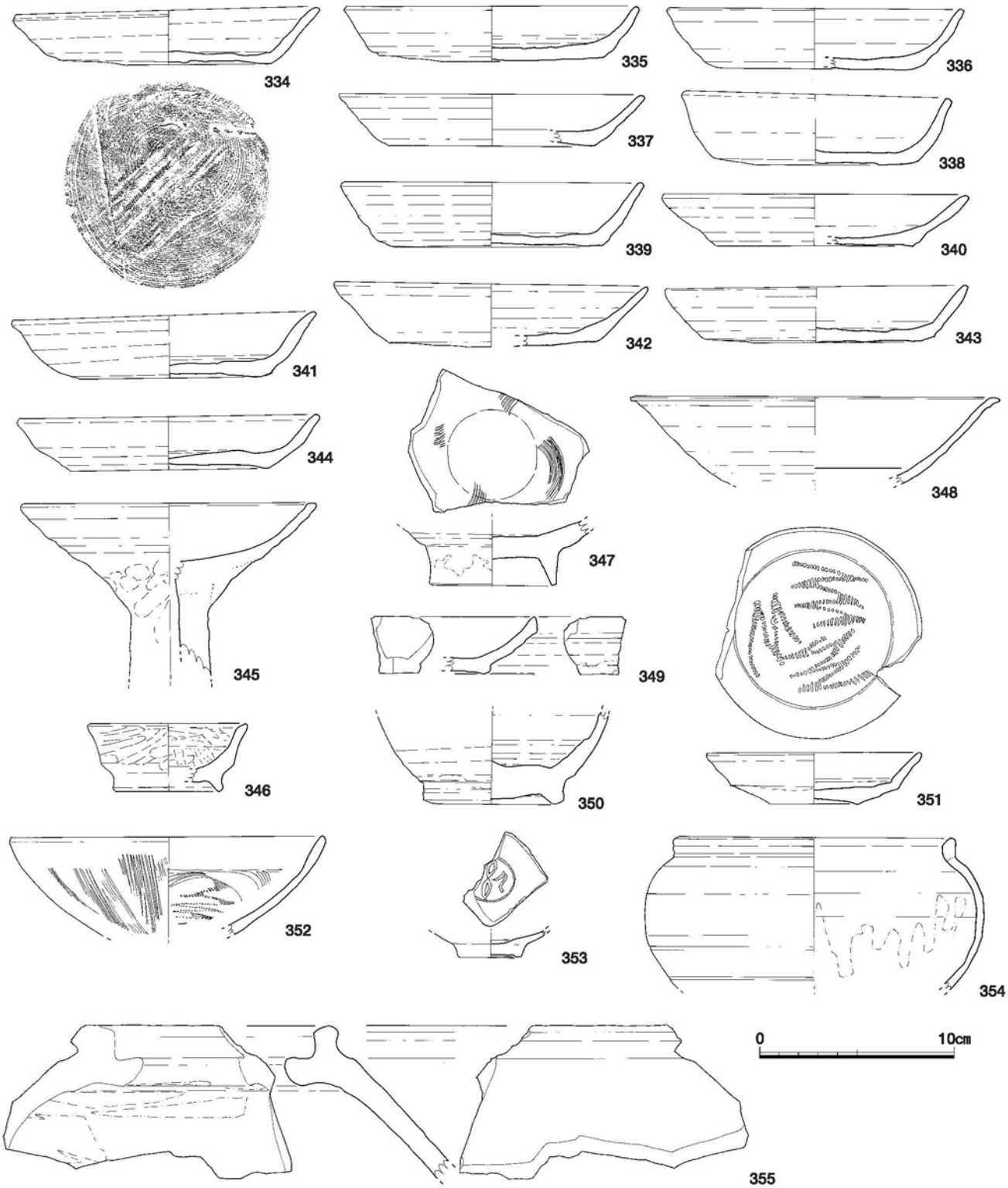


1a　１０YR褐灰４／１砂質土（炭化物含む、遺物多い）
1b　１０YR褐灰４／１砂質土（炭化物含む）
　　}鉄分のシミにより細分
2　１０YR黒褐３／２砂質土（炭化物含む、遺物多い）
3　１０YR灰黄褐４／２砂質土（やや水分含み粘性）
4　１０YR暗褐３／３砂質土（水分多い粘性、ややしまりある）
5　１０YR黄褐５／８と１０YR灰黄褐４／２砂質土のラミナ状堆積
6　１０YRにぶい黄褐３／３砂質土
7　１０YR褐灰４／１砂質土（水分非常に多い、ややしまり、炭化物少量含む）
8　１０YR灰黄褐５／２砂質土（黄褐色砂含む）
9　１０YR褐灰４／１砂質土（水分非常に多い、ややしまり、土器片多い）
10　１０YR灰黄褐６／２砂質土（水分多い、非常にしまりがある）
11　１０YR褐灰６／１粘質土（有機物非常に多い）

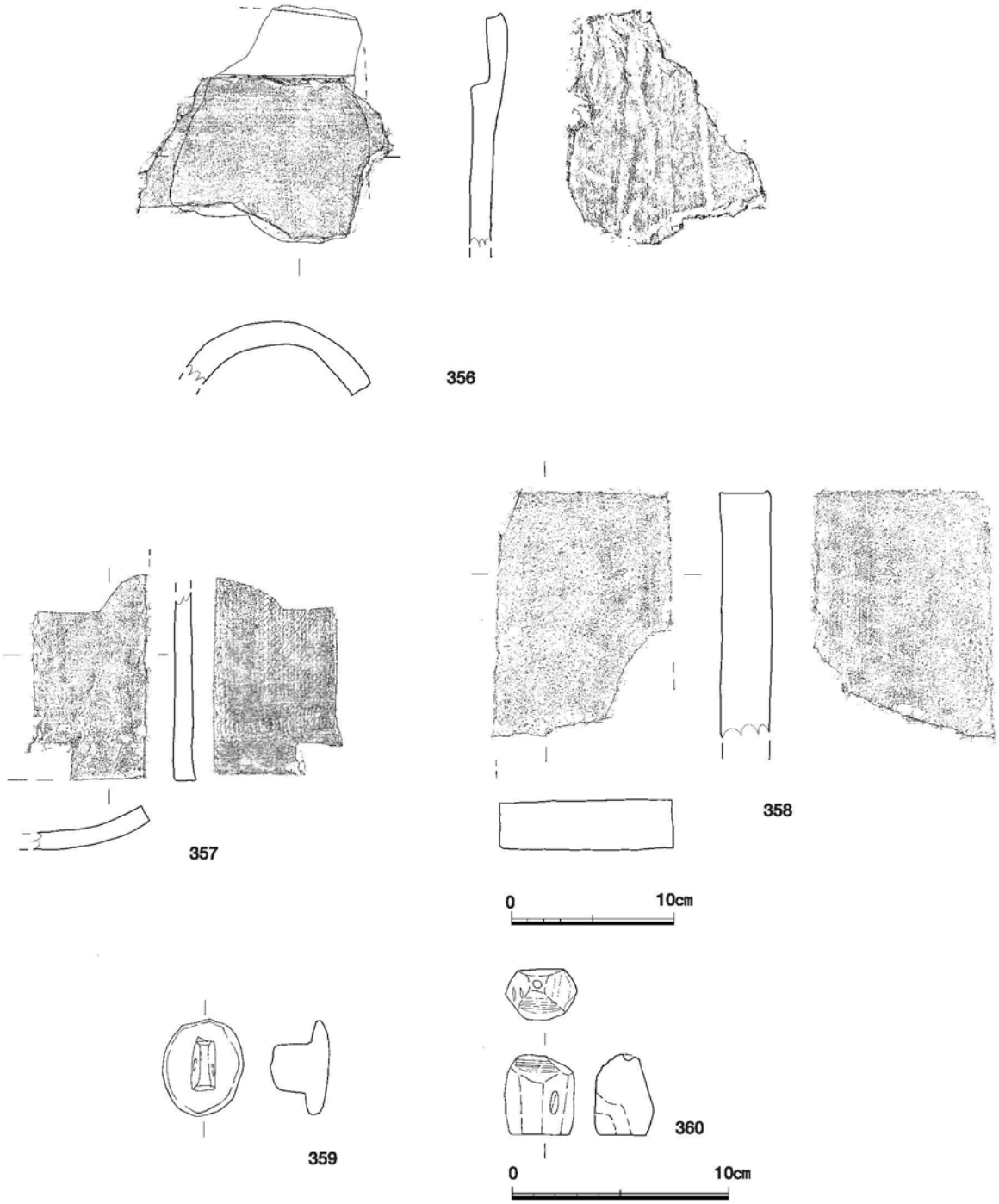
第33図　SK-294 実測図（1/40）



第34図　SK-294出土遺物実測図（1/3）



第35図　SK-294出土遺物実測図（1/3）



第36図　SK-294出土遺物実測図（1/3・1/4）

出土遺物（第32図）244～247は土師器小皿。口径8.8～9.0㎝、器高1.1～1.5㎝を測る。底部は244がヘラ切りで他は回転糸切り。245・246は板状圧痕を有する。248は高台付皿。口径10.0㎝、器高2.4㎝を測る。249～251は土師器坏。口径13.0～13.8㎝、器高2.3～3.3㎝を測る。249・250は底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。他に青磁片、釘が出土している。

SK-293（第31図）

調査区南に位置し、SK-205を切る。平面形は長方形を呈し、壁は鋭角に立つ。長さ130㎝、幅95㎝、深さ70㎝を測る。

出土遺物（第32図）252～255は土師器坏。口径13.4～13.9㎝、器高2.5～2.9㎝を測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。256は白磁皿Ⅸ-1a類。

SK-294（第33図）

調査区南西に位置する大型の土坑。南部は調査区外に延びる。平面形は不整な円形を呈し、東西286㎝、深さ136㎝を測る。

出土遺物（第34～36図）土師器の小皿、坏を中心に多量な遺物が出土した。280～325は土師器小皿。口径8.0～9.6㎝、器高0.9～1.4㎝を測る。底部は回転糸切りで281・282・308・317以外は板状圧痕を有する。326～330は高台付皿。口径9.6～11.0㎝、器高2.0～2.6㎝を測る。331～344は土師器坏。口径14.6～16.0㎝、器高2.7～3.9㎝を測る。底部は回転糸切りで337以外は板状圧痕を有する。345は土師器の高坏。346は瓦器の小碗。復元口径8.2㎝、器高3.4㎝を測る。内外面ともミガキを施す。347～350は白磁。347・348は碗Ⅴ類。349は皿Ⅱ-1b類。350は壺。351・352は青磁。351は同安窯系青磁皿Ⅰ-1b類。352は同安窯系青磁碗Ⅰ-1b類。353は青白磁碗。354・345は陶器。354は鉢。355は甕。356～358は瓦。359・360は滑石製品。

SK-311（第31図）

調査区南西に位置し、SK-294に切られる。平面形は不整な楕円形か。幅95㎝、深さ40㎝を測る。

出土遺物（第32図）257～260は土師器。257・258は小皿。口径9.0・9.1㎝、器高1.3・1.1㎝を測る。259・260は坏。口径14.0・17.0㎝、器高2.4・3.0㎝を測る。いずれも底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。他に瓦が出土している。

SK-326（第31図）

調査区中央に位置する石組土坑である。北側は石が一部残らない。平面形はやや不整な円形を呈し、径220㎝前後、深さ75㎝を測る。

出土遺物（第32図）261は土師器小皿。復元口径9.2㎝、器高1.4㎝を測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。262は白磁皿Ⅸ類。他に瓦器、釘が出土している。

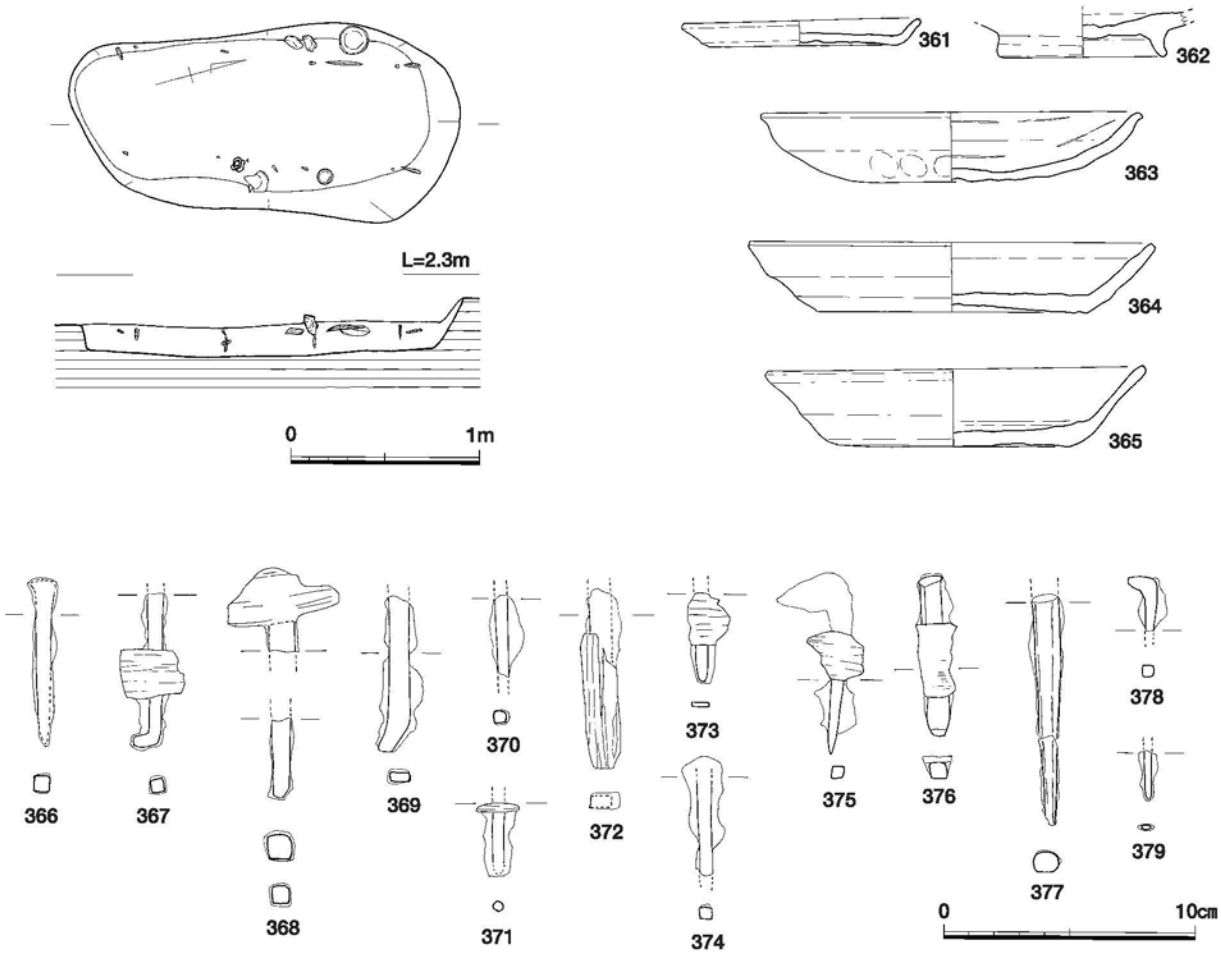
SK-332（第31図）

調査区西に位置し、北側をSD-155に切られる。平面形は長方形か。長さ190㎝、深さ22㎝を測る。遺物は土師器、白磁、瓦、石鍋が出土している。

SK-342（第31図）

調査区中央に位置する。平面形は円形を呈し、径120㎝前後、深さ52㎝を測る。

出土遺物（第32図）263～269は土師器小皿。口径8.3～10.4㎝、器高0.9～1.1㎝を測る。底部は回転糸切りで268・272以外は板状圧痕を有する。270～277は土師器坏。口径12.9～13.6㎝、器高2.2～3.0㎝を測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。278は同安窯系青磁碗Ⅲ-1c類。279は龍泉窯系青磁碗Ⅱ-b類。



第37図　SK-290実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

（3）埋葬遺構

SK-290（第36図）

調査区西、SE-297を切って位置する。釘の出土から木棺墓と考えられるが人骨は出土していない。平面形はやや不整な長方形を呈し、長さ203㎝、幅104㎝、深さ31㎝を測る。木棺の規模は長さ150㎝、幅50㎝程度か。

出土遺物（第36図）361～365は土師器。361は小皿。口径9.4㎝、器高1.2㎝を測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。362は高台付皿。363～365は坏。口径15.0～16.0㎝、器高2.7～3.1㎝を測る。底部は364・365回転糸切りで板状圧痕を有する。366～379は釘。一部に木質が付着する。他に白磁、刀子が出土している。

（4）溝状遺構（SD）

SD-155（第38図）

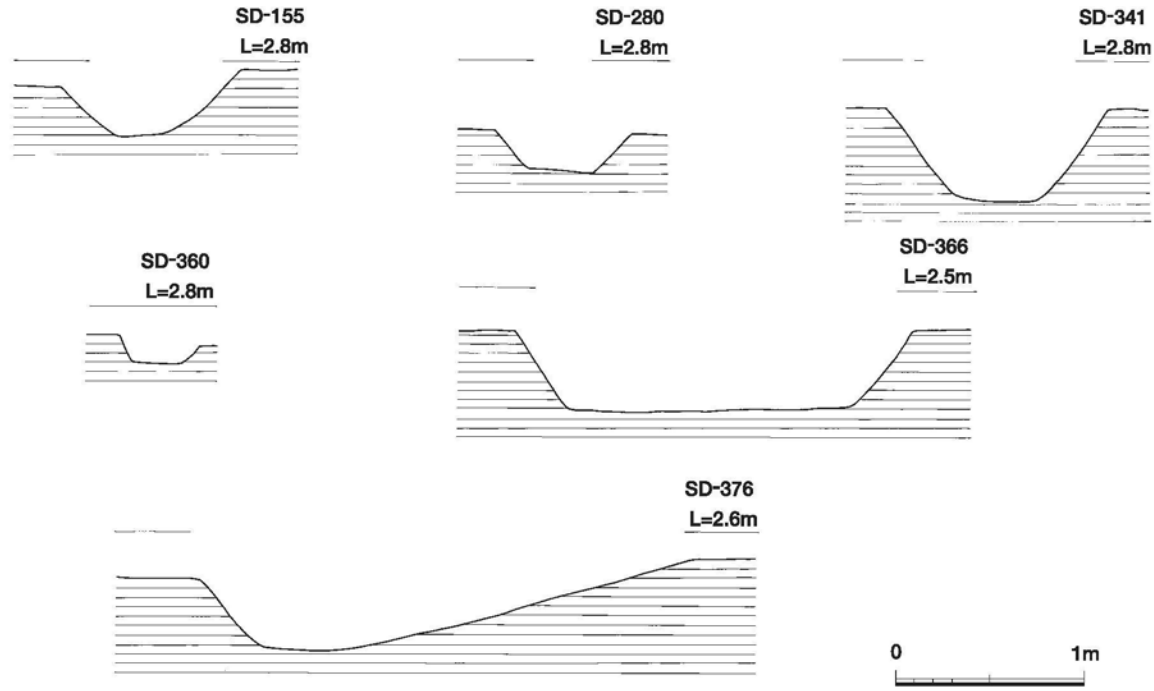
調査区北に位置し、SD-341に切られる。東西方向に延び、幅90㎝、深さ30㎝前後を測る。

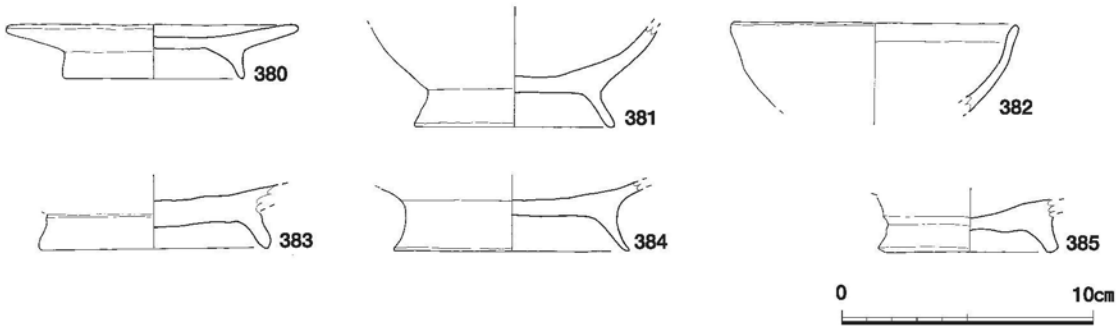
遺物は土師器、青磁、瓦、釘が出土している。

SD-280（第38図）

調査区北、SD-155の北に位置し、東西方向に延びる。幅70㎝、深さ20㎝前後を測る。

遺物は土師器、瓦器、白磁の細片が出土している。





第38図　SD-155・280・341・360・366・376断面実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

SD-341（第38図）

調査区西に位置し、南北方向に延び、調査区南で西に曲がる。SD-155を切る。幅110㎝、深さ100㎝前後を測る。

遺物は近世染付、瓦が出土している。

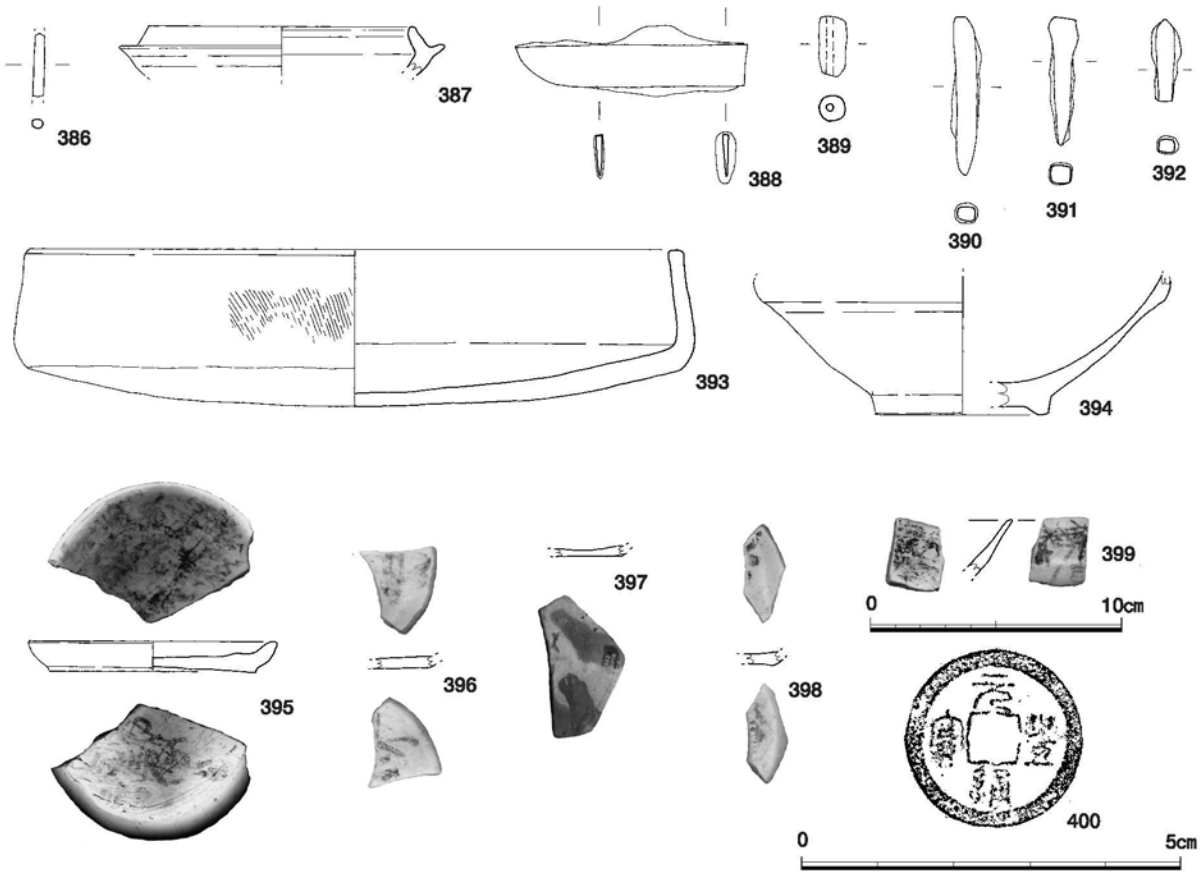
SD-360（第38図）

SD-341の東に位置し、南北方向に延びる。幅40㎝、深さ15㎝前後を測る。遺物は土師器の細片が出土している。

SD-366（第38図）

SD-341の西に位置し、南北方向に延びる。幅200㎝、深さ40㎝前後を測る。SD-376と同一と考えられる。

出土遺物（第38図）380～384は土師器。380は高台付皿。381～384は碗。他に白磁の細片、瓦が出土している。



第39図　その他の出土遺物実測図（1/1・1/3）

SD-376（第38図）

SD-341の西に位置し、南北方向に延びる。幅250㎝、深さ35㎝前後を測る。

出土遺物（第38図）385は土師器碗。他に瓦が出土している。

（5）その他の出土遺物

386はSK-31出土のガラス製品。両端を欠損する。現存長2.5㎝を測る。387はSK-50出土の須恵器坏。388はSK-108出土の刀子。現存長9.1㎝、身幅1.7㎝を測る。389はSK-108出土の土錘。390～392はSK-123出土の釘。393はSK-130出土。土師質の鉢。復元口径25.0㎝、器高6.2㎝を測る。394は白磁碗Ⅳ類。395～399はSK-294出土の墨書土師器。400はSP-12出土の銅銭で元豊通宝。

Ⅲ．おわりに

今回の調査で検出した遺構は井戸、土坑、埋葬遺構（木棺墓）、溝、柱穴である。時期は12世紀～15世紀及び近世である。発掘調査の概要でも述べたが、遺構の掘り込みは4層以下で確認されたが、西側の堆積が安定しておらず、検出が困難であったことと、時間的制約から地山面の黄褐色砂層及びその上層で検出作業を行った。これにより検出面に達しない浅い遺構が調査時に消滅している。近世の遺構が少ないのは本来的時間推移に加えこのことも影響している。これを勘案しても13世紀後半～14世紀前半以降、遺構が減少することは否定できない。

各遺構についてみると井戸は調査区全域に分布しており特に偏りはみられない。SE-229・296・297・365が12世紀前半、SE-226・236・343が12世紀後半、SE-124が13世紀前半、SE-295が13世紀後半～14世紀、SE-1が14世紀、SE-81が近世に位置付けられる。大半が井筒に桶を用いており、SE-364は方形板組の痕跡が残る。SE-81は上部の瓦が抜き取られ遺存していない可能性がある。井筒の痕跡が上層から確認できたものは、SE-1・124東井筒・226である。これらからは上層からまとまって土師器が出土したり、礫が多量に投棄されていたりしており廃棄段階で祭祀的行為が行われていたものと考えられる。他は廃棄段階で井筒を抜かれたものとおもわれ、祭祀的痕跡は確認できていない。

土坑は概ね12世紀後半～15世紀及び近世にかけて確認されたが、12世紀後半～13世紀代のものが中心を成す。SK-294をはじめ、SK-52・208・342等、完形の土師器の小皿・坏等を投棄した土坑がみられるが規模、形態は様々である。SK-326は本調査で唯一の石組土坑である。時期は13世紀後半から14世紀前半と考えられるが、性格は不明。他の土坑は概ね廃棄土坑であろう。

埋葬遺構はSK-290が木棺墓と考えられる。時期は12世紀中～後半であろうか。他にSK-123もその可能性が考えられる。SK-123を木棺墓とすれば、墓壙を掘削して直に木棺を据えるものと、掘削後、配石して棺を据える2つのタイプが存在することになる。いずれも人骨は確認されていない。

溝はSD-366・376が11世紀代の可能性があるが確定できない。SD-155は現在の区割りに沿うように南北方向に直線的に延びる。区画溝であろう。時期は13～14世紀代以降と考えられる。調査区東側では柱穴がこれに直交して延びる傾向がある。柱穴は時期が決めがたいが近い時期であろう。SD-341も区画溝であるが時期は近世に位置付けられる。

各遺構について簡単に述べたが、周囲の状況と比較すると遺構の分布状況は西に位置する第27次調査では溝を中心に柱穴、土坑、井戸という規則的な配置がみられ、町割りが形成されていたことが指摘されているが、本調査区では前述のとおりSD-155に対し、東側の柱穴群が直交方向に延びる傾向が見られるが、井戸、土坑に規則性は看取できない。これは第27次調査が13世紀以降が中心を成すのに対し、本調査区の井戸、土坑はこれより1段階古い12世紀代～13世紀前半が中心となる。この時期差が分布状況の差として現れたものであろう。町割りの形成もこの時期を遡らないと考えられる。

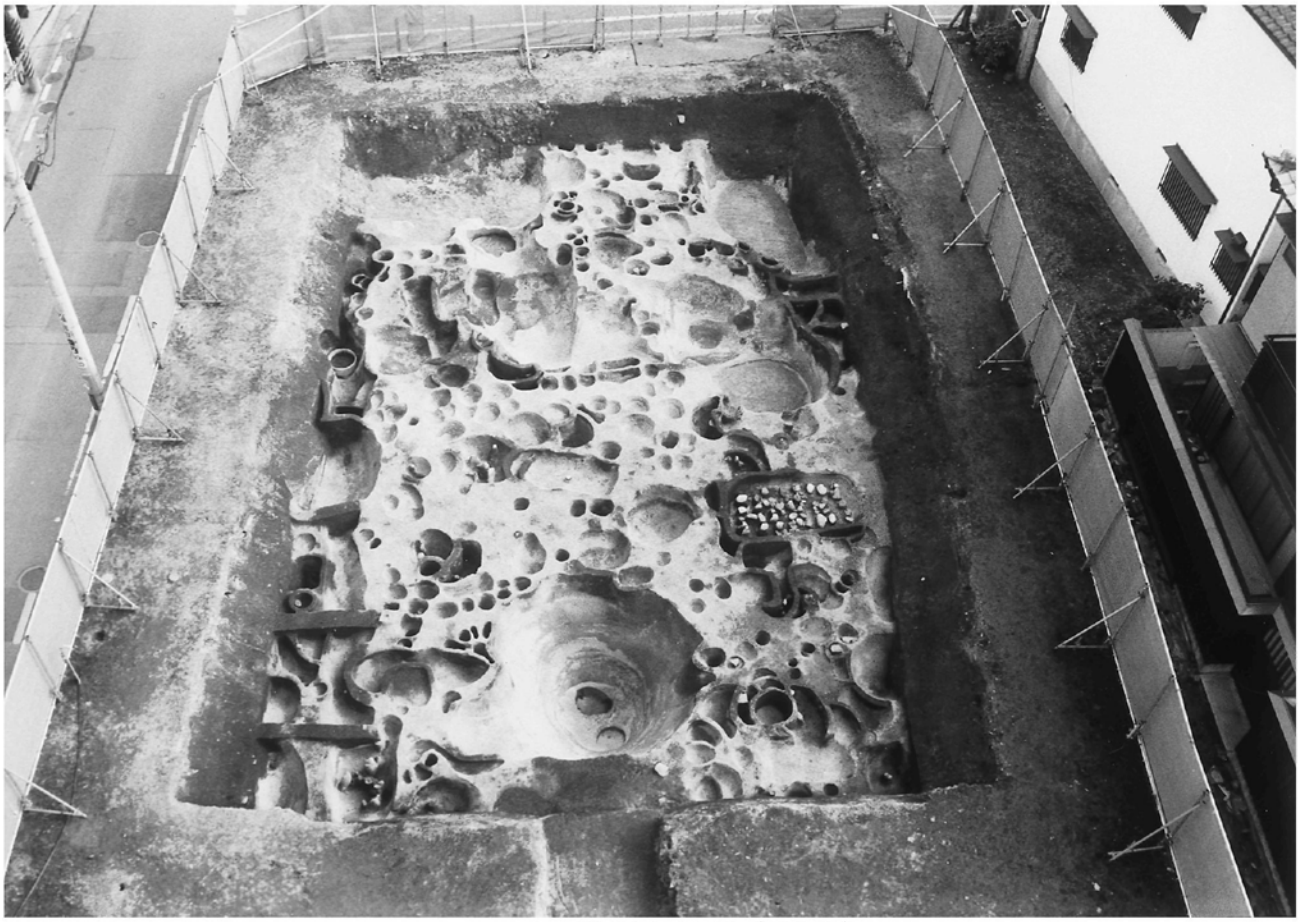
最後に今回の調査では基盤層である黄褐色砂の形成時期の確認するために調査の終了した井戸の下層を掘削した。その結果、古代と考えられる土師器の細片が出土した。これにより本地点砂層の形成時期はそれ以降であると考えられる。

図　　版

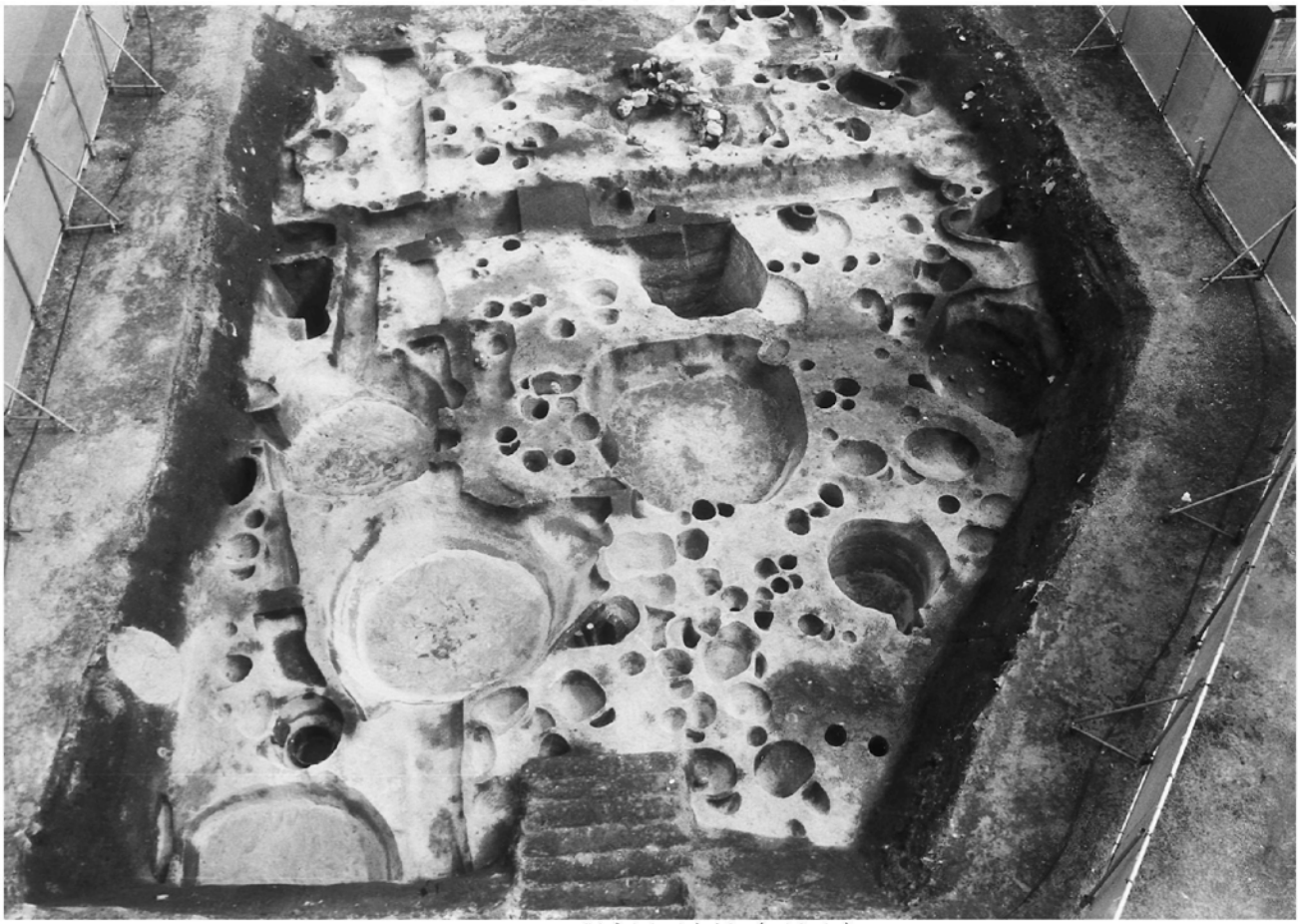
1．調査区東遠景

2．調査区西遠景

図版２

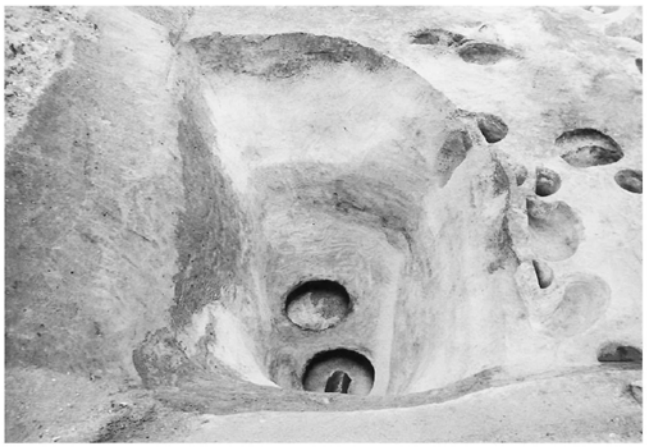


１．調査区東全景（西から）



２．調査区西全景（西から）

1．SE-1・2（南から）



2．SE-1・2（東から）

3．SE-81（南から）

4．SE-124（西から）

5．SE-226（北から）

6．SE-229（北から）

図版４

１．SE-236（西から）

２．SE-296（北から）

３．SE-297（東から）

４．SE-343（東から）

５．SE-364（北から）

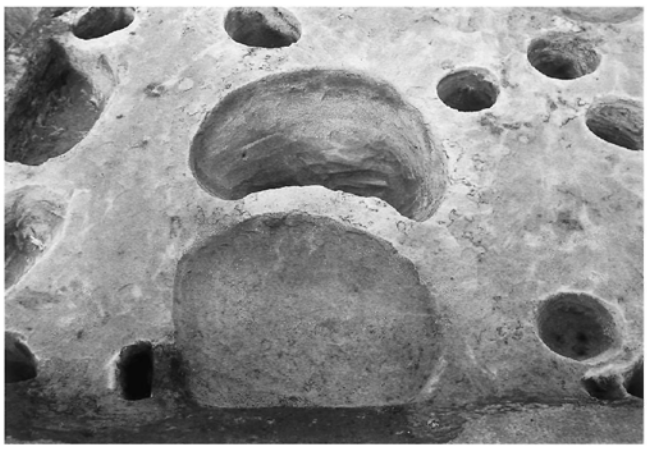
６．SE-365（西から）

1．SE-367（北から）

2．SK-22（東から）

3．SK-31 土層（南から）

4．SK-31（西から）



5．SK-32・41（東から）

6．SK-52（北から）

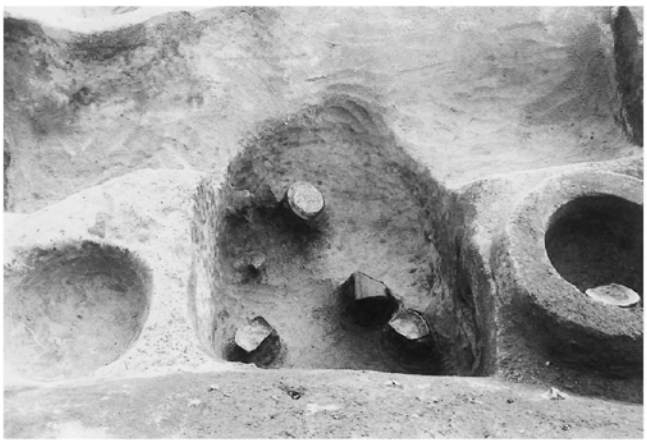
図版6

1．SK-53（北から）

2．SK-109（西から）

3．SK-120（北から）

4．SK-123（西から）



5．SK-138（北から）

6．SK-158（北から）

1．SK-173（西から）

2．SK-184（西から）

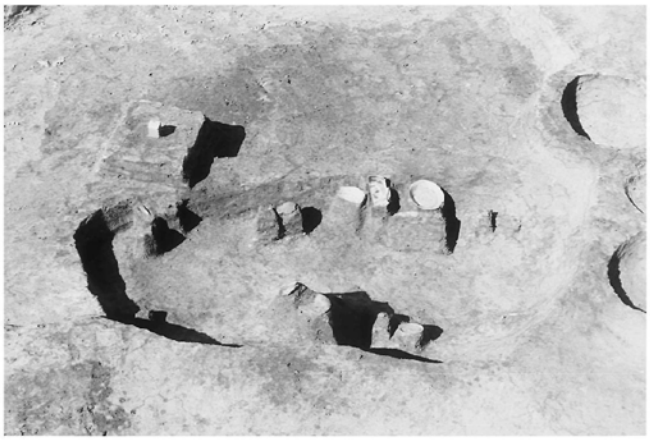
3．SK-186（南から）

4．SK-196（南から）

5．SK-208（東から）

6．SK-238（東から）

図版8



1．SK-290（東から）

2．SK-293（北から）

3．SK-294（南から）

4．SK-294 土層（西から）

5．SK-326（北から）

6．SK-342（東から）

箱崎遺跡第45次調査の記録

例　言

1．本書は平成16（2004）年3月1日から同年3月22日に福岡市教育委員会が行った、福岡市東区馬出5丁目24番地内所在の箱崎遺跡第45次調査の報告書である。
2．発掘調査と整理報告は、福岡市土木局が計画した都市計画道路馬出東浜線改良工事に伴う令達事業として行った。
3．検出遺構には発見順に3桁の連番号を与え、遺構の性格を示す記号としてSB（掘立柱建物）、SD（溝）、SE（井戸）、SK（土坑）、SP（柱穴・ピット）を頭に付した。
4．本書に使用した遺構実測図の作製は、吉武　学、坂口剛毅が行った
5．本書に使用した遺物実測図の作製は、主に田中克子が行い、吉武が補った。
6．本書に使用した写真の撮影は、吉武が行った。
7．本書に使用した図の製図は、主に田中克子が行い、吉武が補った。
8．本書に使用した方位は全て磁北である。
9．本書の執筆は、土器を田中が、その他を吉武が行った。
10．本書の編集は、吉武が行った。
11．本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、ここで管理・活用する。

遺跡調査番号	0269		遺跡略号	HKZ-45	
調査地地籍	東区馬出5丁目24番地内		分布地図番号	34　箱崎　2639	
開発面積	171㎡	調査対象面積	171㎡	調査面積	152㎡
調査期間	2004年（平成16年）3月1日～2004年（平成16年）3月22日				

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経過

都市計画道路馬出東浜線建設に伴う埋蔵文化財の調査に至る経過ついては既刊の報告書に詳しいが、平成19年6月24日に福岡市土木局東部建設第1課（現東部建設課）より建設予定地内の埋蔵文化財の有無についての事前審査申請があり、依頼を受けた教育委員会文化財部埋蔵文化財課では、事業地内のうち埋蔵文化財包蔵地の可能性がある箇所についての回答を行うとともに、用地買収が終了した部分より順次試掘調査を行い、周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡とほぼ同じ範囲で遺跡を確認した。これに対する道路計画変更等による保存は困難な状況にあることから、東部建設第1課の依頼により埋蔵文化財課が記録保存のための緊急発掘調査を実施することとなり、用地買収や構造物等の撤去が終了し調査可能となった部分から順次調査を行った。調査は平成13年度より開始しており、現在も一部で発掘調査が継続している。

本書で報告する箱崎遺跡第45次調査は、諸般の事情から平成15年度末に緊急的に実施したもので、発掘調査を平成16（2004）年3月1日から同年3月22日に、同じく整理報告書作成を平成18年度に、いずれも土木局東部建設課の令達事業として行った。

2．調査の組織

調査にあたり、福岡市土木局道路建設部東部建設課、並びに地元住民の皆様にご理解とご協力を頂いた。調査は以下の組織で行った。

調査委託　福岡市土木局道路建設部東部建設課

調査主体　福岡市教育委員会　教育長　生田征生（前任）植木とみ子（現任）

調査総括　埋蔵文化財課長　山崎純男（前）　埋蔵文化財第1課長　山口譲治（現）
埋蔵文化財課調査第2係長　田中壽夫（前）　埋蔵文化財第1課調査係長 山崎龍雄（現）

調査庶務　文化財整備課管理係　御手洗　清（前）　文化財管理課管理係　鈴木由喜（現）

調査担当　埋蔵文化財課事前審査係　田上勇一郎（前）　星野惠美（現）（事前協議担当）
埋蔵文化財課調査第2係（現：埋蔵文化財第1課調査係）　吉武　学（調査・報告担当）

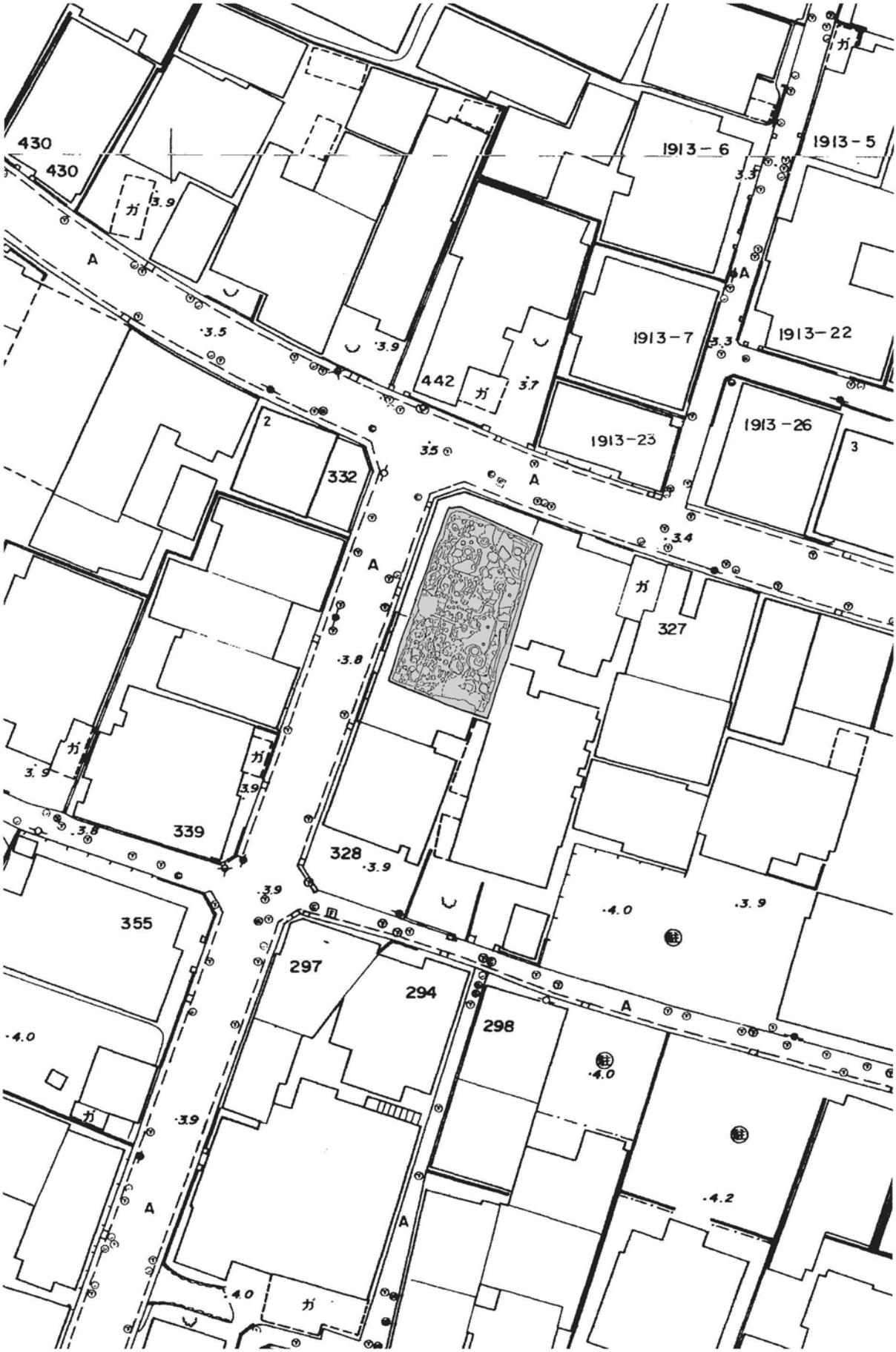
調査協力　坂口剛毅（技能員）、佐藤俊治、嶋ヒサ子、清水　明、西田文子、野口ミヨ、野田淳一、平川正夫、松永シゲ子、宮崎タマ子、持丸玲子、森田祐子、山内　恵、山崎光一、（五十音順、敬省略）

整理協力　田中克子（技能員）、下山慎子、萩尾朱美、森　寿恵（五十音順、敬省略）

3．箱崎遺跡第45次調査地点の位置

箱崎遺跡は博多湾岸に形成された古砂丘上に立地するが、これまでの箱崎遺跡の調査成果によると砂丘頂部のひとつは箱崎八幡宮内にあり、第45次調査地点はここから南西へ約150m離れており、砂丘西側の海へ向かって落ちていく緩斜面上に位置するものと考えられる。

周辺で行われた調査には、都市計画道路馬出東浜線道路新設工事に伴って行われた一連の第27・37・47・54次調査等があるが、詳細については巻頭文を参照のこと。



第１図　箱崎遺跡第45次調査区の位置（1/500）

Ⅱ．発掘調査の記録

１．発掘調査の概要　第１図　図版１

調査地点は北側と西側を生活道路で画された一画で、南北に細長く、南北20ｍ×東西10ｍの範囲である。道路を挟んだ西側は第37次調査区（2003年調査）、東側は第47次調査区（2004年～2005年調査）である。表土剝ぎは重機を用いて行い、生活道路との間に1.5ｍ、南側宅地との間に２ｍの引きを取った。一方、東側は道路予定地内の宅地の解体が済んでいたため、次回の発掘調査との整合性を図るためぎりぎりまで掘削を行った。排土もこの東側の道路予定地内に借り置きし、調査後埋め戻した。このようにして設定した調査区は、南北約17ｍ×東西約９ｍの152㎡である。

遺構実測は馬出東浜線の中軸線に合わせて設定した基準線をもとに行い、1/100平板実測、1/20平面実測の他、適宜個別遺構実測図等を作成した。また、土木局より提供を受けた座標データを用いて国土座標（第Ⅱ系）上の遺構の位置を求めた。標高もこれによる。

現状は宅地跡で、地表面の標高は海抜3.4～3.8ｍを測り、表土は50㎝前後の客土層である。遺構面の標高は3.0～3.2ｍで、南西→北東に若干落ちるが削平を受けているものと考えられる。

検出遺構は、中世の掘立柱建物１、井戸４、土坑・ピット多数、近世の溝１・土坑少数、及び近現代の攪乱坑である。掘立柱建物は扁平な角礫を根石に用いており、調査区の南～西外に伸びており全容は不明である。井戸は白磁のみを出土するものから鎬蓮弁文の青磁碗を出土するものまでがあり、12世紀前半頃を境に素掘りから桶側井戸に変化する様子が分かった。他の土坑などの遺構も12～13世紀を中心とする時期のものと考えられる。近世遺構には溝と瓦井戸などがあり、くらわんか茶碗などの出土からみて全て18世紀以降のものとみられ、今回の報告からは省いた。

出土遺物は、土器がコンテナ19箱、木製品（井戸側材）が１箱の計20箱である。総じて土器は土師器が多く、陶磁器は少量である。特筆すべき遺物として、13世紀頃の土坑より繭型分銅１点が、同井戸より「嘉祐通寶」１点が出土した。

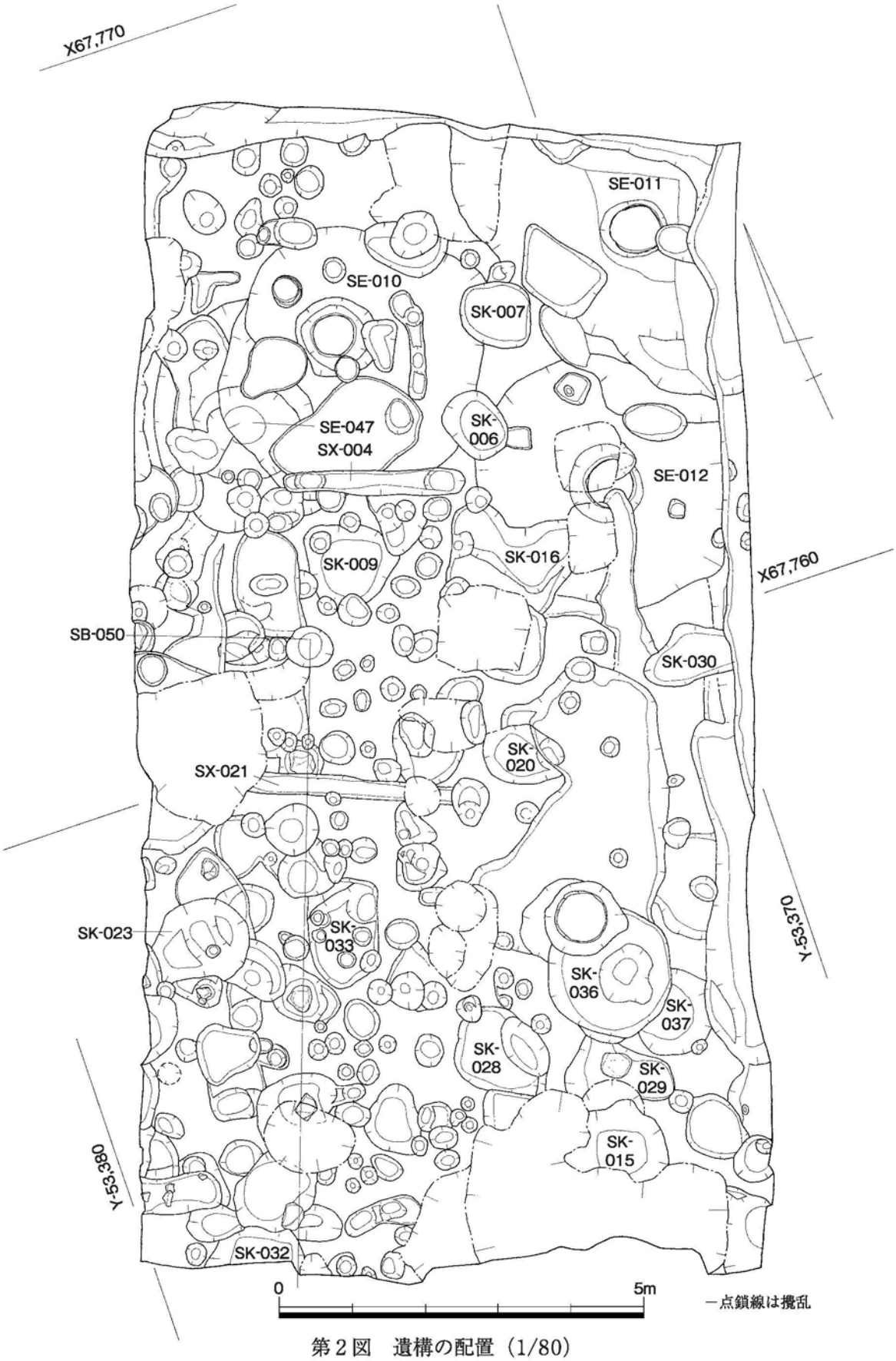
２．検出遺構と出土遺物

（１）掘立柱建物

掘立柱建物は１棟を報告する。他にも柱穴と思われるピットが多数あるが、調査区が狭いこともあり、建物には復元できなかった。

SB-050　第３図　図版１

調査区南西部に扁平礫を根石に据えたピットが並ぶ遺構があり、掘立柱建物として復元した。南北に長い建物で、南側と西側はそれぞれ調査区外に伸びていく。現状で桁行５間、梁行１間を数える。桁行方位は磁北から26°東に偏する。桁行全長は7.93ｍで、柱間は北から1.64ｍ、1.57ｍ、1.68ｍ、1.52ｍ、1.52ｍを測る。梁行は2.4ｍである。攪乱坑や他のピットに柱穴の一部を切られるが、柱穴平面プランは円～楕円形を呈し、径50～125㎝、深さ25～50㎝を測る。柱穴覆土は暗褐色砂質土で、柱痕跡は認められない。計７つの柱穴の内、５つの底面に根石が認められ、いずれも扁平な角礫を用い、SP-026を除きレベルがほぼ揃っている。SP-026は攪乱坑に切られており、原位置を動いた可能性がある。なお、桁行柱列の西側に小振りの礫を据えた小ピット２つがあり、平面図に位置のみを示した。

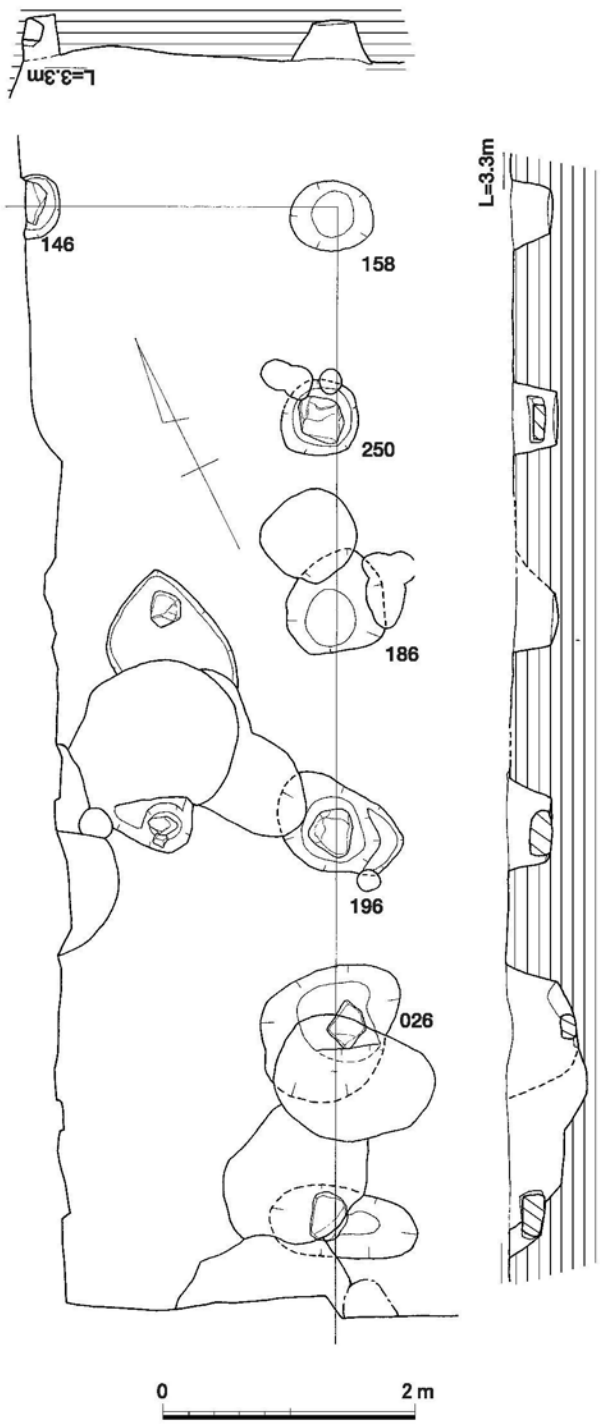


第２図　遺構の配置（1/80）

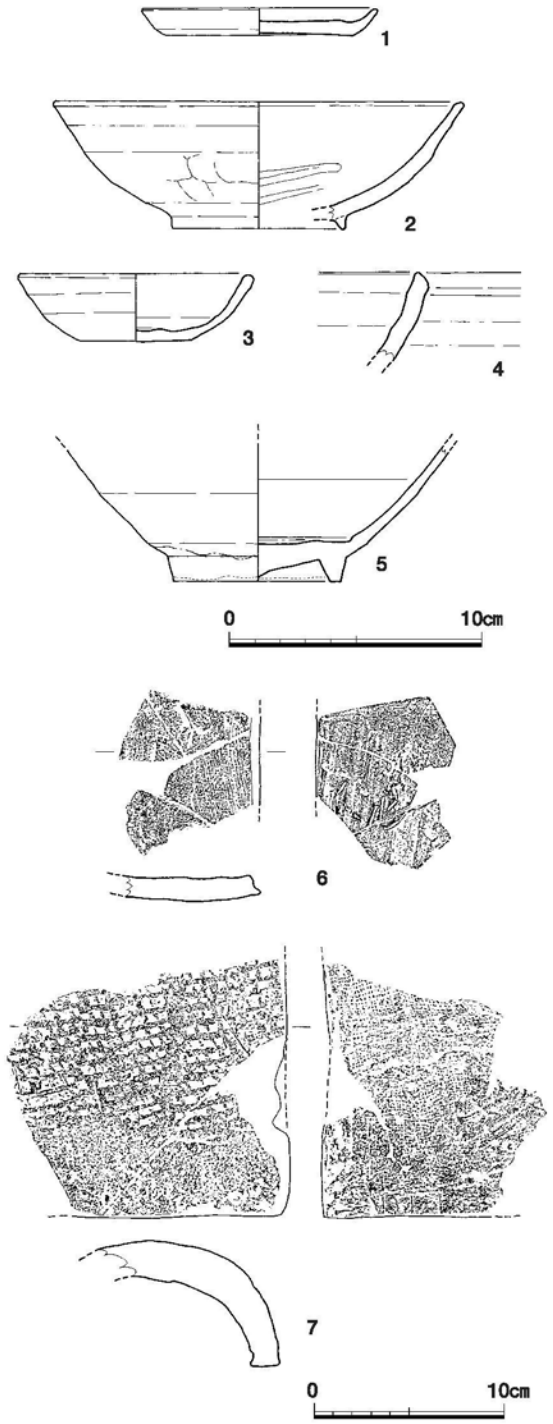
SB-050出土遺物　第４図　図版６

南東隅の柱穴を除き遺物が出土したが、大半が小片で図化できるものは少ない。土師器小皿・坏・丸底坏（ヘラ・糸切り）、瓦器、東播系須恵器、中国産陶磁器（福建産白磁、陶器）、瓦がある。

1 は土師器小皿で、底部は糸切りで板圧痕が残る。口径 9.2 ㎝、器高 1.1 ㎝。SP-026 出土。**2** は筑前型瓦器椀である。高台は低く小さい。内外面に幅広の雑なヘラミガキを施し、外面下半には指押え痕が残る。口径 16.0 ㎝、器高 5.0 ㎝。SP-158 出土。**3**・**4** は東播系須恵器である。3 は小皿で、底部糸切り。体部が若干内湾気味に開き、口縁はやや肥厚して端部は丸く納める。



第３図　SB-050 実測図（1/60）



第４図　SB-050 出土遺物実測図（1/3・1/4）

口径9.2㎝、器高2.6㎝。SP-250出土。4は小片だが椀と思われる。SP-146出土。

5は福建産白磁碗である。内底を輪状釉剝ぎし、輪剝ぎ部分と高台畳付には白泥が付着する。SP-146出土。

6・**7**は瓦である。6は平瓦で、凸面は縄目叩きと思われるが、ナデ消しており明瞭でない。また、刻字らしきものがあるが、判読不能である。凹面は布目である。7は丸瓦で、凸面は格子叩き、凹面は布目が付く。いずれもSP-146より出土した。

12世紀中頃～後半の建物であろう。

（2）井戸

中世の井戸は4基を検出した。他に近世まで使用された瓦井戸が1基あったが、調査対象としていない。

SE-010　第5図　図版2

調査区の北側に位置する。井戸SE-047を切る。掘り方の平面形は隅丸方形に近い円形で、長径3.8ｍ、短径3.4ｍ。深さ1.9ｍで小さな平坦面を作り、径1～1.2ｍ、深さ0.6ｍの円形坑を掘って井戸側を組んでいる。井戸側は桶で、径57㎝、高さ60㎝が残り、下端から15㎝の外側に責め具痕跡が認められた。桶は腐食が進んでおり取り上げることはできなかったが、SE-012と同様、杉とみられる。標高は、検出面で3.1ｍ、桶の上端で1.2ｍ、底面で0.6ｍを測る。遺構の土層断面は図に示す通りで、覆土は暗褐色砂を主体とし、地山土は標高1.3ｍあたりで細砂から粗砂に変化する。井戸掘り方や桶の残り具合からみて、湧水レベルはこの位置にあったと考えられるが、現在湧水はない。

SE-010出土遺物　第6図　図版6

須恵器、土師器小皿・坏・丸底坏・椀（ヘラ・糸切り）、瓦器、東播系須恵器、土師質土器鍋、中国産陶磁器（福建・広東産白磁、陶器）、瓦、石製品が出土した。

8は古代須恵器高台付き坏である。内面は使用により摩滅し、赤色と黄色の付着物があるが、故意に塗布したものかは不明である。

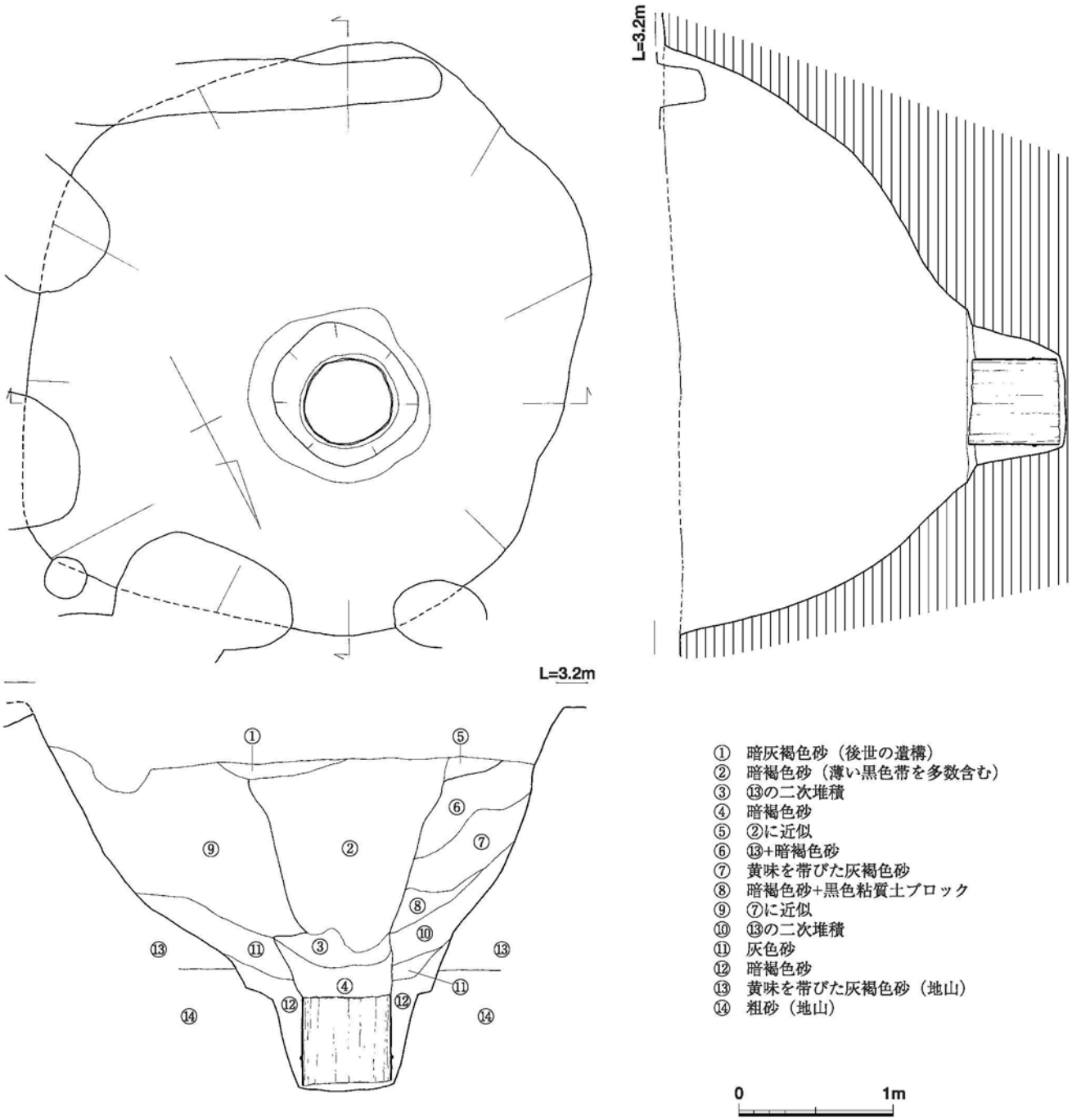
9～**23**は土師器である。9～18は小皿で、9・10は底部ヘラ切りと思われ、他は糸切り。法量は口径8.8～9.2㎝、器高1.0～1.2㎝に集中する。19は高台付き坏。底部ヘラ切りで、高台は高く撥状に開く。20・21は丸底坏で、底部ヘラ切りで内面にミガキを施す。21の内面に油煙が付着する。22・23は坏で、底部糸切りで板圧痕が残る。22は口径14.2㎝、器高3.0㎝。23は口径17.2㎝、器高3.0㎝を測るが小片のため法量は不正確である。**24**～**27**は筑前型瓦器椀である。高台は低く小さい。内外面に幅広の雑なヘラミガキを施し、外面下半には指押え痕が残る。

28～**36**は中国産白磁である。28～30は福建産玉縁口縁碗。31・32は浅形碗で、31は内面に櫛描文がある。33は広東産玉縁口縁碗。34は皿と思われ、内底を円形に釉剝ぎする。黄味がかった淡いオリーブ色の透明釉で、外面下半は露胎。35・36は福建産碗底部の周縁を円形に打ち欠き玩具に転用したものである。

37～**39**は瓦である。37は平瓦で凸面は大きな斜格子叩き。38・39は丸瓦で38は二重斜格子叩き、39は斜格子叩きを施す。

石製品には滑石片1点と、穿孔を施した小片1点があるが、石鍋かどうかは不明。

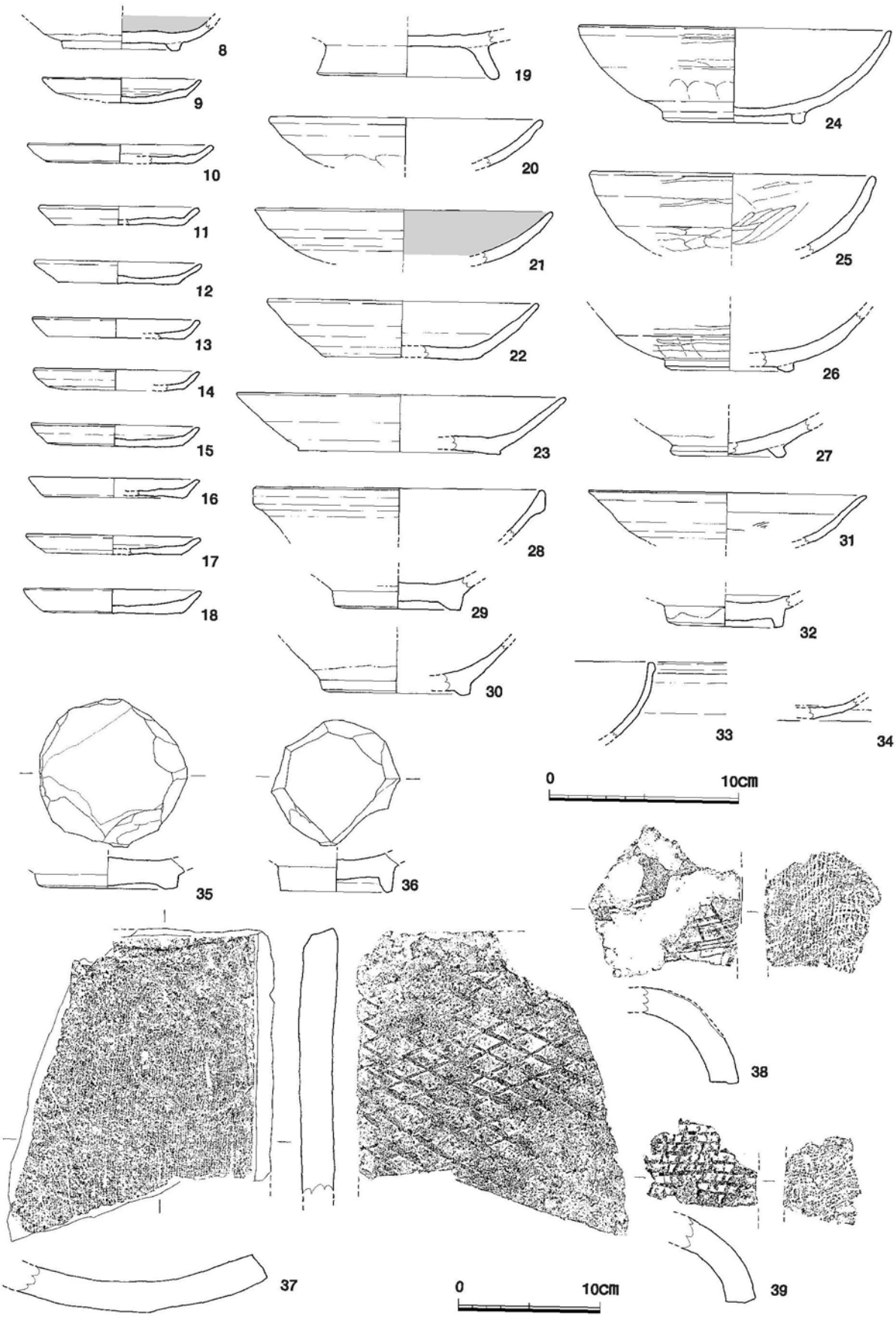
遺構の年代は12世紀前半～中頃と思われる。



第５図　SE-010 実測図（1/40）

SE-011　第７図　図版３

調査区北東隅に位置する。掘り方は１/４強を確認したに留まるが、井戸側は調査区内に納まる。攪乱坑や近世の溝に一部を切られる。掘り方は平面円形とみられ、径は不明だが４ｍを超えよう。深さ 2.0 ｍのレベルに平坦面を作り、径 0.8 ～ 0.95 ｍ、深さ 0.35 ｍの楕円形坑を掘って井戸側を組む。井戸側は桶で、径 67 ～ 72 ㎝と歪み、高さ 40 ㎝が残り、下端から 22 ㎝の外周に責め具痕跡が認められた。桶は腐食が進んでおり取り上げることはできなかったが、SE-012 と同様、杉とみられる。標高は検出面で 3.0 ｍ、桶の上端で 1.1 ｍ、底面で 0.7 ｍを測る。覆土は暗褐色砂を主体とし、地山土は平坦面のあたりで細砂から粗砂に変化する。SE-010 と同様、湧水レベルはこの位置にあったと考えられる。



第6図　SE-010出土遺物実測図（1/3・1/4）

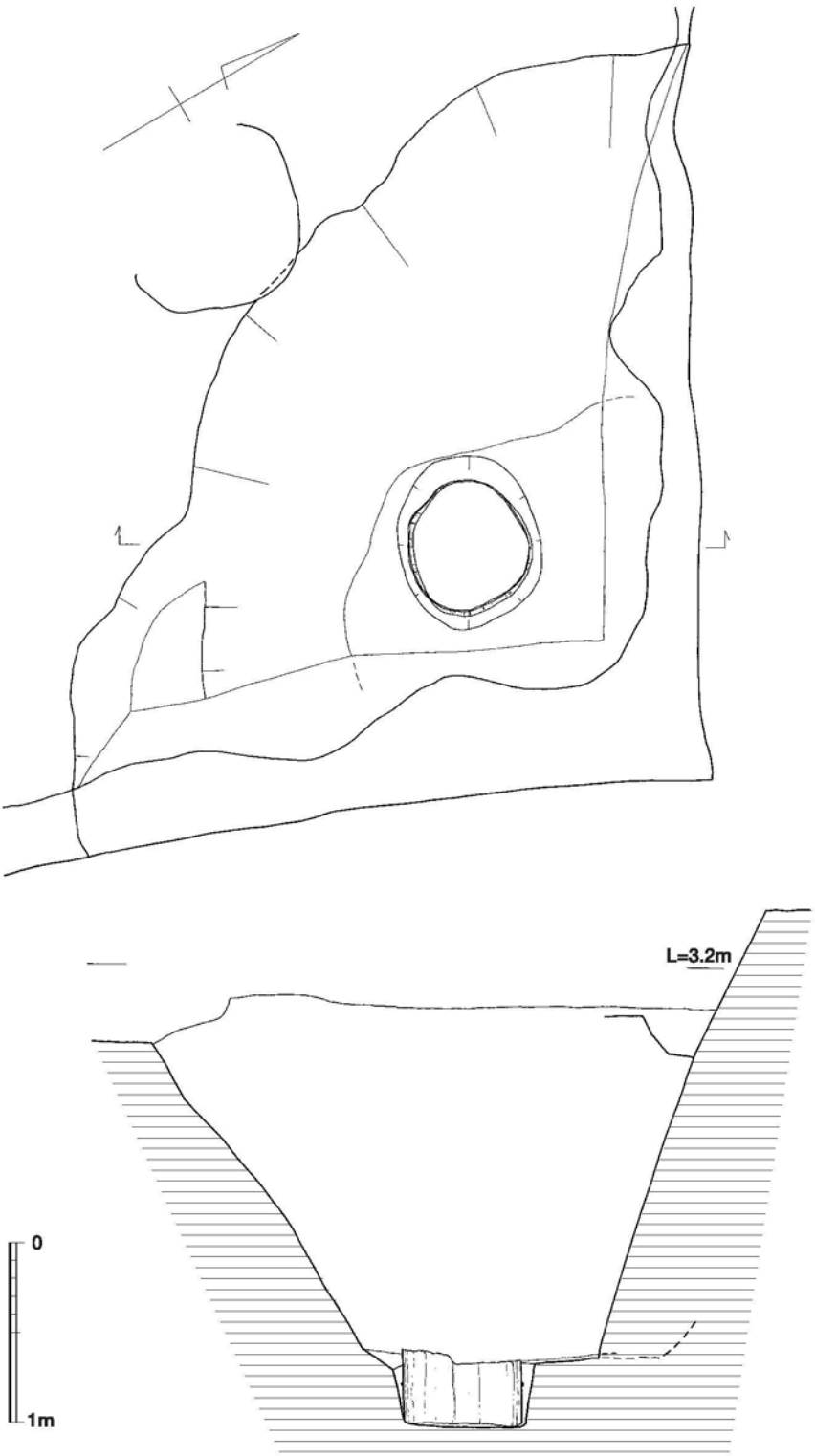
SE-011 出土遺物　第8図　図版6

須恵器、土師器小皿・坏（糸切り）、瓦器、東播系須恵器、瓦質土器すり鉢、土師質土器鍋、中国産陶磁器（福建産白磁、同安・竜泉窯系青磁、青白磁、陶器）、瓦、石製品、銅銭が出土した。他に明代青花・近世国産陶磁器が数点出土したが、攪乱坑や近世溝からの混入であろう。

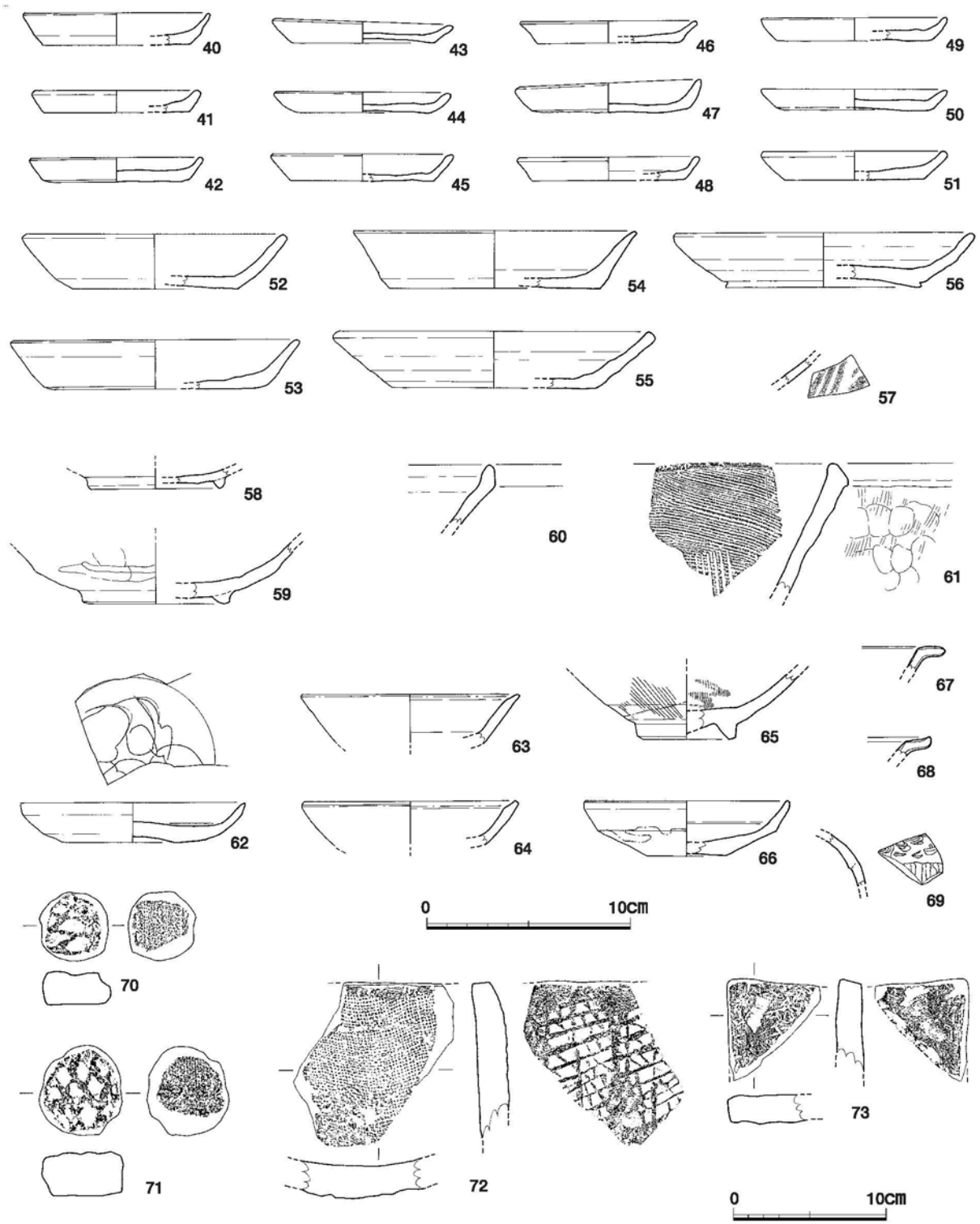
40～**57** は土師器である。外底に板圧痕の付くものが多い。40～51 は小皿で、未報告分を含めた法量は口径 8.0～9.8 cm、器高 0.8～1.4 cmで、特に口径 8.6～8.8 cm、器高 1.1 cmに集中する傾向がみられる。52～57 は坏で、法量は口径 12.8～15.6 cm、器高 2.4～2.8 cmの範囲にある。57 は外面に墨痕が残る。**58**・**59** は筑前型瓦器椀で、高台は低く小さい。**60** は東播系須恵器鉢で、口縁端部を上方へ引き上げる。**61** は瓦質土器すり鉢である。内外面に刷毛目調整を施すが、外面は雑で指押えの痕が顕著に残る。

62～**64** は福建産白磁である。62 は平底皿で、外底を釉剝ぎし、内底には劃花文を入れる。63・64 は口禿平底皿である。**65** は同安窯系青磁の碗、**66** は同じく皿である。**67**・**68** は南宋後期竜泉窯系青磁坏である。67 は釉層が厚く、外面に連弁文が入ると思われる。**69** は青白磁小壷で、外面に陽印刻文が施され、内面には胴継ぎの痕がある。内外面に施釉する。

70・**71** は瓦玉で、ともに周縁を打ち欠き整形し、71 は研磨を加えて円形に仕上げる。**72**・**73** は平瓦である。72 は大きめの格



第7図　SE-011 実測図（1/40）



第８図　SE-011 出土遺物実測図（1/3・1/4）

子叩き。73 は両面とも調整痕が残っておらず、表面に籾殻の痕が付く。石製品には砥石４、滑石製石鍋１があるが、いずれも小片である。銅銭は末尾に掲載した「嘉祐通寶」である。（第 23 図－261）

13 世紀中頃～後半に位置づけられよう。

SE-012　第9図　図版4

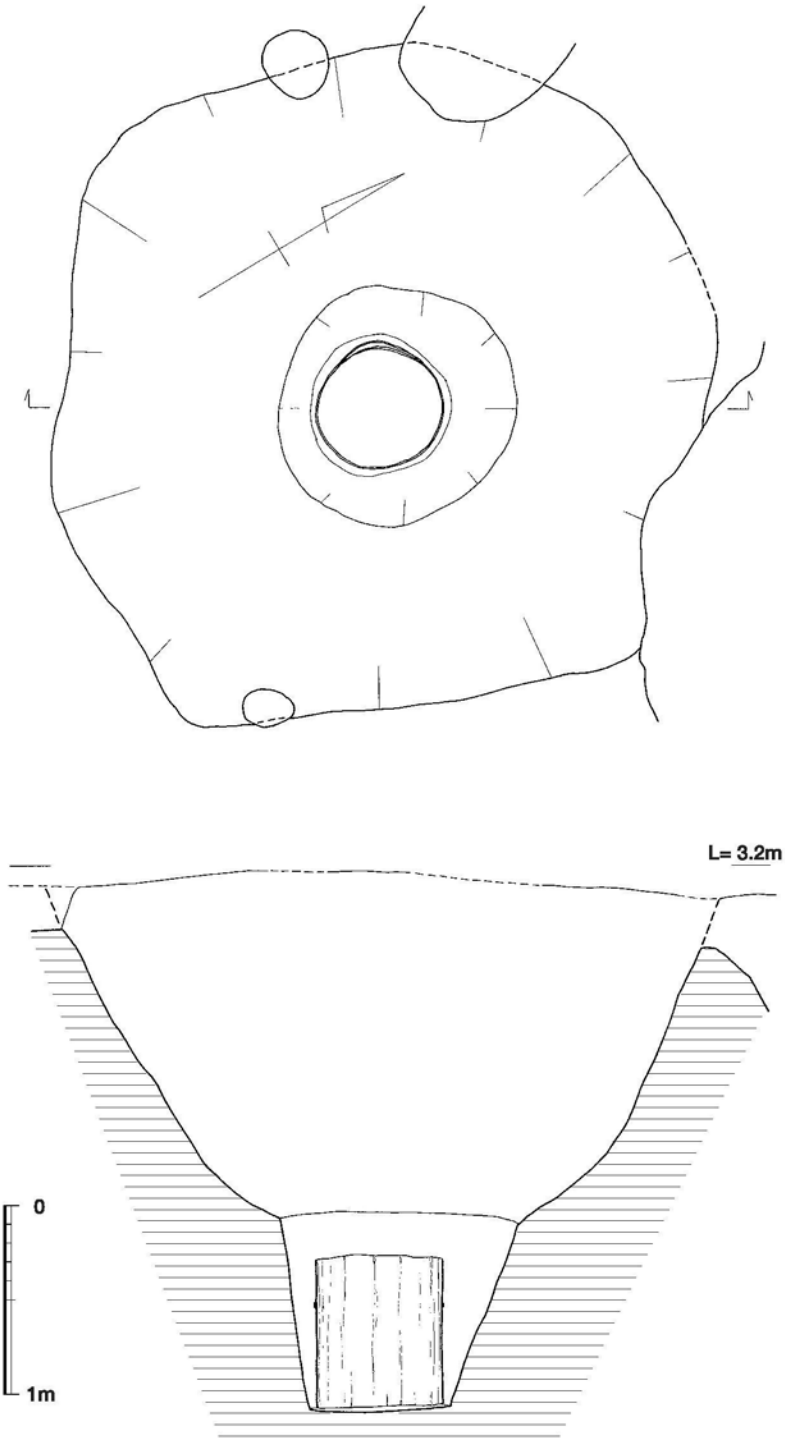
SE-011の南側に接するが、直接の切り合い関係はない。上部には近世溝や攪乱坑などが切り込むが、遺構の残りは良好である。掘り方の平面形はややいびつな円形で、長径3.5 m、短径3.4 m。深さ1.8 mで傾斜が緩くなり、径1.3 m、深さ1.0 mの円形坑を掘るが、SE-011のように明瞭な平坦面は造らない。井戸側は桶で、径62～66 cm、高さ80 cmが残り、下端から55 cmの外周に責め具痕跡が認められた。桶の上部は一部が二重となっており、重ねた桶の痕跡とみられる。下部をかろうじて取り上げることができたので、樹種同定を行い、杉と同定結果を得た（P97～98参照）。標高は検出面で3.1 m、桶の上端で1.1 m、底面で0.3 mを測り、今回検出した他の井戸よりもやや深い。遺構覆土は暗褐色砂を主体とし、地山土は標高1.3 mあたりで細砂から粗砂に変化する。他と同様、現在の湧水はない。

SE-012出土遺物　第10図　図版6

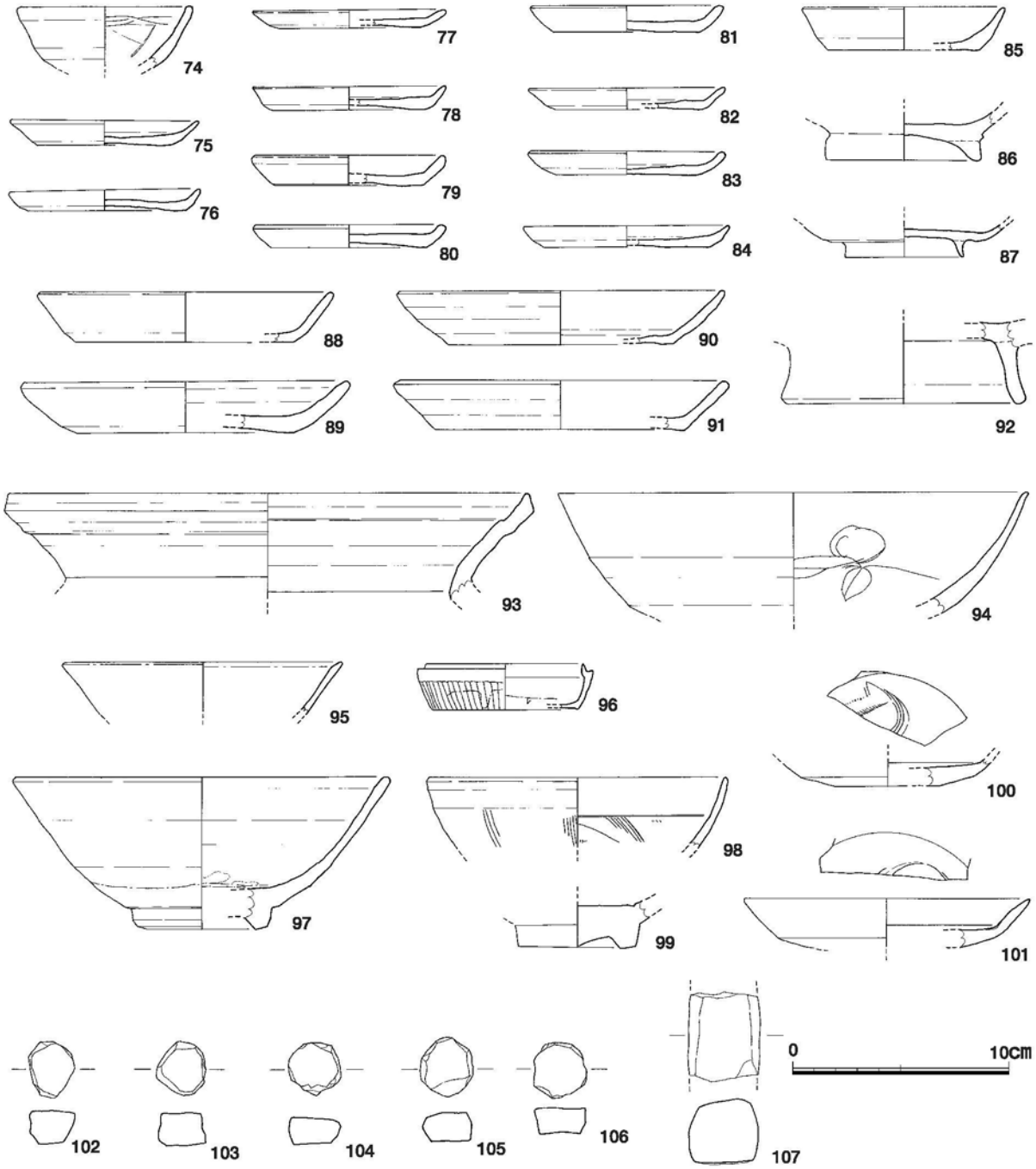
須恵器、土師器小皿・坏（糸切り）、瓦器、東播系須恵器、瓦質土器鍋、土師質土器鍋、中国産陶磁器（福建・広東産白磁、同安・竜泉窯系青磁、青白磁、陶器）、瓦、土製品、石製品が出土した。

74は土師器小椀で、内面をヘラナデする。口縁近くに線刻がある。**75**～**85**は土師器小皿で、大半のものは外底に板圧痕が残る。法量は未報告分も含めて口径7.6～9.8 cm、器高0.9～2.0 cmの範囲にあり、特に口径8.8～9.2 cm、器高1.0～1.2 cmに集中する。**86**・**87**は土師器高台付き小皿である。**88**～**91**は土師器坏で、口径13.6～15.4 cm、器高2.3～2.5 cm。**92**は土師器高台付き坏で、高台は細く高い。**93**は須恵質甕で、朝鮮半島陶質土器とみられる。

94は福建産白磁碗で、内面に劃花文を施す。**95**は福建産白磁口禿平底皿である。**96**は白磁合子身である。外面下半から底部と



第9図　SE-012実測図（1/40）



第10図　SE-012出土遺物実測図（1/3）

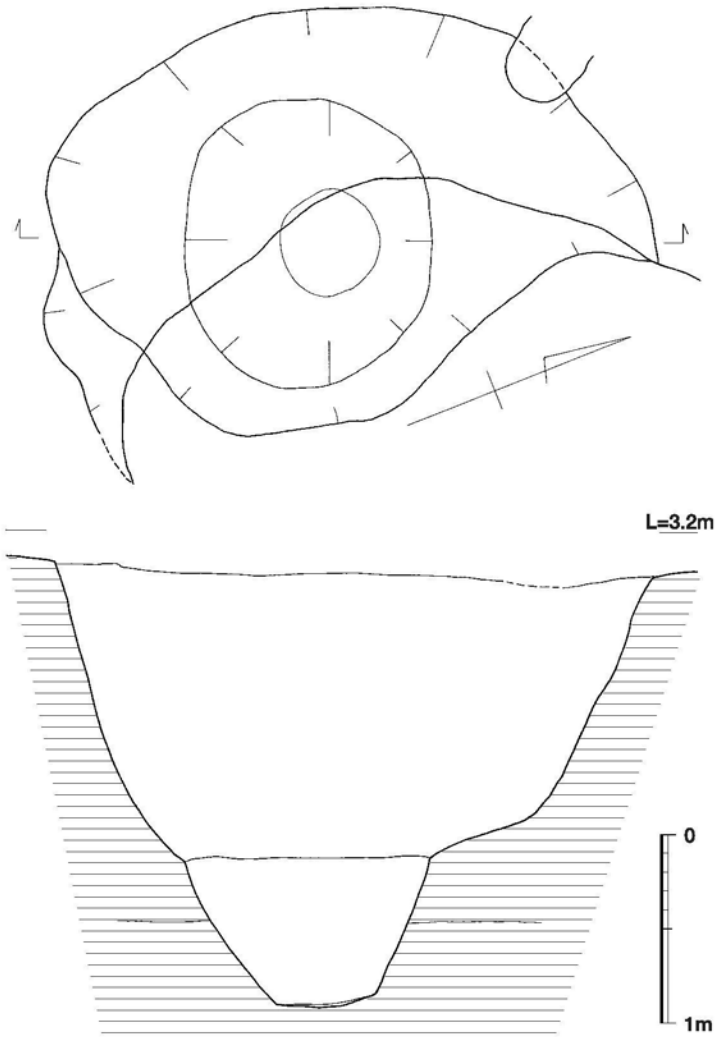
受け部から内面下半にかけて露胎。徳化窯か。**97**は青磁碗で、内底は輪状に釉剝ぎし、この部分と高台畳付には熔着防止の白泥が付着する。福建産の可能性が強い。SE-011とSP-127から同一個体と思われる破片が出土しており、図上で復元した。**98**～**100**は同安窯系青磁で、98・99は碗、100は皿である。**101**は竜泉窯系青磁皿である。

102～**106**は瓦玉で、縁を打ち欠いて円形に仕上げる。**107**は柱状の土製品で、粗砂粒を多く含み、一側面に付着物がある。鋳造に関わる遺物であろう。他に滑石製石鍋再利用品の小片が1点ある。

出土遺物はSE-011よりやや古い様相を呈しており、12世紀後半～13世紀前半の井戸か。

SE-047　第11図　図版5

SE-010の西側に重なり、これに大きく破壊されている。掘り方の大部分を失うが、平面形は円形か。現状で長径3.2 m、短径2.2 m以上。深さ1.5 mで傾斜が緩くなり、径1.3～1.5 m、深さ0.8 mの楕円形坑を掘る。井戸側の痕跡は全く認められず、おそらく素掘り井戸であろう。標高は検出面で3.0 m、楕円形坑の上端で1.5 m、底面で0.7 mを測り、深さはSE-010とほぼ等しい。遺構覆土は暗褐色砂を主体とし、地山土は標高1.2 m弱で細砂から粗砂に変化する。現在湧水はない。おそらく同じ場所で掘り直されて、素掘り井戸から桶側を持つ井戸SE-010へと移行したと考えられる。



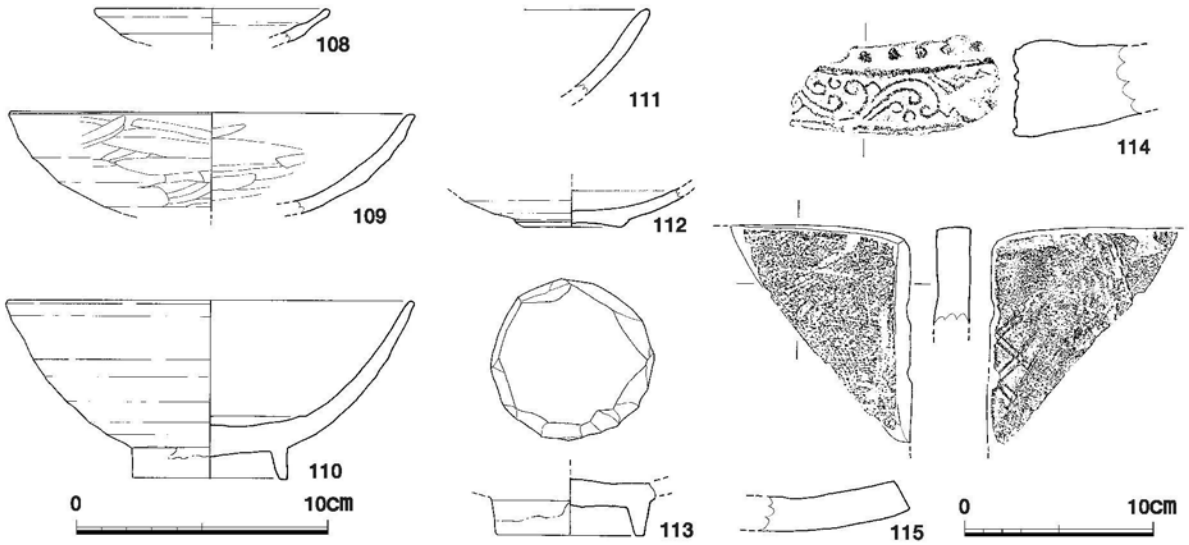
第11図　SE-047実測図（1/40）

SE-047出土遺物　第12図　図版6

須恵器、土師器小皿・坏・丸底坏（ヘラ・糸切り）、瓦器、中国陶磁器（福建・広東産白磁）、朝鮮半島陶質土器、瓦が出土した。

108は土師器小皿で、底部ヘラ切り。口径9.2 cm。**109**は筑前型瓦器椀で、内外面に幅広のヘラミガキを施す。

110・**111**は福建産白磁碗である。**112**は広東産白磁平底皿で、外底を釉剝ぎする。**113**は福建産白磁碗で、底部周縁を打ち欠いて円盤状に整形し、玩具に



第12図　SE-047出土遺物実測図（1/3・1/4）

転用したものであろう。

114 は軒平瓦である。内区に唐草文、外区上縁に小さな珠文を配する。調整痕はない。**115** は平瓦で、凸面に大きめの二重斜格子叩きを施す。凹面は布目。

出土遺物より、井戸は12世紀前半に埋没、あるいは埋め戻されたと考えられよう。

（3）土坑

土坑は15基を報告する。大半が中世で、近世のものが数基ある。他の土坑は近代以降に下る攪乱坑である。SK-015のみ1/20縮尺で図示したため冒頭に報告し、他は遺構番号順に述べる。

SK-015　第13図　図版5

調査区南東部に検出した。攪乱坑により南側から西側の一部を失うが、径1.5 m前後の円形プランをなすとみられる。横断面形は逆台形状をなし、深さ0.4 mである。覆土は黒褐色砂質土で、底面から10 cmほど浮いた位置から土器がまとまって出土しており、土師器小皿・坏を中心に南東側から投げ入れたものと考えられる。

SK-015 出土遺物　第14図　図版6

土師器小皿・坏（糸切り）、瓦器、中国産陶磁器（白磁、同安・竜泉窯系青磁、陶器）、瓦、青銅製品が出土した。この他、近世国産染付片2点が攪乱坑から混入して出土している。

116～**148** は土師器である。底部に板圧痕が残るものが多い。未報告分を含めた平均法量は、小皿が口径9.0 cm、器高1.1 cm、坏が口径13.7 cm器高2.5 cmである。

149・**150** は中国産陶器である。149は褐釉平底皿で、外底はヘラ切りで外面下半は露胎。150は無釉行平で、橙褐色のきめ細かな粘性の強い胎土である。長江下流域あたりの製品と思われる。

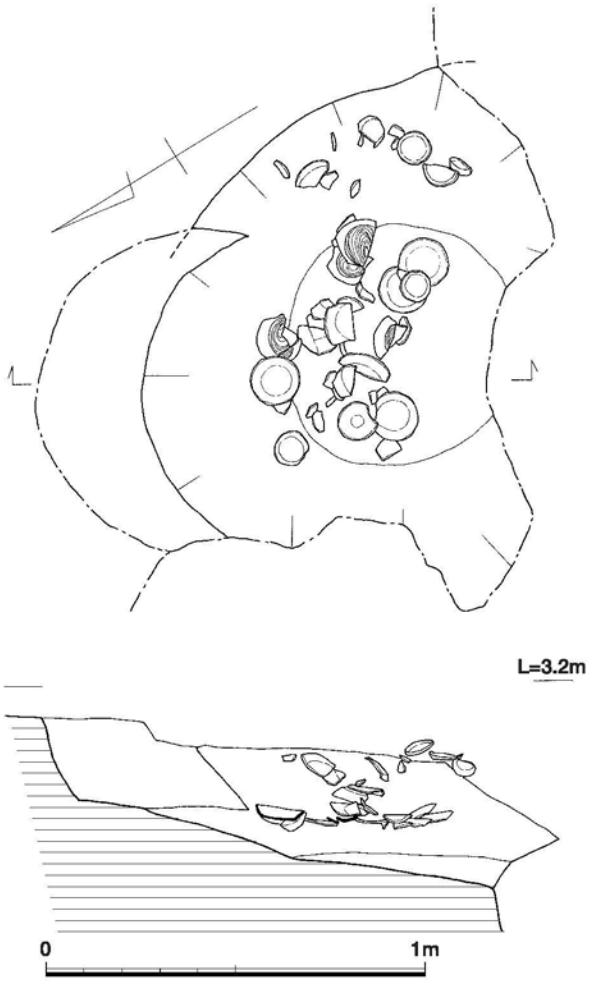
151 は押圧波状文軒平瓦の瓦当部小片である。

この他、青銅製の繭型分銅（第23図－260）が出土しているが、隣りの攪乱坑から混入した可能性がある。

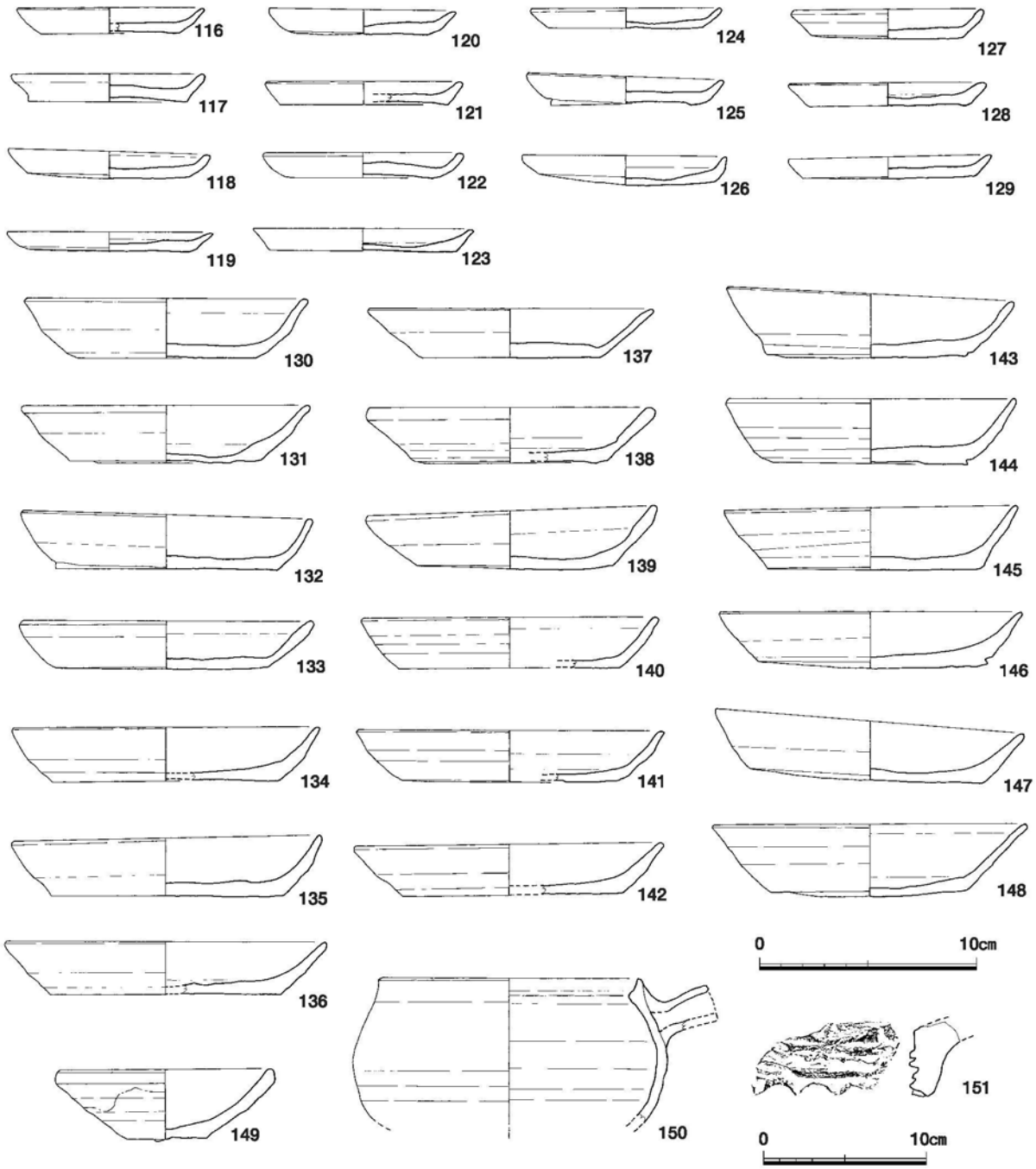
以上遺物の他、竜泉窯系青磁鎬連弁文碗の小片も出土しており、13世紀初頭～前半頃に一括廃棄された遺物と考えられる。

SK-006　第15図　図版5

調査区北半の中央部にあり、SE-010・012を切っている。平面プランは南北に長い楕円形で、長径1.0 m、短径0.75 m、断面形は逆台形状を呈し、検出面からの深さ0.4 mを測る。覆土は暗褐色砂質土である。



第13図　SK-015遺物出土状況実測図（1/20）



第14図　SK-015出土遺物実測図（1/3・1/4）

SK-006出土遺物　第16図　図版6

黒色土器、土師器小皿・坏（ヘラ・糸切り）、瓦器、東播系須恵器、土師質土器鍋、中国産陶磁器（白磁、同安・竜泉窯系青磁、陶器）、瓦が出土した。

152～157は土師器で、全て糸切り底で板圧痕が残る。152～154は小皿で、法量は順に口径7.8cm・器高1.1cm、口径9.2cm・器高0.9cm、口径9.2cm・器高1.0cmである。155～157は坏で、法量は順に口径15.0cm・器高3.1cm、口径15.6cm・器高2.8cm、口径16.0cm・器高2.6cmを測る。

SE-010・012を切っていることから、12世紀後半～13世紀前半頃の土坑とみられる。

SK-007　第15図

調査区北端近くに位置し、SE-010を切っている。楕円形プランで、長径1.0 m、短径0.9 m、横断面形は逆台形で、深さ0.2 mである。覆土は暗褐色砂質土である。

出土遺物には、黒色土器、土師器小皿・坏（ヘラ・糸切り）、土師質土器、福建産白磁、近世国産陶磁、瓦があるが、いずれも小片のため図化できるものはない。近世国産陶磁は混入遺物と考えられ、中世遺構とみられるが、出土遺物が少なく詳細時期は不明である。

SK-009　第15図

調査区中央のやや北よりに検出した。ピットに切られるが、平面プランは隅丸三角形状をなし、径1.2～1.3 mで、断面は逆台形状をなし、深さ0.4 mである。

SK-009出土遺物　第16図

須恵器、土師器小皿・坏（糸切り）、瓦器、土師質土器鍋、中国産陶磁器（福建・広東産白磁、竜泉窯系青磁）、瓦が出土した。他に近世国産陶磁片が1点混入している。

158は土師器小皿で、口径8.4 cm、器高1.0 cm。**159**は土師器坏で、口径12.0 cm、器高2.4 cm。内底に油煙が付着する。

160は南宋後期の竜泉窯系青磁坏である。全釉で高台畳付を釉剝ぎする。

以上遺物の他、図化していないが口禿白磁片が出土しており、13世紀後半頃の土坑であろうか。

SK-016　第15図

SK-009の東側に1 mの間を置いて位置する。井戸SE-012を切り、攪乱坑に破壊される。不整な隅丸方形をなし、長径1.7 m前後、短径不明。逆台形状に落ち込んでおり、深さ0.3 m。

SK-016出土遺物　第16図

土師器小皿・坏（糸切り）、黒色土器、瓦器、瓦質土器、中国産陶磁器（福建産白磁、青白磁）、朝鮮半島陶質土器、瓦が出土した。

161は土師器小皿で、底部には板状痕が残る。口径9.8 cm、器高1.0 cm。

162は青白磁合子蓋である。内面は露胎である。

163は瓦質土器深鉢で、外面ミガキ、内面は刷毛目調整を施す。

中世の遺構であるが、出土遺物が少ないため詳細な時期は不明である。

SK-020　第15図

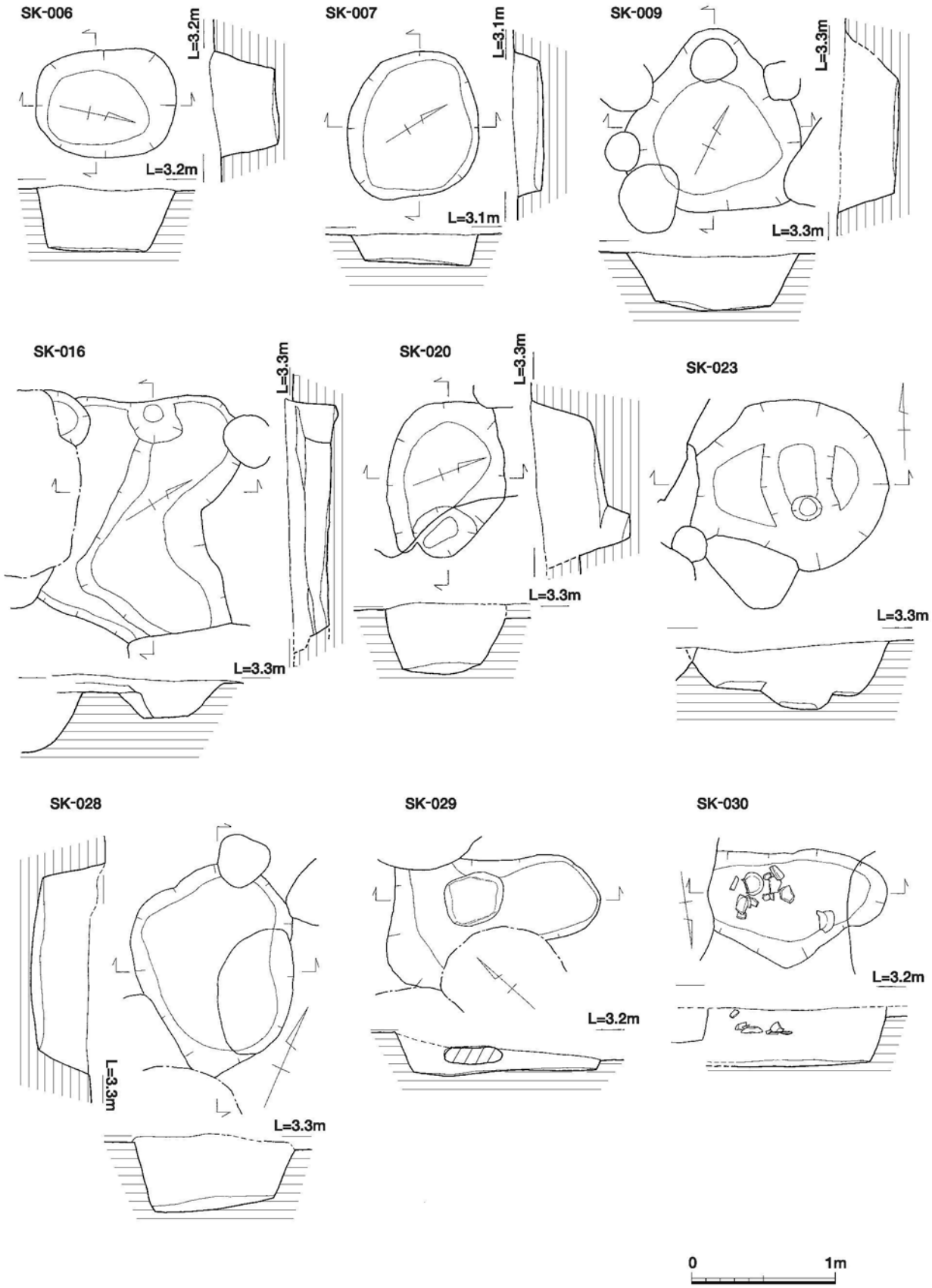
SK-016の南側1.5 mに位置する。近世の攪乱坑により破壊されている。楕円形プランで、長径1.0 m以上、短径0.8 m。断面逆台形で、深さ0.5 m。底面の東端に深さ0.2 mのピットが切り込む。

SK-020出土遺物　第16図

土師器小皿・坏（糸切り）、瓦器、中国産陶器、瓦が出土した。

図示した土器は全て土師器で、底部には板圧痕が残る。**164**～**167**は小皿で、未報告分を含めた法量は口径8.4～9.4 cm、器高0.9～1.4 cmの間にある。**168**～**170**は坏で、法量は順に口径15.2 cm・器高3.0 cm、口径14.4 cm・器高3.0 cm、口径14.0 cm・器高2.5 cmである。**171**は高台付き坏である。かなり大形品で、高台は高く撥形に開く。

中世の遺構であるが、出土遺物少ないため詳細な時期は不明である。



第15図　SK-006・007・009・016・020・023・028・029・030実測図（1/40）

SK-023　第15図　図版5

調査区西辺のやや南寄りに位置する。周囲の遺構を切っている。西端を他の遺構に切られるが、東西にやや長い楕円形プランで、長径1.5 m以上、短径1.2 m。断面逆台形で、深さ0.5 m。底面の南寄りにピットがあり、深さ0.4 m。

SK-023出土遺物　第16図

土師器小皿・坏（糸切り）、瓦器、土師質土器鍋、瓦質土器、中国産陶磁（福建産白磁、竜泉窯系青磁、朝鮮半島陶質土器）が出土した。

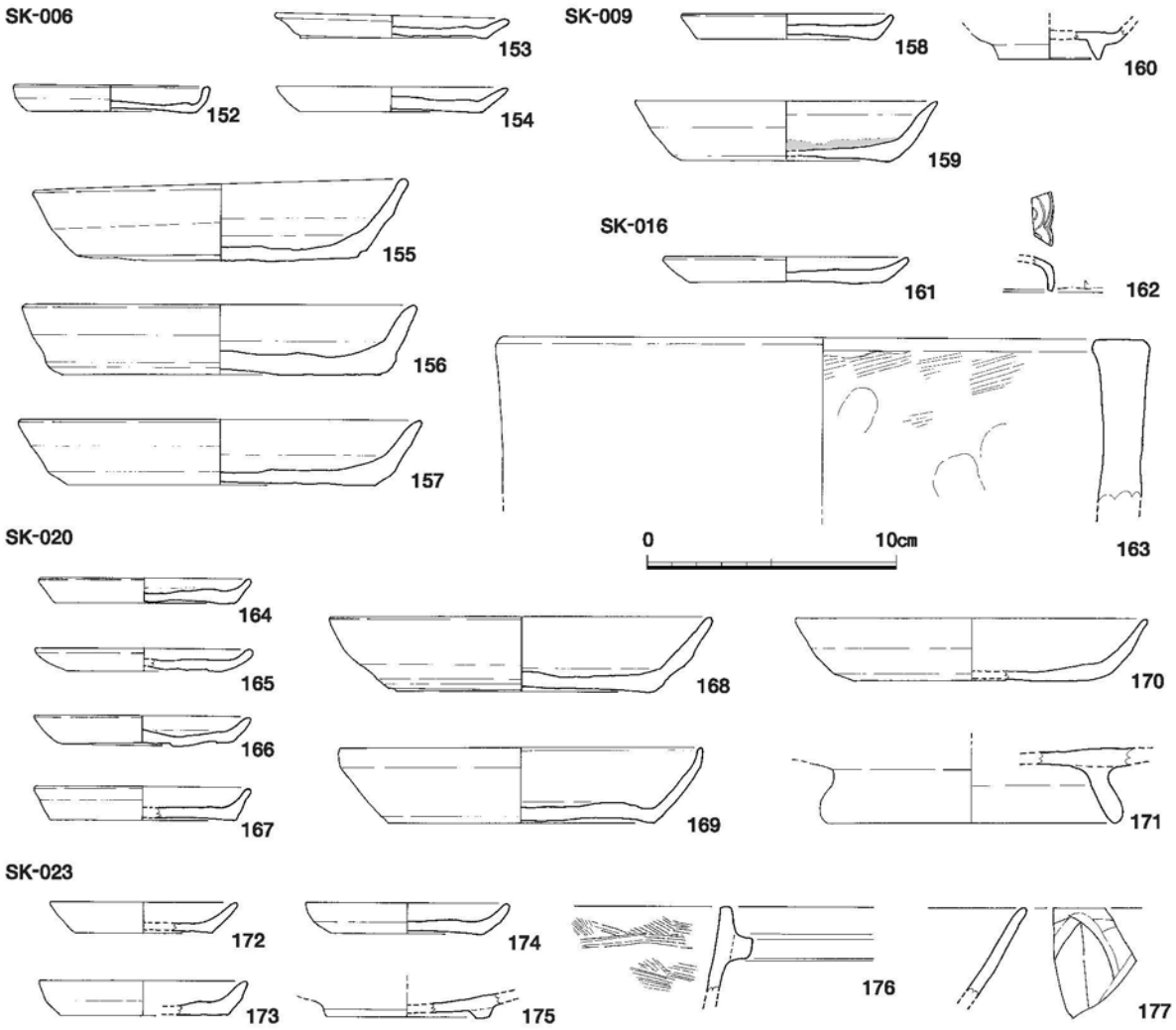
172～**174**は土師器小皿である。法量は順に口径7.4 cm・器高1.2 cm、口径8.2 cm・器高1.4 cm、口径8.0 cm・器高1.2 cm。**175**は瓦器椀である。高台は低く、内面にミガキを施す。**176**は瓦質土器羽釜である。外面口縁下に鍔が巡り、内面は刷毛目調整を加える。

177は竜泉窯系青磁鎬連弁文碗である。

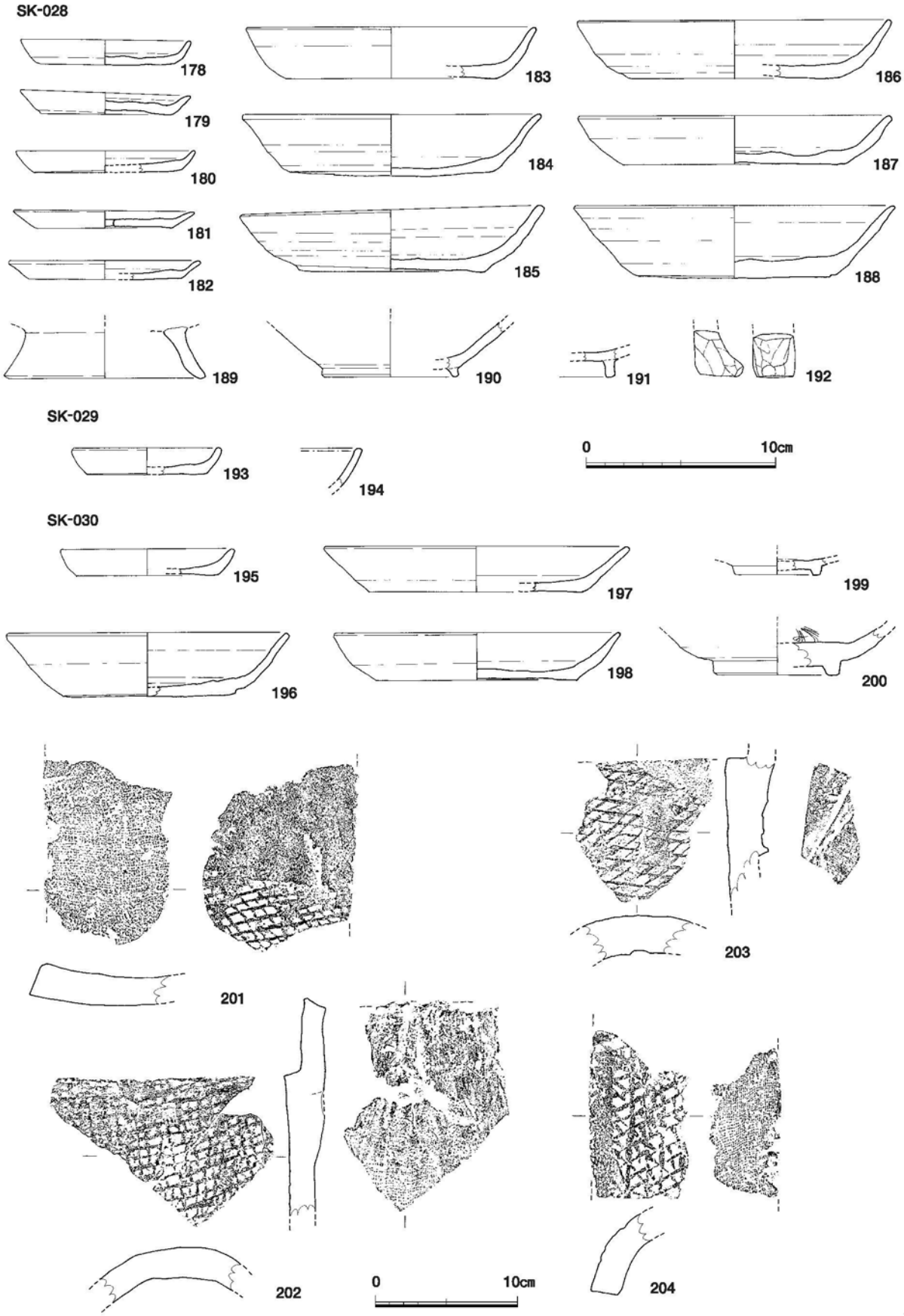
出土遺物が少なく、不明確ながら13世紀後半頃の遺構か。

SK-028　第15図

調査区南半の中央付近に検出した。一部を別の土坑に切られるが、南北に長い楕円形プランで長径1.5 m、短径1.1 m。断面逆台形で、深さ0.5 m。



第16図　SK-006・009・016・020・023出土遺物実測図（1/3）



第17図　SK-028・029・030出土遺物実測図（1/3・1/4）

SK-028 出土遺物　第17図　図版6

須恵器、土師器小皿・坏（糸切り）、瓦器、土師質土器鍋、中国産陶磁（福建産白磁、越州窯・同安窯系青磁、陶器）、瓦が出土した。この他、近世国産染付片が一点出土したが混入遺物であろう。

178～**182** は土師器小皿である。未報告分を含めた法量は、口径8.2～10.0㎝、器高0.9～1.4㎝である。**183**～**188** は土師器坏である。未報告分を含めた法量は、口径15.0～16.8㎝、器高2.6～3.8㎝と大形のものが目立つ。**189** は高台付き坏である。高台は細く高く、撥形に開く。**190**・**191** は瓦器椀である。**192** は容器の脚と思われ、獣足をかたどる。

出土遺物より12世紀後半～13世紀前半の遺構と思われる。

SK-029　第15図

調査区南東部に位置する。攪乱坑とSK-036に切られている。不整な隅丸長方形プランで、長径1.5m、短径0.6m。断面逆台形で、深さ0.3m。底面からやや浮いて扁平な礫が据えてあり、SB-050とは別の掘立柱建物の柱穴の可能性もあるが、対応する柱穴は確認できない。

SK-029 出土遺物　第17図

土師器小皿・坏（糸切り）、土師質土器鍋、中国産陶磁（福建産白磁、越州窯・竜泉窯系青磁、明代青花、陶器）が出土した。

193 は土師器小皿で、口径7.8㎝、器高1.4㎝。**194** は福建産白磁口禿平底皿である。

中世遺構であるが、出土遺物が少なく詳細時期は不明である。

SK-030　第15図　図版5

調査区東辺の中央部にあり、近世溝SD-001に切られる。東西に長い楕円形プランで、やや不整。長径1.2m以上、短径0.8m。断面は逆台形状を呈し、深さ0.4m。底面からかなり浮いた位置から遺物がまとまって出土した。

SK-030 出土遺物　第17図　図版6

土師器小皿・坏（糸切り）、瓦器、土師質土器鍋、東播系須恵器、中国産陶磁（福建産白磁、竜泉系窯青磁、陶器）、瓦、石製品が出土した。

195 は土師器小皿で、口径9.0㎝、器高1.4㎝。**196**～**198** は土師器坏で、法量は順に口径14.8・器高3.4㎝、口径16.0・器高2.4㎝、口径15.0・器高2.5㎝を測る。

199 は福建産白磁浅形碗である。内底の釉を輪剝ぎする。**200** は竜泉窯系青磁劃花文碗である。

201 は平瓦の小片で、凸面の叩きは斜格子。**202**・**203** は丸瓦の玉縁部分で、凸面は格子叩き。**204** は丸瓦片で凸面の叩きは斜格子。

石製品には砥石片1点、滑石製石鍋片1点があるが、いずれも小片のため図化していない。

出土遺物より、遺構の時期は12世紀中～後半と思われる。

SK-032　第18図

調査区南西隅に検出した。調査区南壁にかかっており、かつ近代の攪乱坑に切られるため、平面プランは不明。現況で長径1.4m、断面逆台形で、深さ0.8m。

SK-032 出土遺物　第19図

土師器小皿・坏（糸切り）、瓦器、土師質土器鍋、瓦質土器鉢、中国産陶磁器（福建・広東産白磁、竜泉窯系青磁、陶器）、瓦、石製品が出土した。

205 は筑前型瓦器椀である。内面に粗いミガキを施す。**206** は土鍋である。口縁は短く外に折れ、外面には煤が付着する。石製品には砥石片２点があるが、小片のため図化していない。

出土遺物が少ないが、竜泉窯青磁鎬連弁文片が出土しており、13 世紀初頭頃の遺構か。

SK-033　第 18 図

調査区南西部に検出した。楕円形プランとみられるがピットとの切り合いがあり、やや不整。長径 1.55 m、短径 1.0 m。断面逆台形で、深さ 0.4 m。

SK-033 出土遺物　第 19 図

土師器小皿・坏（糸切り）、土師質土器鍋、中国産陶磁器（竜泉窯系青磁）、瓦が出土した。

207 ・ 208 はともに土師器小皿で、207 は口径 7.4 ㎝、器高 1.2 ㎝、208 は口径 8.4 ㎝、器高 1.2 ㎝。

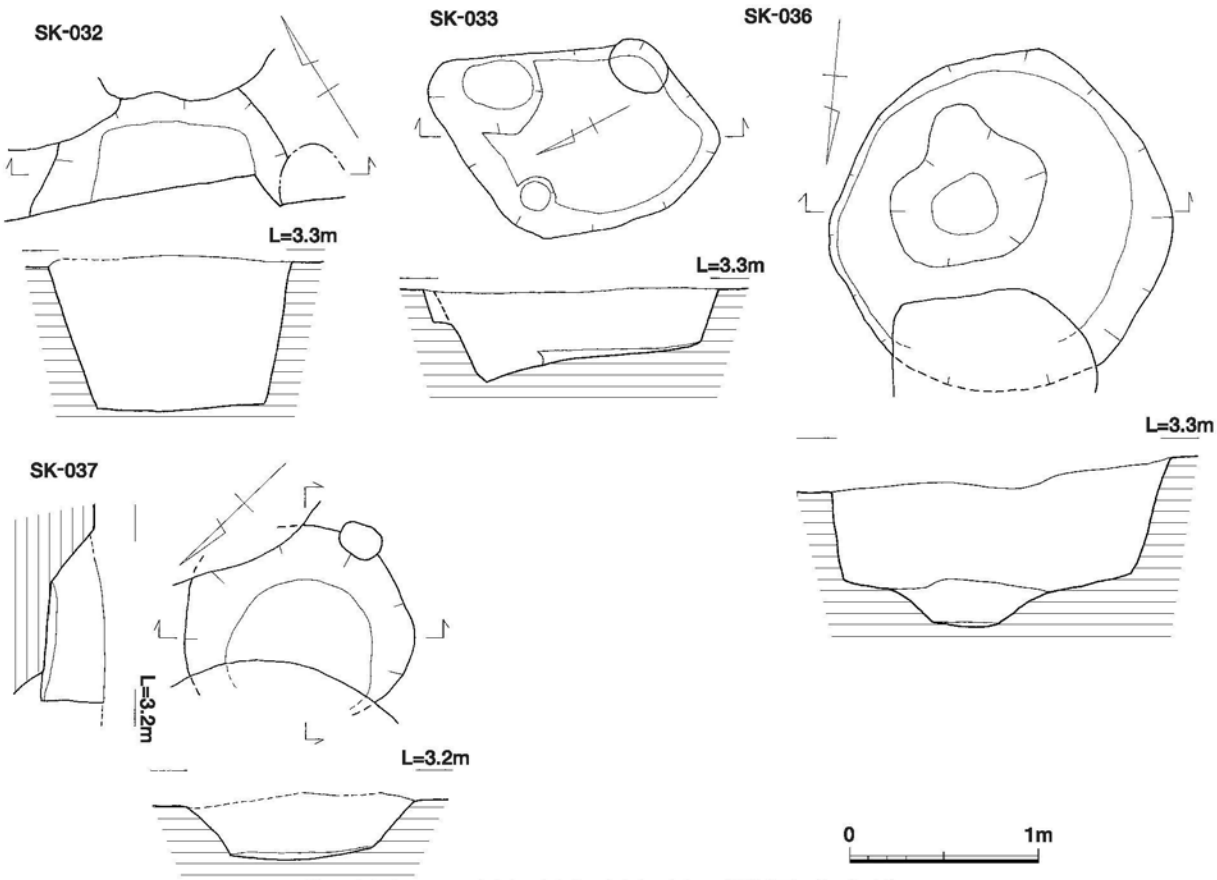
中世の遺構であるが、出土遺物が少なく詳細時期は不明である。

SK-036　第 18 図

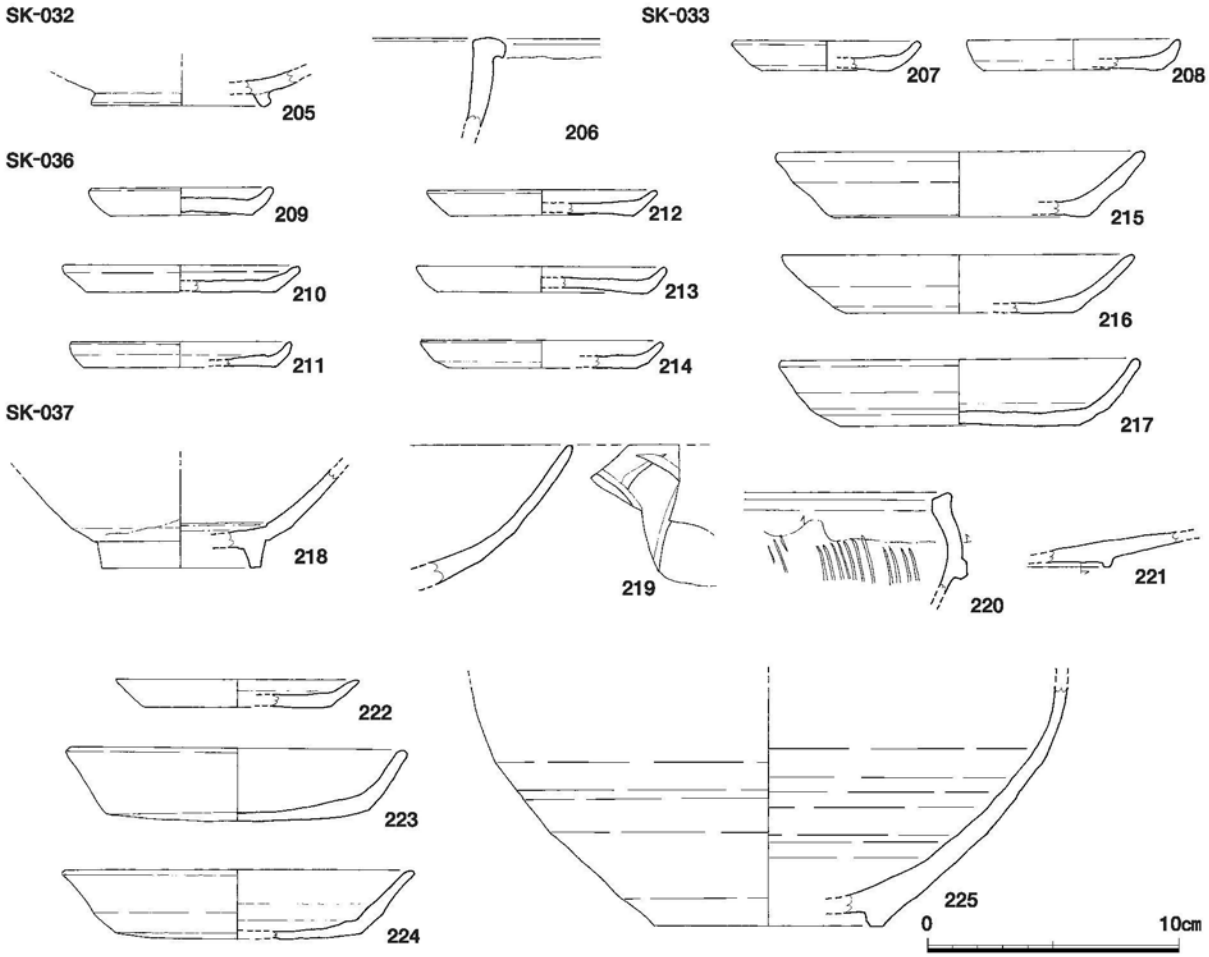
調査区南東部に検出した。近世の瓦井戸に北側を切られる。平面プランはほぼ円形で、径 1.8 m を測る。断面形は逆台形をなし、深さ 0.75 m である。底面の中央が浅く窪んでおり、最深部までは 0.9 m となる。

SK-036 出土遺物　第 19 図

黒色土器、須恵器、土師器小皿・坏（糸切り）、瓦器、土師質土器、瓦質土器、中国産陶磁器（福建産白磁、竜泉窯・同安窯系青磁、陶器）、高麗・朝鮮王朝陶磁、国産陶磁器（備前焼、近世）、瓦、



第 18 図　SK-032・033・036・037 実測図（1/40）



第19図　SK-032・033・036・037出土遺物実測図（1/3）

石製品が出土した。

209～**214**は土師器小皿である。未報告分を含めた法量は、口径7.2～9.8㎝、器高0.9～1.5㎝である。**215**～**217**は土師器坏である。法量は順に口径14.4・器高2.6㎝、口径14.0・器高2.3㎝、口径14.2・器高2.7㎝を測る。

218は福建産白磁碗である。内底の釉を輪剝ぎする。**219**は竜泉窯系青磁鎬連弁文碗である。**220**は中国産陶器すり鉢である。口縁内外のみ褐釉がかかる。**221**は白磁皿である。外底途中まで施釉する。肥前か或いは朝鮮製と思われる。

石製品には砥石片2点があり、うち1点を第23図－264に図化した。

出土遺物には近世のものが少量含まれているが、近世の瓦井戸に破壊されていることからこれらを混入遺物とみれば、13世紀頃の遺構と考えてよいであろう。

SK-037　第18図

SK-036の南東に重複し、これに切られる。平面プランは円形か。径1.2ｍを測る。断面逆台形で、深さは0.3ｍ。

SK-037出土遺物　第19図　図版6

土師器小皿・坏（糸切り）、土師質土器鍋、中国産陶磁器（白磁、竜泉窯系青磁、陶器）、朝鮮半島陶質土器が出土した。

222 は土師器小皿で、口径 9.6 cm、器高 1.1 cm。**223** ・ **224** は土師器坏で、法量は順に口径 13.4 cm・器高 2.9 cm、口径 13.8 cm・器高 2.7 cmを測る。**225** は浙江省産陶器鉢である。内外に施釉するが、発色が悪くかなり白っぽい。

出土遺物が少なく不明確であるが、遺構の時期は 13 世紀初頭頃か。

（4）その他の遺構

SK-004 ・ 021　第 21 図

調査区中央に検出した、東西方向に細長く伸びる 2 条の溝状の土坑である。ほぼ平行しているが、やや東に向かってハ字形に開く。北側のSK-004 は長さ 2.5 m、幅 0.4 m弱、深さ 0.3 mで、底面の東西両端に浅いピットがある。南側のSK-021 は東西両端を別の遺構に切られており、長さ不明。幅 0.3 m、深さ 0.15 で、底面にピットは認められない。調査時には建物基礎かと考えたが、確証はない。

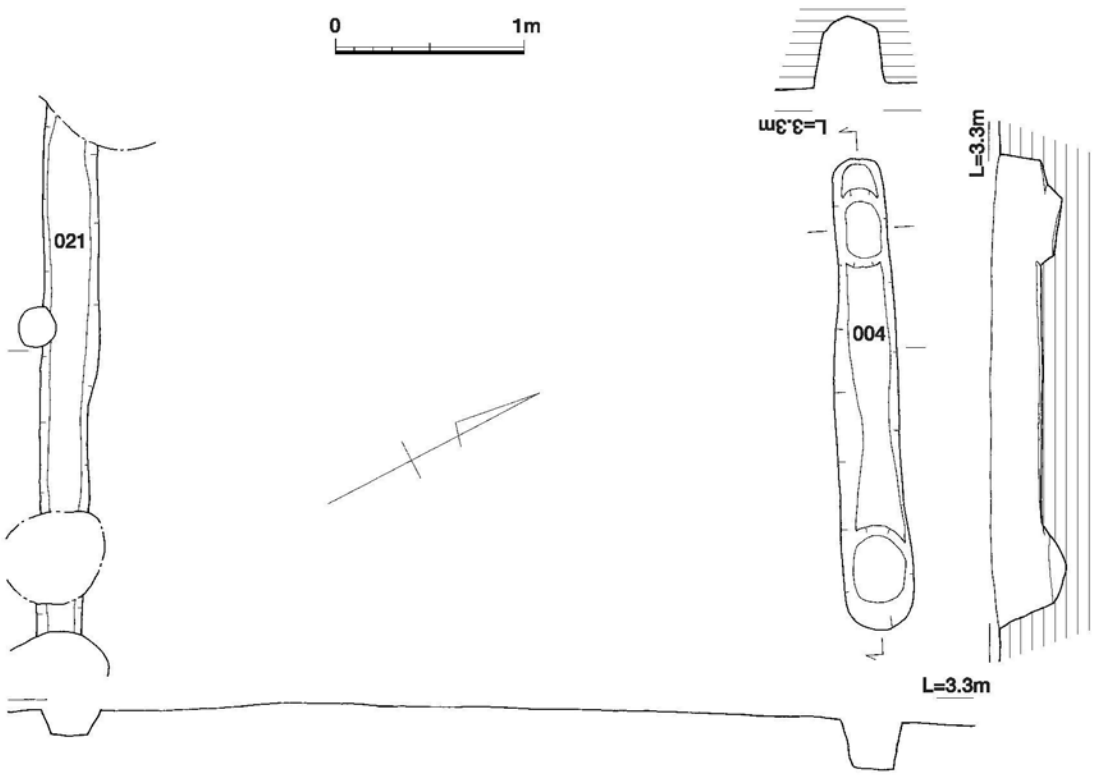
SK-004 ・ 021 出土遺物　第 20 図

土師器小皿・坏（糸切り）、土師質土器、中国産陶器、瓦が出土した。

226 は土師器小皿である。小片のため不正確ながら、口径 9.0 cm、器高 1.4 cm。

中世の遺構であるが、出土遺物が少なく詳細な時期は不明である。

第 20 図　SX-004 出土遺物実測図（1/3）



第 21 図　SX-004・021 実測図（1/40）

（5）その他の出土土器　第22図　図版6

報告から漏れた遺構やピット、近世・近代の遺構から出土した中世の土器・土製品のうち、図化可能なものをまとめた。

227～**235**は土師器小皿、**236**～**242**は土師器坏で、底部は全て糸切りである。236・240は内面に油煙が付着しており、灯明皿に使用されたとみられる。242は内外面に丁寧なミガキを施し、内面にはコテあての痕が残る。

243・**244**は筑前型瓦器椀である。243は内外面のミガキが雑でミガキを施さない空間が多く、外面下半には指押えの痕が顕著である。内面は使用により表面が斑状に剝落している。

245は東播系須恵器小皿で、底部糸切りである。器形はSB-050出土品（第4図－3）に酷似する。口径9.2㎝、器高2.4㎝、底径4.8㎝。**246**・**247**は東播系須恵器鉢である。246は口縁が体部からそのまま延び、端部は平坦である。247は口縁が断面三角形に肥厚し、端部が上に引き上げられる。

248は福建産白磁碗である。**249**は広東産白磁鉢であろう。体部下半から外底部にかけては露胎で、底部脇に小さな珠文状の粘土塊を貼付する。**250**は福建産白磁平底皿で、内底に劃花文を入れ、外底は釉剝ぎする。**251**は同安窯系青磁碗である。**252**は竜泉窯系青磁鎬連弁文碗である。**253**は浙江産陶器短頸壺である。黄味の強いオリーブ色釉が外面から内面途中までかかる。**254**～**256**は磁竈窯陶器である。254は無釉で小口瓶と思われる。255は蓋で、剝落しているが内外に施釉されていたものと考えられる。256は黄釉盤で、口縁内面に目痕が付く。

257・**258**は瓦玉である。257は側面を打ち欠き、258は更に全体を磨って円形に仕上げる。**259**は平瓦である。端部に段差の低い玉縁がある。凸面は縄目叩きを施した後、横方向のナデを加える。

（6）金属製品・石製品　第23図　図版6

各遺構から出土した銅製品、銅銭、石製品をまとめて報告する。

260は繭型分銅である。不純物が付着しているが、重さは11グラムを量る。

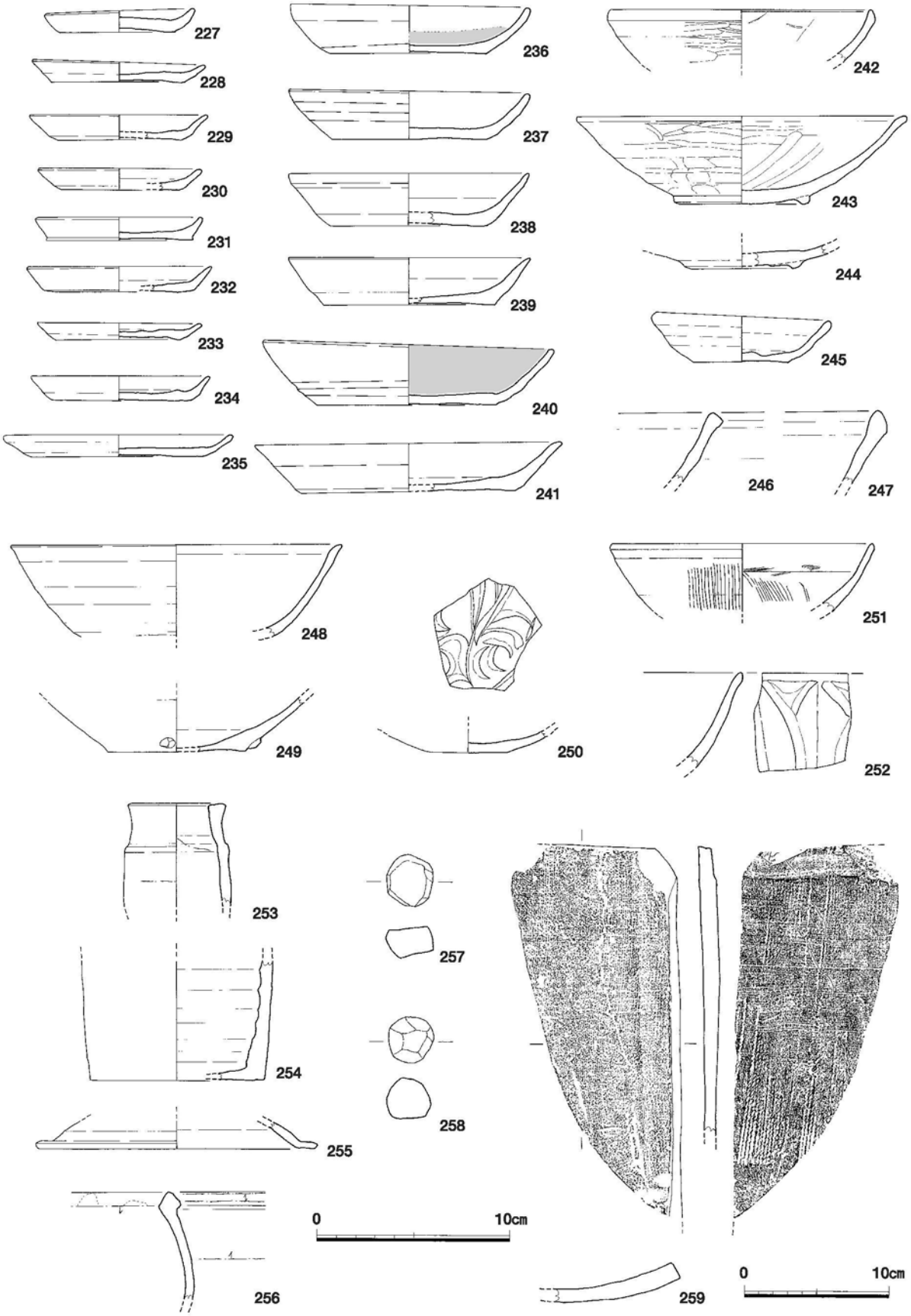
261～**263**は銅銭である。261は「嘉祐通寶」（初鋳1056年）、262は「永楽通寶」、263は判読し難いが「熙寧元寶」（初鋳1068年）か。

264は砥石である。四側面を使用しており、上端は欠落している。

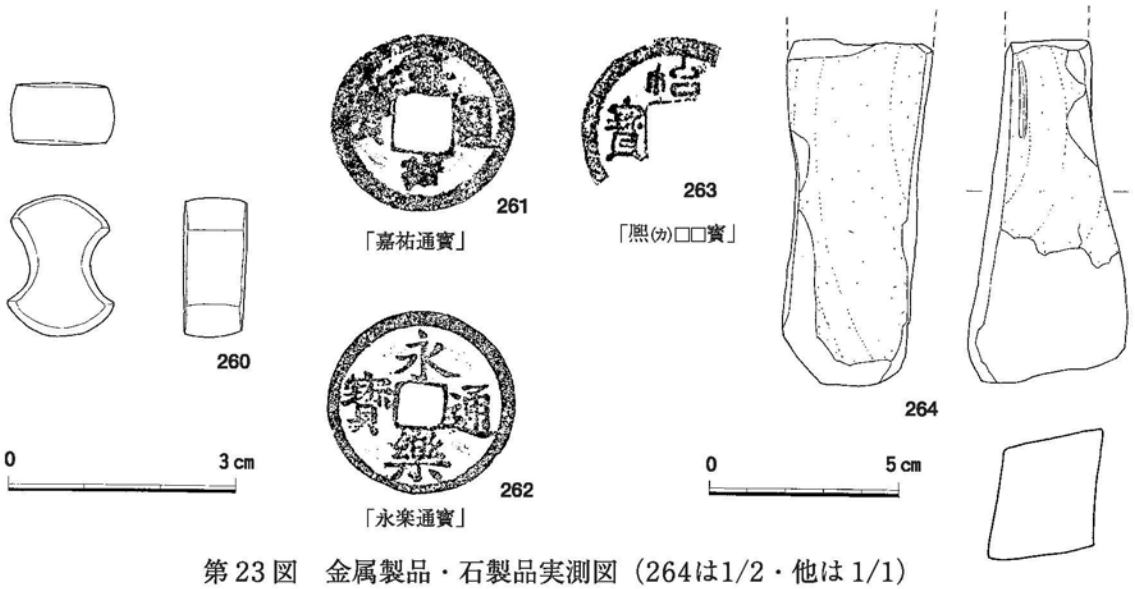
Ⅲ．おわりに

狭い調査区ではあったが、これまでの箱崎遺跡の調査と同様、掘立柱建物や井戸、土坑、柱穴などの遺構を密に検出した。中世の遺構が主体であるが、以下に簡単に整理しておきたい。

中世の井戸は4基を確認した。出土土器からみて、SE-047が時期的に最も古く、12世紀前半頃に埋められたと考えられ、次いでSE-010が12世紀前半～中頃、SE-012が12世紀後半～13世紀前半、SE-011が13世紀中頃～後半に位置づけられ、時期的に重複するものがない。うち、SE-047とSE-010は完全に重複することから、同じ場所に井戸を掘り直したものと考えられ、他の2基につ



第22図　その他の出土土器実測図（1/3・1/4）



第23図　金属製品・石製品実測図（264は1/2・他は1/1）

いても、やや位置がずれるが、時期的に連続することからみて、近い場所で継続して井戸が掘り直された結果を示すものと考えられる。また、井戸SE-047は井戸側に桶を用いず素掘りで、次代のSE-010は桶側井戸となっており、おそらく12世紀前半頃に素掘りから桶側井戸に変化する画期があったものと考えられよう。これらの井戸は調査区の北半に集中し、南半にはみられない。

建物は1棟を復元したが、他に建物にまとめきれなかった柱穴多数がある。扁平礫を根石に用いた掘立柱建物SB-050は調査区の南半に位置し、西区外（現道路）に展開すると想定され、主軸は現在の街区と同一の方位を示す。この建物の柱穴出土土器は12世紀中頃～後半に位置づけられ、井戸SE-010ないしSE-012と時期的に並行している。この前後の時期の建物を確認することはできなかったが、この建物の周囲に特に柱穴を含む小ピットが集中しており、同じ場所に継続して建物が存在したと考えられよう。

確実に中世に位置づけられる土坑は14基である。細かい時期が分かるものが少ないが、掘立柱建物SB-050とほぼ同時期頃に始まり、最後の井戸SE-011が廃絶する13世紀後半頃まで継続して掘られたようである。土坑は調査区の全域に展開している。

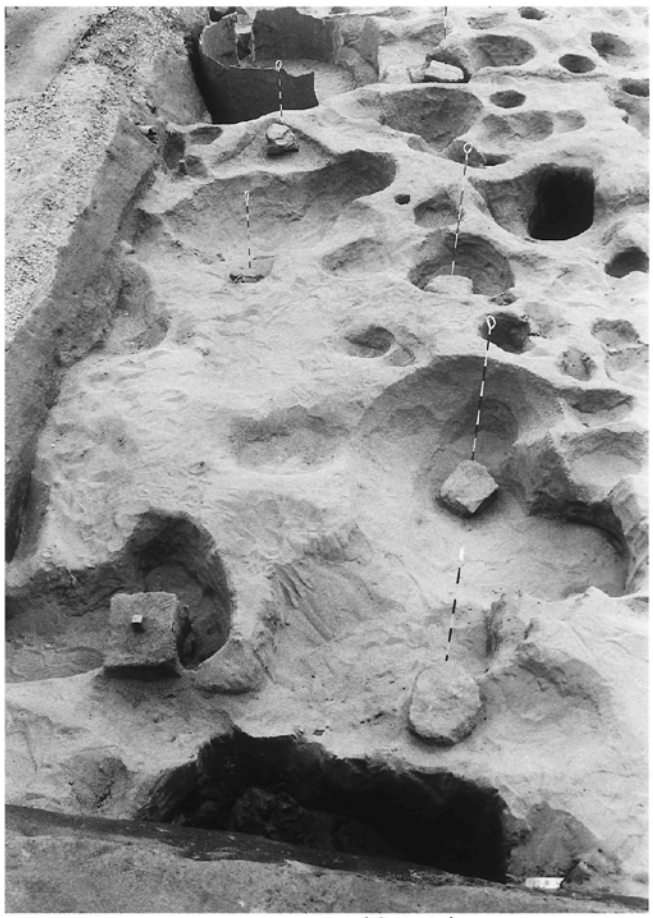
今回の調査では12世紀前半から13世紀後半に営まれた集落の一部を確認し、その前後の中世遺構は確認できなかった。そして限られた調査範囲からではあるが、調査区の南半に建物が、北半に井戸が配される景観が、12～13世紀を通じて継続されたと考えることができよう。

この他、近世の遺構については今回の報告から省いたが、18世紀頃と考えられる溝の一部等を確認した。

図　　版

調査区から西方を望む

１．調査区全景（東から）



２．SB-050（南から）

図版２

１．SE-010（北西から）

２．SE-010井戸側（北西から）

1．SE-011（北から）

2．SE-011井戸側（北から）

図版４

１．SE-012（南東から）

２．SE-012井戸側（南東から）

１．SE-047（北西から）

２．SK-015（南西から）

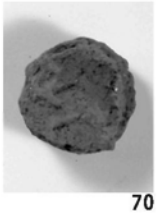
３．SK-006（北西から）

４．SK-023（西から）

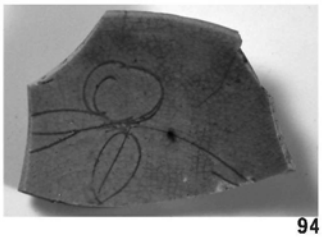
５．SK-030（西から）

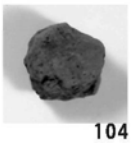
図版 6

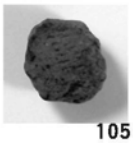
3

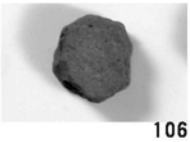

70

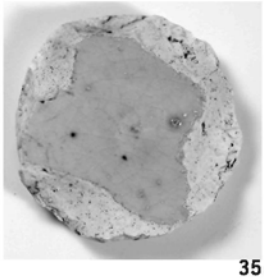
71


94


104


105


106


35

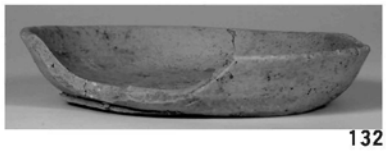
36

110

118

126

114

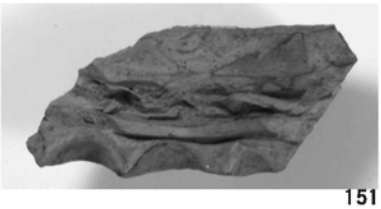

132

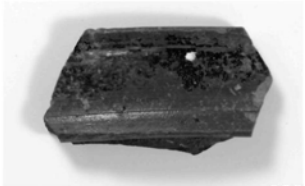
149

133

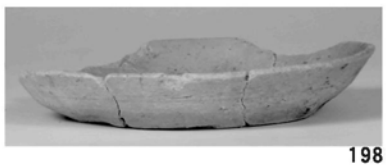
181

150

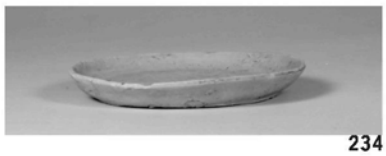

151


220

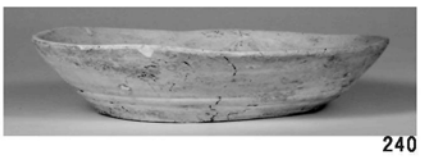
185

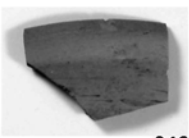

198

196


234

259


240


242

245

249

243

260

出土遺物（縮尺不同）

箱崎遺跡出土井戸側の樹種同定

株式会社パレオ・ラボ
植田弥生

1．はじめに

ここでは、福岡市東区の博多湾岸に形成された古砂丘上に立地する当遺跡から出土した、中世の井戸側２点の樹種同定結果を報告する。

2．方法

材の３方向（横断面・接線断面・放射断面）を見定めて、剃刀を用い各方向の薄い切片を剝ぎ取り、スライドガラスに並べ、ガムクロラールで封入し、永久プレパラート（材組織標本）を作成した。この材組織標本を、光学顕微鏡で40～400倍に拡大し観察した。材組織標本は、パレオ・ラボに保管されている。

3．結果

中世の２基の井戸側２点は、ともにスギであった。井戸側としての樹種利用が知られている針葉樹であり、適材を利用していたことが判った。２点とも、年輪幅が１～２㎜と狭い材で、板目取りの板材であった。

表１　箱崎遺跡第37次・第45次調査出土井戸側の樹種同定結果

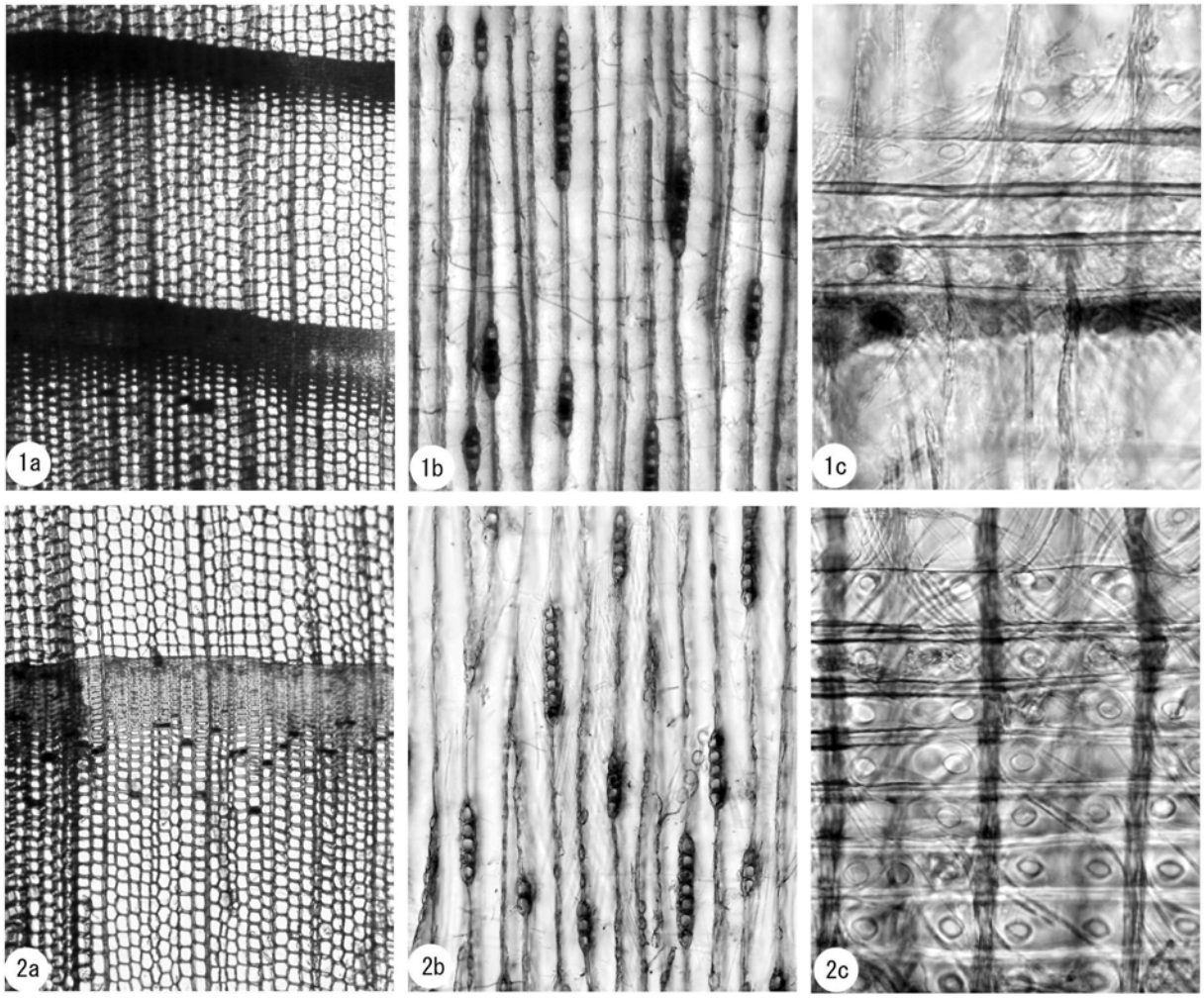
遺構	遺物の内容	樹種	木取り	時期
箱崎37次　SE-226	井戸側　板材	スギ	板目	中世
箱崎45次　SE-012	井戸側　板材	スギ	板目	中世

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の３方向の組織写真を提示した。

スギ ***Cryptomeria japonica D.Don***　スギ科　図版１　1a－1c（37次　SE-226）　2a－1c（45次　SE-012）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材部は量は多く、晩材の仮道管壁は極めて厚い。樹脂細胞は年輪の後半に散在する。分野壁孔は大型で孔口が水平に楕円形に大きく開いたスギ型、１分野に２～３個が水平に配置している。

スギは本州以南の暖帯から温帯下部の湿気のある谷間に生育する常緑高木である。材はやや軽軟で加工は容易である。



遺跡出土木製品材組織の光学顕微鏡写真

1a-1c: スギ(37次SE-226) 2a-2c: スギ(45次SE-012)

a: 横断面　b: 接線断面　c: 放射断面　bar:a=1.0mm, b=0.4mm, c=0.1mm,

報告書抄録

ふりがな	はこざき30
書名	箱崎30
副書名	箱崎遺跡第37・第45次調査報告
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第951集
編著者名	中村啓太郎（37次）　吉武　学・田中克子（45次）
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神1丁目8番1号
発行年月日	2007年3月30日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
箱崎遺跡37次（はこざき）	福岡市東区馬出5丁目（ふくおかしひがしくまいだし）	40130	0116	33°36′46″	130°25′20″	20021213～20030331	493	道路建設
箱崎遺跡45次（はこざき）	福岡市東区馬出5丁目（ふくおかしひがしくまいだし）	40130	0116	33°36′47″	130°25′21″	20040301～20040322	152	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
箱崎遺跡37次	集落	中世	井戸　土坑 溝 埋葬遺構	土器　陶磁器 鉄製品　石製品	
箱崎遺跡45次	集落	中世前期	掘建柱建物　井戸　土坑	土師器　陶磁器 繭型分銅　銅銭	中世前期を中心とする集落
		近世	溝　井戸　土坑	肥前系染付	

箱崎（はこざき）　30

－箱崎遺跡第37・第45次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第951集

2007年（平成19年）3月30日

発行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷　下川印刷有限会社

福岡市東区松島1-46-14